

「コズモ」改題

UFOと宇宙 第11号 昭和50年4月1日発行(年6回刊)第2巻第11号

昭和50年2月28日国鉄首都特別扱承認雑誌第2170号

UFOと宇宙

UFOと宇宙科学の専門誌
UFOs & SPACE
隔月刊.1975
4月号 **NO.11**

月面は円盤の中継基地か 月の不思議な現象を写真で分析
ニューヨーク州の着陸事件 UFOと乗員に関する驚異的事実物語!
UFO情報 / UFO目撃レポート / 科学ニュース
1980年代の宇宙連絡船 東大助教授 河島信樹 (東大宇宙航空研究所)
アダムスキー型円盤、尾道市に出現! <口絵写真と記事>
宇宙・引力・空飛ぶ円盤(完)— レナード・クランプ



空飛ぶ円盤シリーズ

空飛ぶ円盤と宇宙人

黒沼健著

円盤の存在とその出発地をさぐり、古代科学と円盤についてのかかわりあいを興味深く論証す。 三四〇頁 九五〇円

空飛ぶ円盤騒ぎの発端

高梨純一著

アノルドの目撃からワシントン上空の円盤の乱舞まで、円盤研究の歴史と成果をまとめる。 二四八頁 九〇〇円

空飛ぶ円盤の跳梁

高梨純一著

円盤の出現と共に激増する放射能。謎の物質エンゼルス・ヘア等重要にして興味ある事項を網羅。 二四八頁 八五〇円

空飛ぶ円盤実在の証拠

高梨純一著

多くの貴重なデータにもとづき、科学的方法をもって円盤の実在を見事に証明した注目の書。 二四六頁 九〇〇円

ヒューマノイド

空飛ぶ円盤搭乗者

平野威馬雄編

円盤着陸とその搭乗者に関する科学的究明と宇宙人の来訪、及びその活動ぶりをまとめる。 二四〇頁 九八〇円

空飛ぶ円盤の謎と怪奇

黒沼健著

円盤襲撃に関するノストラダムの大予言にはじまり、世界各地における目に見えない宇宙人の攻撃をまとめる。 二六〇頁 九八〇円

空飛ぶ円盤とアダムスキ

久保田八郎編

五五〇円

空飛ぶ円盤実見記

Gアダムスキ・久保田八郎

空飛ぶ円盤のすべて

平野威馬雄編著

八〇〇円

空飛ぶ円盤同乗記

Gアダムスキ・久保田八郎

アポロと空飛ぶ円盤

空飛ぶ円盤の真相

Gアダムスキ・久保田八郎

空飛ぶ円盤は実在する

空飛ぶ円盤の秘密

T・ベラサム・久保田八郎

●東京 文京 本郷5-30 振東141750●

高文社

●京都 左京 百万遍 振京23523●

高価買入!

送り先

〒223 横浜市港南局私書箱3号

横浜洋行 UFO係

- ★日本切手と沖縄切手の単片とシート(シートは特に歓迎)。
- ★業者の最高値で大量買受。
- ★外国の未・済切手(小型は不用)コレクションは大歓迎。外国郵便の封筒よりはがした済切手も入用。
- ★その他の古い物(コイン・紙幣・マッチ票・記念乗車券・初日カバー・ハガキ類・逓信省発行特印付記念絵ハガキ・宝くじ等をお送りください。

特に求む!

郵便に使用された古い手紙の封筒とハガキ(明治初期より昭和20年頃までのもの)。他に戦地よりの軍事郵便物、戦争中の占領地(ビルマ・マラヤ・比島・ボルネオ)等よりのもの、終戦直後の南西諸島(沖縄・八重山・宮古)よりの郵便物等の特に求めます。



- 誠実・親切に買入。代金はスグ送ります。
- 送付の際は折れないように当て紙をつけてください。大量送付の場合はブックごとか小包便で。
- 買上額不満のは7日以内に返金してください。



さよなら蒸気機関車 記念乗車券



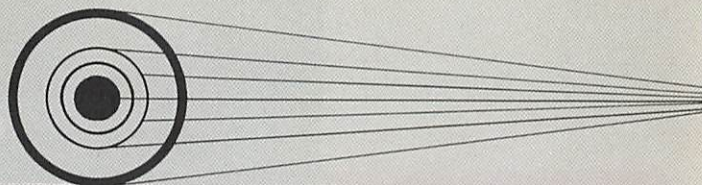
CHERRY



49年観光たばこ おおさか

- 各地で売る記念・観光たばこの外箱をシワ・汚れ・折目のない美品のみ1枚30円で何枚でも買入。熱湯ではがして乾かし、平らにして送ってください。
- 昔の古いたばこの空箱も求めます。戦前・明治・大正時代のもの、旧朝鮮台湾のものなど、宝くじは昭和25年頃までのもの。





<口絵写真>

●カラー オーストリアのUFO(連続2点)/阿蘇のUFO群
和歌山県の怪飛行物体/山形県のUFO編隊—母船から発射?(2点)
アダムスキー型円盤、尾道市に出現!

イラスト 池田雅行
作 図 市川淑一

≡宇宙開発によって明るみに出た月面の不思議な現象を写真で分析≡

葦澤潤一郎

月面は円盤の中継基地か 8

ニューヨーク州の着陸事件 20

ニューベルリン市に2機のUFOが着陸、中から2人の“人間”が出てきた! 驚異の事実談。

テッド・ブリーチャー

UFO情報 27

<国内外の最近のUFO関係ニュースを網羅>

UFO目撃レポート 32

国内の目撃例を図入りで掲載

ブラジルのUFOの残骸? 37

科学ニュース 38

国内外の最新ニュースを速報

UFO研究と語学 43

常岡理太郎

●<天空と大地>科学シリーズ——9 今や宇宙開発はスペース・シャトルの時代!

1980年代の宇宙連絡船 44

東京大学宇宙航空研究所
東京大学助教授
理学博士 河島信樹

原子・銀河系・理解(1) 54

有名な円盤搭乗者による新連載科学記事

ダニエル・フライ

東北、東関東をよぎったUFOの大編隊? 60

アダムスキー型円盤、尾道市に出現! 62

反重力モーターで宇宙飛行が可能/

ソ連の宇宙飛行士、米ソ共同計画の成功を確信 69

東京を騒がせたUFO誤認事件 怪しい物体は手製気球だった 70

連載科学記事

レナード・クランプ

宇宙・引力・空飛ぶ円盤 (完) 71

空飛ぶ円盤は着陸した! 史上名高い事件を考察



オーストリア のUFO

①

②



●1971年5月23日、オーストリア、シュタイエルマルク地方のグラーツ市付近の上空を飛ぶ円盤を、ミュンヘン、インゲニーネに住むルディー・ナゴラさんが撮影した連続写真。①の左上に見える円盤が②では白銀色に輝いて右下に降下している。



阿蘇のUFO群

●本誌第8号5頁に名古屋市中川区の高校生・山田正志君が昨年5月20日に九州の阿蘇山で撮影したUFO群の写真2点を掲載したが、これも同君が写した近接撮影写真。黄白色と赤色の円盤型物体2個が写っている。(名古屋市・志水好夫氏提供。アサヒペンタックスSL・タウマー55mm F1.8・絞りF2・露出時間不明、フジカラーN100)

UFOか?!

和歌山県の怪飛行物体



●和歌山県南部川村の会社員・前山忠一氏(27歳)が1974年10月3日午後8時頃、友人の前田篤男氏(29歳・農業)の家の前で、不思議な光体が飛ぶのを目撃、撮影した。この付近に9月以来しばしば光体が出現するのを地元の人々が目撃しており、3日はこれを予期して前山氏がカメラをセットして待機中、見事撮影に成功した。このときは前田氏とその母堂、妹さんも一緒に目撃している。以下は前山氏の手記。
「9月初旬、南部川村の前田篤男さんが発見して以来、晴れた日に(前田さんは)7~8回見ている。1日に2度見ることもあり、出没時間は午後7時~9時の間で一定していない。方向は撮影位置より南西から北西にかけてで、消える場所は空中でいつも一定していた。見た限りの最長飛行距離はこの写真の約5倍の長さ。明るさは2等星から3等星くらいだと思う。音はなく、スピードも大体一定。この写真では点滅しているが、このほかの場合はほとんど点滅しなかった。私も3~4回見ている」

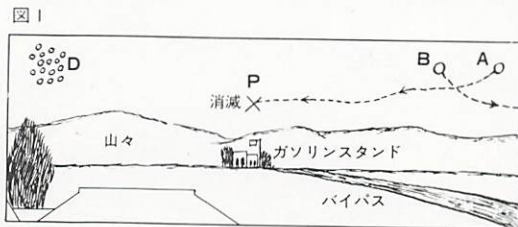
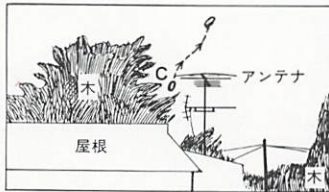
(フジカST701・フジノンF1.4開放・約30秒露光・フジカラーN100・三脚使用)

Ⓐ 山形県南陽市の佐藤富雄君撮影。(ベトリ・オリコールF2.8・開放約1分・フジカラー-N100・屋根にカメラを押しつけて写す)



山形県のUFO編隊—母船から発射？

●1974年10月18日午後6時ちょうど、山形県川西町の高校生・佐田啓二君宅の屋根に登った7人の若い男たちは歓声をあげた。オレンジ色の物体約20個が空中に出現したのである！一同の中にいた佐田君の同級生・佐藤富雄君(17歳)の報告によれば次のとおり。「目撃した物体の数は20機ぐらい。6時から8時までの間に見えたり消えたりしたが、母船らしき物から数機の小型円盤が出るのも見えた。7時頃、図1のAに位置していた光点が突然左に移動し、真東で消滅。少したってBが右に移動して停止。7時30分頃からDあたりに約10~15機の光点が集まって、同じ動きを示していた(これは自宅へ帰るときも見えていたが、帰ってからどこへ行ったかわからなくなった)図2の光点が点滅しながらゆっくり上昇。こちらから見えてアンテナの真上あたりに止まった(写真Aがその状態を示す。写真Bは佐田君の弟の光雄君が同じ場所で19日に撮影したもの)。これらの光点は18、19日だけではなく1週間ぐらい同じ時刻に出現していたが、一時出なくなり、再び目撃。今も(今年1月9日現在)出現している。私を知っているだけでもかなりの目撃者がいるし、米沢上空に円盤の通り道があるという人もある」 図2



Ⓑ 山形県川西町の佐田光雄君(中2)が19日に撮影。(キャノンET・キャノン45mm F1.9・開放約15秒・フジカラー-N100)

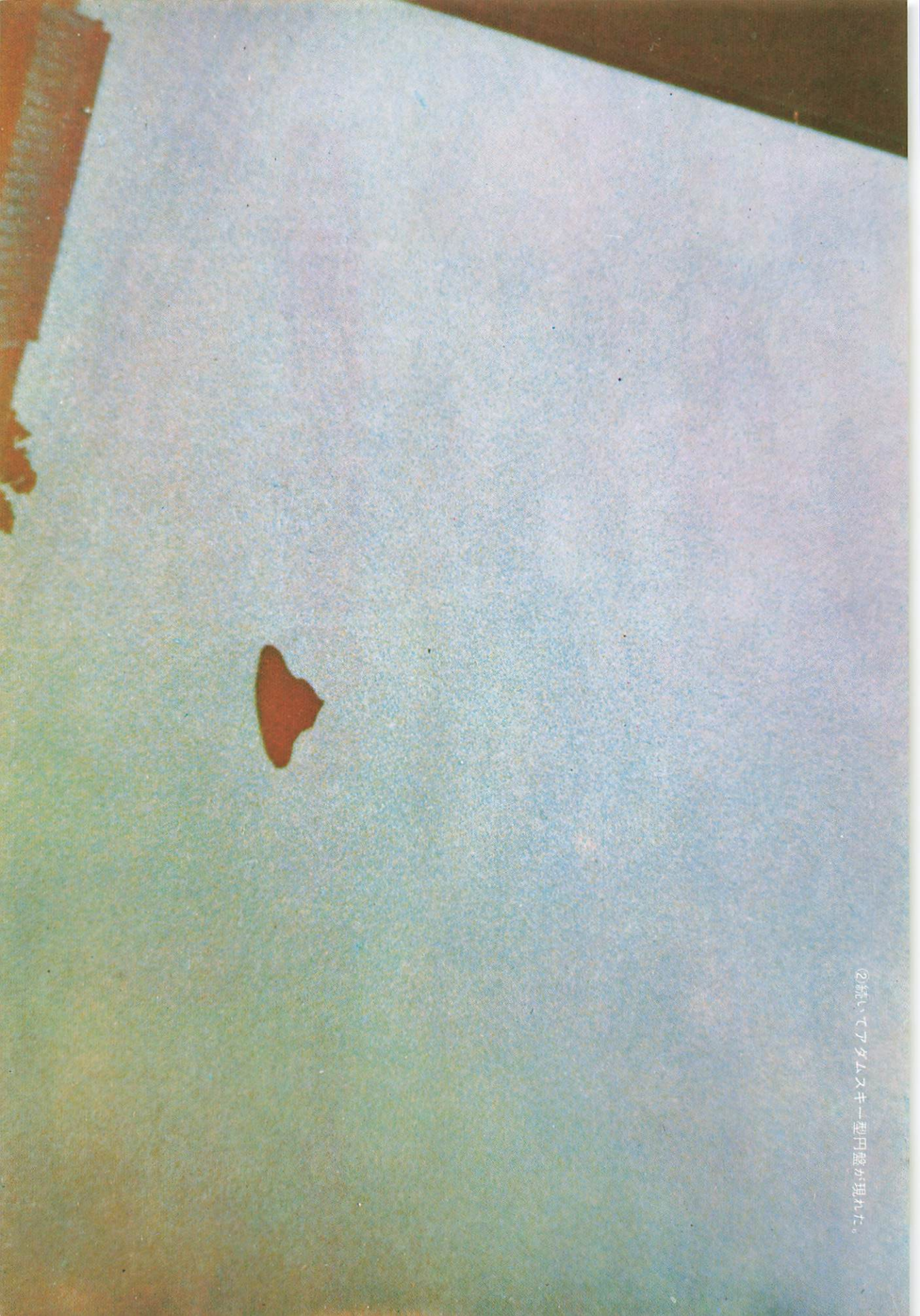
アダムスキー型円盤 尾道市に出現!

高校生・藤松和彦君が撮影

〈解説記事は62頁〉

① まず巨大な葉巻型物体が出現。





②続いてアダムスキー型円盤が現れた。



月面は円盤の中継基地か

● 菲澤潤一郎



宇宙開発によって明るみに出た
月面の不思議な現象をNASA
発表の珍しい写真によって分析
する

人類史上、初の人工衛星スプートニク1号が打ち上げられて、宇宙時代が開幕してから、すでに一八年間の歳月が経過してしまった。そして一九六九年七月にアポロ11号が月面に地球の人間を乗せて軟着陸に成功してしまい、もはや現在では宇宙開発は月から他の惑星に焦点を移しつつある感がするのだが、はたして我々は月に対して「理解」しつくしてしまったといえるのだろうか。

空飛ぶ円盤を研究している者にとっては、宇宙の神秘は、遠い木星や海王星への探査機の打ち上げより、もっと身近なこの地球の大気圏の内外にまだ豊富に存在している。今日まで絶えることなく発生し続けている空飛ぶ円盤の目撃事件は、昨年のギャラップの調査では、アメリカだけで一千五百万件のほり、その中で、飛行機の誤認や気象現象等で説明のつかない確実な事件が、一、四七四件あると報告されている。このことは、当局の発表する『常識が安心する宇宙の様子』以外の何かがあると我々は感じざるを得ないのではないだろうか。

●月にはUFOが

立ち寄っているか？

近年は日本でもUFO事件が多発しているといわれているが、その頻度はおそらく、世界のどこかで毎日だれかが円盤を目撃している、とらってもよいほどのものである。このように常

に地球へ飛来して来る円盤の乗員は、他の惑星から来るにしろ遠い太陽系から来るにしろ、当然地球の衛星である月にも立ちよるということは十分考えられるし、あるいは恒久的基地を建設しているかもしれない。これは、天体望遠鏡によって地上から観測される月面の様子にも、それが暗示されるような現象が少なからず存在していることから、まったくの空想とはいえないのである。この詳細については、以後のそれぞれの月面写真において述べていくつもりである。

また、それらの中には、月の自然条件が、我々の知っているような死の世界ではないのではないか、ということも含まれている。つまり、月には地球よりは少ないが大気があるのではないか、あるいは水もあり、したがって植物も存在するかもしれないといった可能性も否定できないのだ。

空飛ぶ円盤と同じく、天文にも多少の関心を持つていた私は、これらのことが天文観測史上に多数散在していることを知り、ますますこの仮説に自信を深めているのだが、このようになぜ一般の天文学や宇宙開発の公式発表データと矛盾するようなことをいうのかというと、それはすべて宇宙の真相であるUFOの存在と関係し、同じ理由がそこにあるからだと思っているためなのだ。

「米航空宇宙局(NASA)は、アポロによって月に人間を送り込み、土のサンプルさえ持ち

帰っているが、彼等は今まで人類の知らなかつたある事実をつかんだのではないか」と私は前に述べたような理由から常々思っていたので、スウェーデンのUFO研究者であり、またスカンジナビア地区に大きなUFO研究団体を組織しているハンス・ペテルセン氏から「NASAの月面写真を配布する」という知らせがきていると聞いたとき、さっそく申し込んだわけである。氏は長年の円盤研究活動で、各国の政府や国連などの重要機関に、さかんに世界的なUFOと宇宙人問題の研究をするよう働きかけており、それらの中に当然NASAも入っていたわけで、本人が空軍の要職にある関係もあって、NASAの科学者とも知り合いがいて、宇宙開発によって得られた資料を、自分の円盤研究にも参考にすることができたいのである。

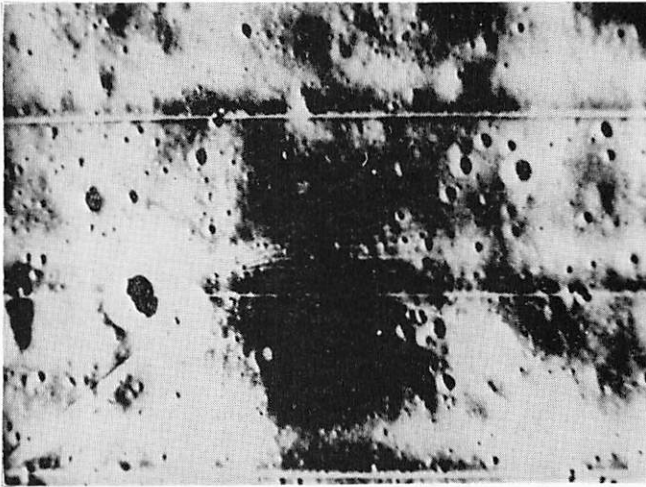
ともかく送られてきた資料の解説書には、NASAがアポロやルナ・オービター(探査機)によって写した三六〇〇枚の月面のマイクロフィルムを、ハンス・ペテルセンのグループが二年間の調査、研究をかけて抽出したものであるとされている。日本へ送られてきたのは、そのうちの五〇枚で、白黒のスライド・フィルムになつている。それぞれの写真の説明には、撮影された年・月と、宇宙船の名、そしてNASAのフィルムナンバーがちゃんと付けられ、その写されている範囲は何キロであるか明示され、また位置は経度、緯度で明記されている。ただ一枚だけソビエトの宇宙船が撮影した月の裏側

の写真があつて、これにはそれらが不明となっている。また図解の写真が一枚ある。ここでの説明には五〇枚のスライド・ナンバーを使うこととし、それはNASAのマイクロ・フィルム番号ではないことを、あらかじめおことわりしておきたい。

● 尖塔を写した

驚くべき月面写真

月面写真をUFO研究家が調べて抽出すると



No. 2

いうことは、当然「月における円盤や宇宙人の痕跡」ということであり、またハンス・ペテルセンは、月の湖の存在や植物の生育の可能性にも調査の範囲を広げている。

ともかく順を追って紹介していくことにしよう。

No. 1は、赤道近くの静かの海の南に孤立するR（半径）三〇キロメートルのマスケライン・クレーター（火口）の南方の地点、東経三四度四分、北緯三度一分で、月面地図上では第一象限のCfに（以下略して一Cfのように表記する）位置する。範囲は約一三・六キロメートル四方となっている。この右側の中央部の小さな火口がNo. 2で二キロ四方の拡大となり、この火口から一方向に何か放射状の軌跡が認められる。ハンスは、ちょうど砂漠地方をトラックで物資を運搬した場合を航空写真で撮影したように見え、人工的と思えないと言っている。

（写真No. 1は省略）

この地点の近くには月面探査機サーベイヤー3号、5号が着陸し、またアポロ11号が軟着陸しているが、いずれも移動できるような車は持っていない。だから、この写真のように数キロにわたって六本ものスジを残すことは考えられない。我々人類以外のしわざだろうか。この写真は一九六七年二月に孫衛星ルナ・オービター3号によって撮影されたもので、ちなみにNASAフィルム番号はHR〇〇六である。この写真のように電送されたもの場合は、等間

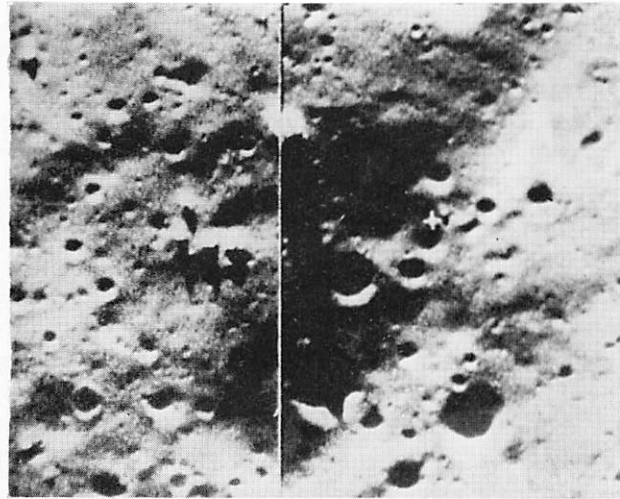
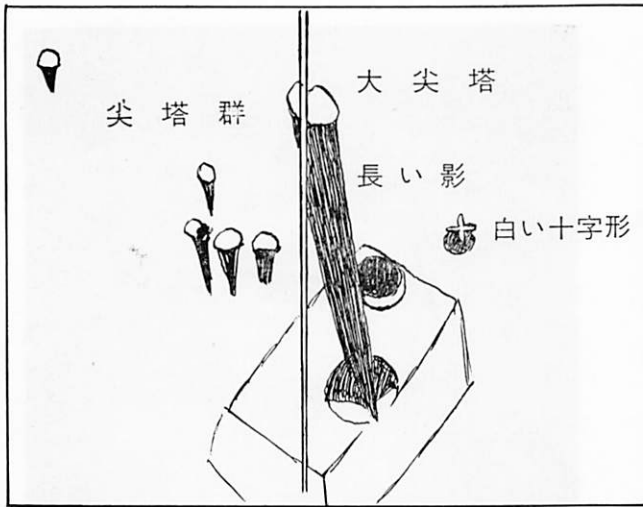
隔に直線が入っているが、これはシステム上の映像で、意味はないものであることはおわかりと思う。

図解の説明がNo. 4でされているNo. 3の写真は当時一般にも報道されて有名になった「月面の尖塔」である。一九六六年一月、ルナ・オービター2号によって撮影された、一Dfの

アリアーデウス溪谷の南の高地の部分で、範囲は横二二八・六メートル、縦一六七・六メートルである。この写真から米（右上）ソ（左）の科学者が描いた見取り図でもわかるように、八本の塔と、十字形の白いマーク、そしてさらに写真を見ると、長方形のくぼ地が中央下にある。塔の最長のものは高さ四六メートルあり、しかも他の塔の配置が幾何学的になっており、とても自然現象によるものとは思われないという。なお、残念ながらこの写真には八本の塔のうち二本がはみ出して写っていないが、当時発表されたものには八本確かにある。

● 月には湖水があるのか

次にNo. 5から9までは、三HcにあるR四八キロのピデロ火口周辺の写真で、異様な火口底の地形や、山腹に走る通路状の帯、底地から高地へ登っている石の跡、あるいは、垂直に切り込まれている巨大な石等が写っているが、あまり明確ではないので省略するが、No. 8の火口

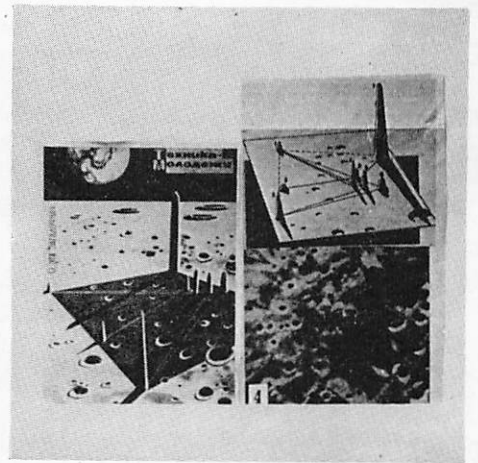


No. 3

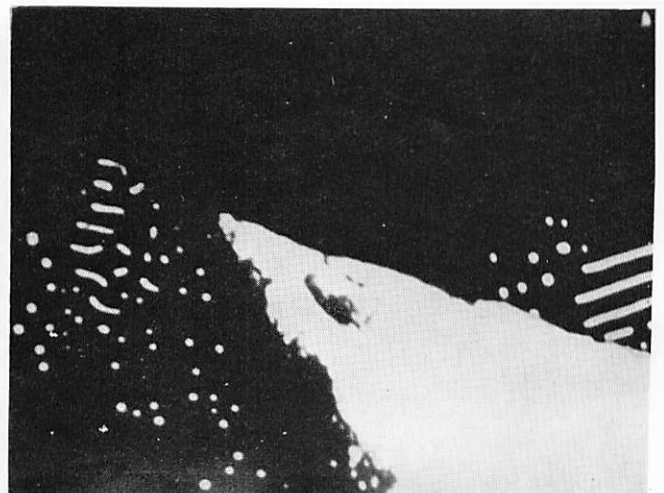
底中央山の山頂の拡大写真に、石のようなものがあり、この物体は他の写真では大きさや位置が変わっているというので取り上げておくことにした。写真中央の白の三角状の部分に目玉のようにある物体である。暗い部分の光斑は何か不明。

この火口の近くには月面観測史上いろいろな活動が見られ、たとえば、しめりの海の北にあるガッサンディ火口では、一九六六年四月三日に西南外壁に、サートリー、ムーア等の天文学者が雲のようなものの発生や赤斑を見、また閃光などの報告もある。またシッカード火口では濃い霧が観測され、色調が変化する部分があり、私は植物の葉や花によるものではないかと思う。プリアルドス火口やルビニエツキ火口の山腹で多数見られるという、太陽のさしかげん

No. 4



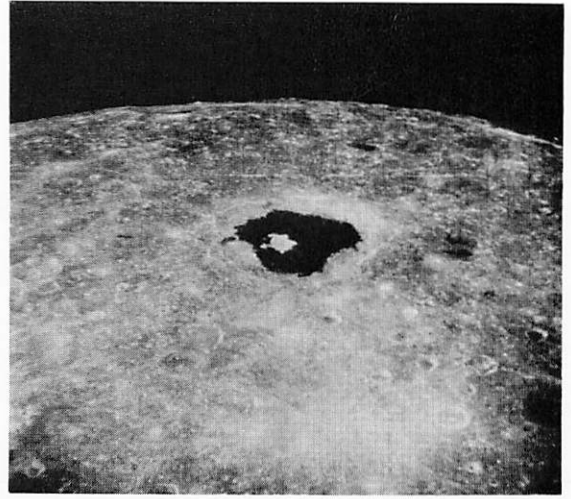
No. 8



で明るく光る白斑は、水たまりの表面への太陽光の反射ではないかと思っている。

月にも多量の水が存在するのではないかと思わせる最大のもは、何といっても月の裏側、つまり地球側からは見えない面にある、R二四〇キロにもなるツイオルコフスキー火口であろう。これがNo.10から13にかけて紹介されている。いずれもすでに新聞や専門雑誌に出たことがあるものなので、No.11だけにとどめるが、ごらんのようにその火口底は、他の形とはまったく異質の、光を吸収して真黒に見える物質で満

たされ、中央山だけ白く見え、まるで「月の目玉」のようである。日本の天文雑誌でこのカラーによる近接写真が公表されたことがあるが、その黒く見える物質は、実は、あわいグリーンで、その水底(?)には大小のクレーターがすけて見えており、まさしく湖といわれれば地球のどこかの写真だと思ってしまうようなものであった。この物質が何であるのか、当時の天文雑誌が読者に質問を出したので私は湖説を解答したところ、次号でこの説だけが採用されていた。



No.11

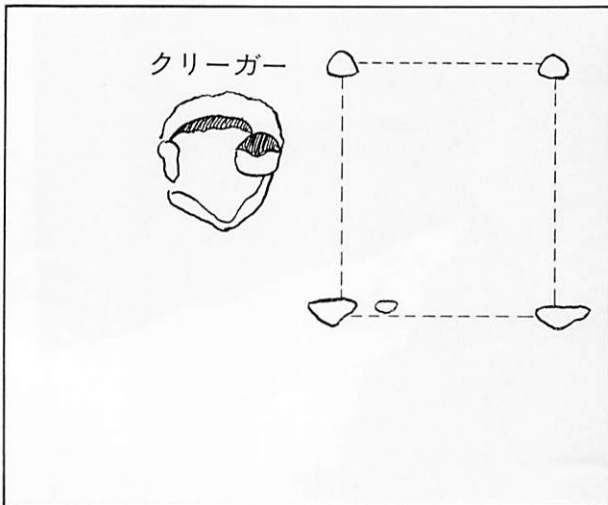
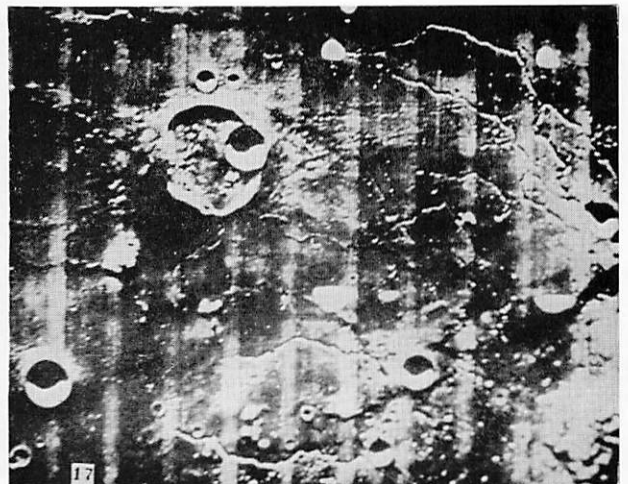
No.15

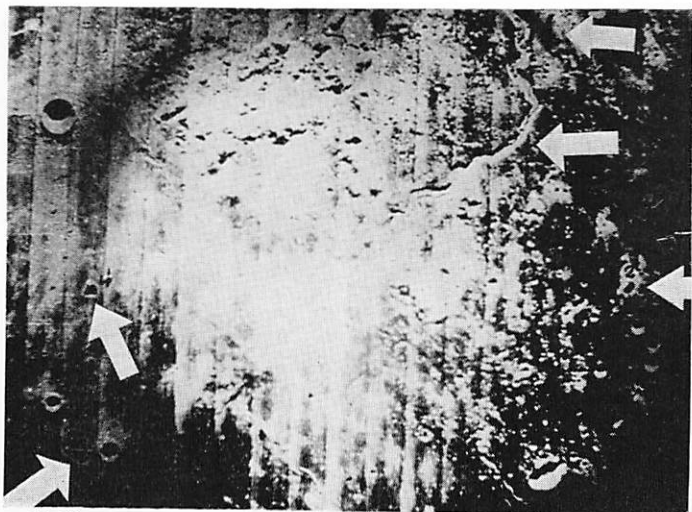


●地下基地への入口?

No.14と15は三―Hcにあるマリウス火口周辺で、平地にいくつかのクレーターがあり、それらの内壁が垂直に地下へ向かっているの、地下基地への宇宙船の入口ではないかといわれているものである。不思議なことにその火口のふちの峰が、ほとんど高さがなく、穴だけが平面に

No.17





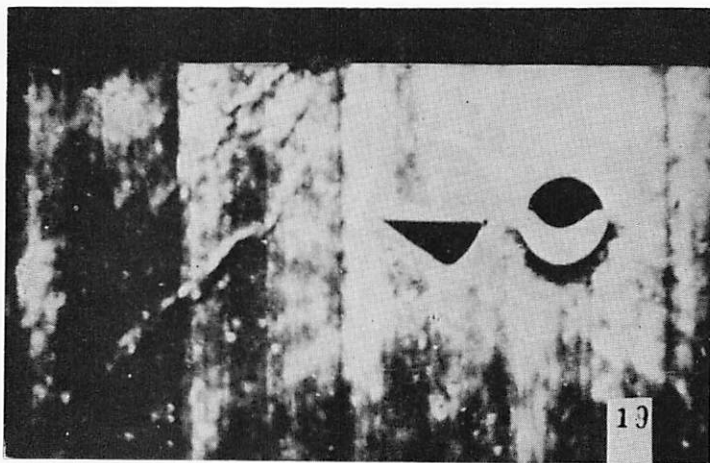
No.18

あいているという感じで、自然現象としては不自然に思われる。

No.16は月の表側北東のへりにあるラポアジェ火口の写真で、火口内を長い深い谷が続いているが、問題のドームが不明瞭なので写真は略す。

さて、次の四枚は、地球からも水素ガスの噴出や青白い光の発光など、多くの現象が観測されている二-I gに位置するアリストアルコス火口近辺である。この地点の発光はアポロ11号でも発見され有名になったが、この写真はそれより二年前にルナ・オービター4号によって撮ら

No.19



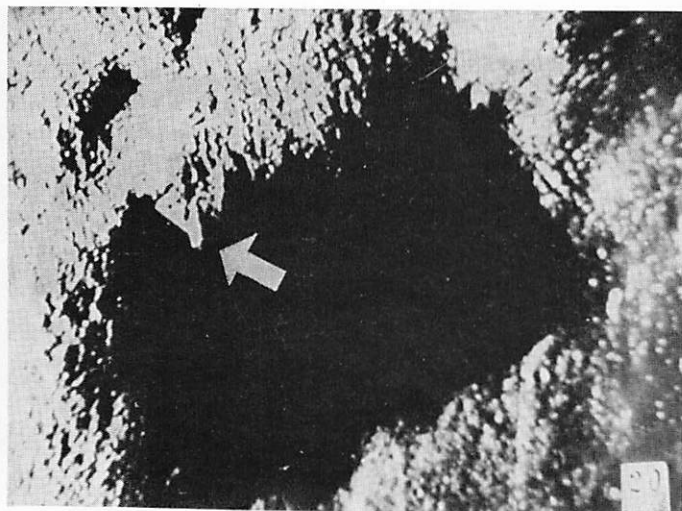
19

れたものである。

まずNo.17には、アリストアルコスの東北方にあるR二四キロの二重火口クリーガーが中央左上に見えている。その右手に約五〇キロの間隔で正方形に位置する丸味をもった三角形の白斑が四個あるのがわかるであろう。これが地表にあるのか雲のように上空に浮いているものなのかは不明であるが、深いミゾ(川?)に沿っていることから、水面だとすれば何かダムのようなものとも考えられる。ともかく配置といい形状といい、人工的なものを思わせる。

No.18はアリストアルコスの西方、シュレーター

No.20



20

・バリーの周辺で、ハンス・ペテルセンは、地球のジャングル地帯の航空写真に非常によく似ていると言っているものである。確かに複雑な地形が、上中央少し右より左下へ流れる幅四〇〇メートル、深さ一四〇〇メートルという巨大なシュレーター・バリーの両岸に展開している。範囲は三一九キロと八一キロである。この写真の左と左下にそれぞれ4、3のマークが付けられた不思議な三角形がまた現れている。前の写真では白斑であったが、この地区では黒斑である。次のNo.19は黒斑3の拡大であるが、その右のクレーターも実にまんまるの形をしている。黒い三角の底辺はほとんど完全な直線で、

自然現象によってできたものとは思われない。さて、No.20の写真は、先のNo.18の中で2のマークが付けた部分の拡大で、六・八キロと四・一キロの範囲にまで引き伸ばされている。周囲の白く写っているところは、まさにジャングルの木が密集しているようである。そして中央部の黒く見える部分がハンスは湖であると言っている。そしてそのへりの左少し上に、何か人工的な白いサン橋状のものが湖面向かってつき出ているのだ(矢印)。この橋の上から月の湖をながめたなら、いったいどんな景色だろうか。ボートでも浮かべてみたいものである。

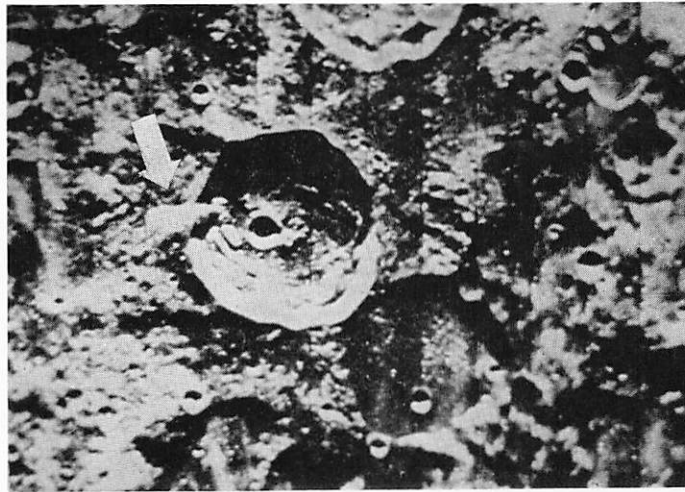
●巨大な工場の煙か

「月には工場がある」と思わせるのがNo.21、24などの写真である。ハンスのこのスライド・シリーズには、月面から煙が立ちのぼっている何枚かの写真がある。月には火山活動があるのだろうか。望遠鏡による観測でも、赤色ガスの噴出等の現象で火山活動と思われるものが、先のシュレーター・バリー、アリストタルコス火口、プラトール火口、アルフォンスス火口、アルフラガス火口等で認められてはいるのだが、最近の研究では否定的な傾向がみられる。昨年、天文学者のアンダーソン博士は『今日の物理学』誌上で、放射性原素の含有量や表面熱流量から月の中心部はまだやわらかいかもしれない

が、月表面近くでは、この三〇億年間、火山の噴火活動は起こっていないはずだと発表しているのだ。

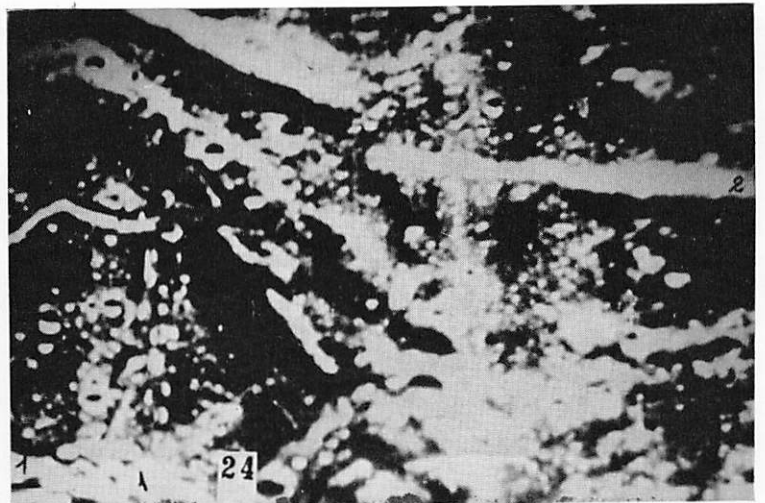
このように、月には火山活動が起こっていない

No.21



ということになれば、いったい、この写真の煙は何なのだろう。No.21の中央左寄りにある火口は、三―Icに位置するR三九キロのヘンリー・プロスベで、一九六七年五月にルナ・オービター4号が写した写真である。火口内、左寄

No.24



りのところ、しかも噴火口ではない部分から、少し扇状に上方にひろがりながら煙があがっている(矢印)。ハンス・ペテルセンの説明には、煙が出ている場所の近辺には、あたかも巨大な工場のようなものがあるといっているが、確かに何やら細長い工場の屋根とも見えるものがある。

No.24にはもっと明確な煙の柱が、中央少し上の小さな火口から画面の右はしにまで立ちのぼ

っている。場所は月のへりに近い、嵐の大洋のふち2—Jg、R八八キロのバスコダガマ火口が画面の左下に見えている。まさに煙は何千メートルも、ほとんどまっすぐに立ちのぼっているではないか。宇宙人がたき火をしたくらいでは、こんな煙は出ないだろう。宇宙船建造のための溶鉱炉から噴き出しているのだろうか。それは、この場所に我々地球人が降り立ってみなければわからないのだ。月にはまだまだ不思議なことが存在している。

No.22、23には、地下への入口のような幾何学的形状の穴のある火口とドーム、トンネルの入口、ダム等が写されているが、明確ではないので省略する。

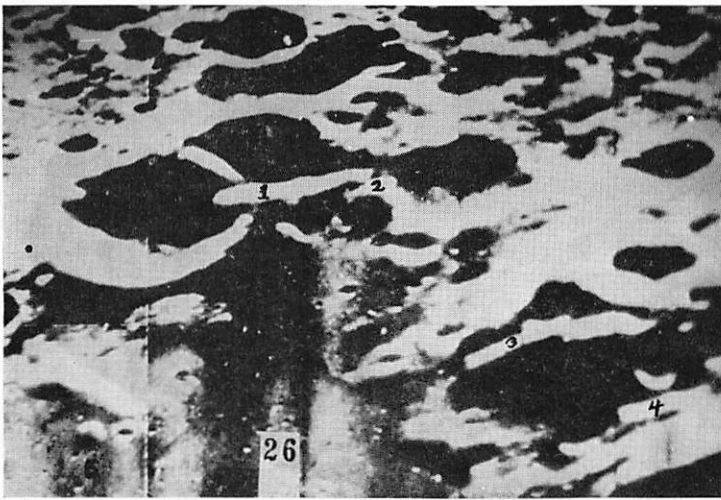
●月の裏側の 不思議なドーム群

さていよいよ月の裏側にまわってみよう。こは地球からは絶対に見えないところで、宇宙船で行って月のむこう側へまわらなければ観測できないということは、すでにおわかりだろう。写真を撮ったのは孫衛星ルナ・オービター5号である。モスクワの海と名付けられたこの地点は、北緯二五度、東経一四五度近辺である。だいたい月の裏側はこの写真のように地形は表側より複雑で、ほとんどが大小無数の火口がひしめいている。No.26は25の拡大で、不思議な物体がはっきりわかる。画面の長い一辺が約二

〇〇キロメートルの範囲で写されているわけだが、この中に四つの宇宙船らしきものと、一個の奇妙なドームが見られる。

画面左寄り少し上方の火口峰の右に、月表面より少し浮かび上がって細長い物体がある。これには1のマークが記入されている。その右下に、2のマークが付けられた小さなオタマジャクシ型の物がある。これらは何か雲のように見えるが、もちろん既成の科学では雲の存在は考えられないわけである。ましてや画面の右下に

No.26



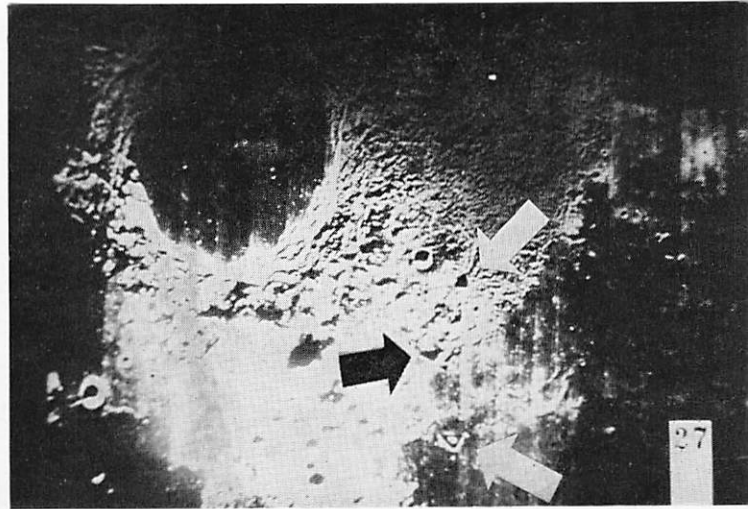
それぞれ3、4のマークが表記された二つの物体は、その両端がちよん切られたように長方形になっており、雲ではない。何であろうか。それらは火口壁の上空に浮いているのだ。何千メートルもある宇宙母船であろうか。ともかくこれらも自然のものではない不思議な物体である。さらに画面の左下に、5のマークで示されているドームは、その頂点に穴があいている。このようなドームは月の表側にも望遠鏡で多数発見されており、あるものはその消失、移動が観測され、人工的建造物ではないかという説もある。たとえば一—Ehにあるリンネ火口は、現在、5のマークのドームのように頂上に穴があるが、一九四七ころにはまったく消失していたものであり、一九〇〇年からの変化が、天文観測史上記録に残っているのだ。

●謎に満ちたプラトール火口

月で最も変化が観測されるのが、二—FiにあるR九六キロメートルのプラトール火口であろう。No.27、28、29、38、39、40の六枚に、ルナ・オービター4号が、日時を異にして二度にわたって撮影した火口周辺の様子がある。同じ場所を撮っているにもかかわらず、地形の変化が見られるのだ。観測記録にも、ピッカリングという天文学者が七〇個もの光点(私流に言えば水面)、あるいはモヤの発生、明暗の変化、閃



No.28



No.27

光、霧、またロウという天文学者は火口底がうろこ雲のようなものにおおわれたのを観測したというのまでであるが、ともかく写真を見てみよう。

No.27の左上方寄りにある丸い黒い部分が、アルプス山脈の東端にあるプラトー火口である。画面には火口の右山ろくに非常に複雑な地形がひろがっているのが認められるだろう。ハンスはやはりこれもジャングル地帯で水が豊富にあり、植物が成育していると説明している。ところがこの地帯、画面の中央から少し右下方に三つの黒い三角がまた現れている。しかも一番下のものには、その中央に丸い白いものがある。この部分の拡大がNo.28で、さらにそれらが明確にわかるだろう。不思議なことに、それらの三角には、ふちがあつて、まわりをかこんでいるではないか。拡大写真にはその他にも不思議な地形、つまり三角の黒い部分がダムのような水面だとすれば、水路と思われるような黒い細い線がいくつか認められる。これらはいったい何なのだろう。形状はとても自然現象とは思えず、それらがふち取られている様子などは、あたかも堤防でかこっているようではないか。

さらに奇妙なのは、この同じ地域を別の日に写しているNo.38には、これらの三角の地形が消失し、そこには白い屋根のような空白が残っているだけなことである(矢印)。水がどこかに流れさったのか、あるいはそれらが、何か移動する物体であったのか、謎は深まるばかりであ

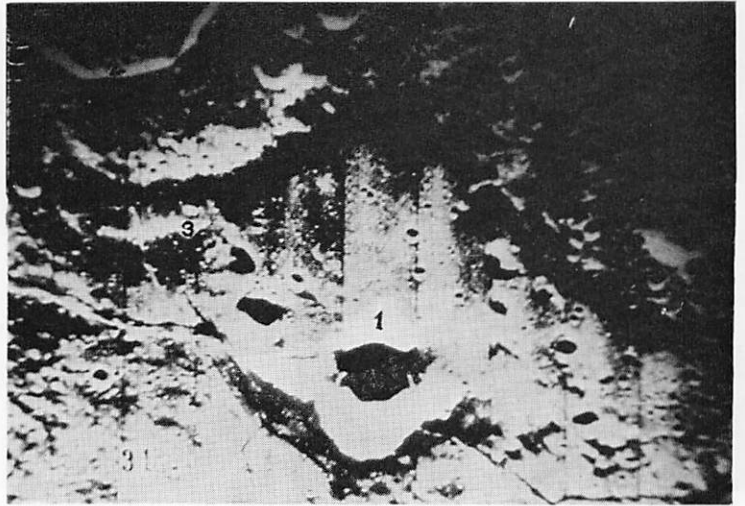
る。

No.29、39、40にはこのプラトー火口壁付近の複雑な地形が写され、ハンスの説明では、山ろくから火口峰の下を通って、火口底へ出る多くのトンネルがあり、その入口が見られると言っているが、スクリーン上に巨拡大しないとよくわからないので略すが、写真でもよくわかるのは、太い川のような流れが山ろく途中で、何かツボのようなもの——ハンスは水力タービンではないかと言っているが——の中に流れ込んでいる様子が、No.40ではっきりわかると思う。確かに下中央から上方のプラトー火口壁に向かっている白い流れは、途中のツボが横たえられているような形の中へ消えている。はたしてそれが人工的なものなのかは断定できないが、死の世界といわれる月には有り得べからざる地形といえるだろう。

● 不思議な灯火群—— 月面に都市がある？

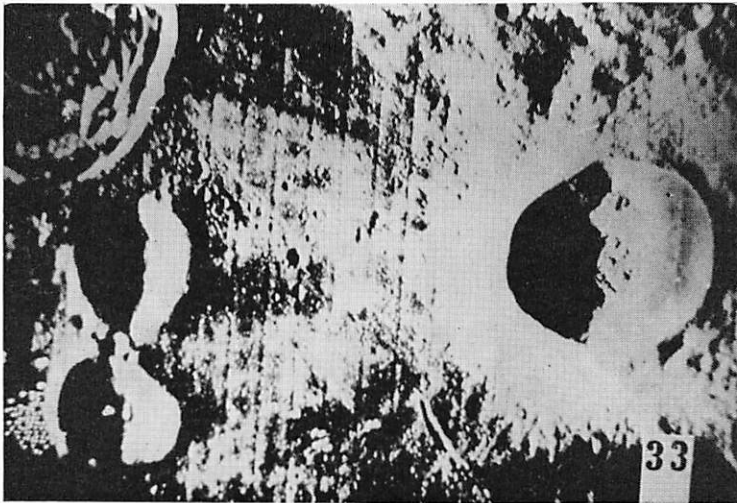
人工的なトンネル、もしくは地下への入口と思われる明瞭な写真がNo.30、31である。No.32を含めた三枚のカットは、三—J eにあるR約三〇キロのダモアゾード火口外壁である。月の東のヘソにある重複火口で、これもルナ・オービター4号が写している。最も明瞭なNo.31を紹介しよう。画面の中央下方にぽっかりと口をあけているのがそれである。この口のようなもの

ふちに、左右対称的に何か白い突起が門のように出ているのが認められる。まわりを高地が唇のようにかこんでいる。この写真の撮影範囲は一三九×九八キロであるから、入口といっても一〇キロメートル以上もある巨大なものだ。画面の左上に少し見えるのがタモアゾード火口壁であるが、そのずっと下方に、3のマークが付けられたところから、煙がふき出している。またこの近辺の別の場所を写したNo 32にも煙が噴き出ており、月は死んではおらず、実に活発に活動していて、変化に富んだ世界であると言わ



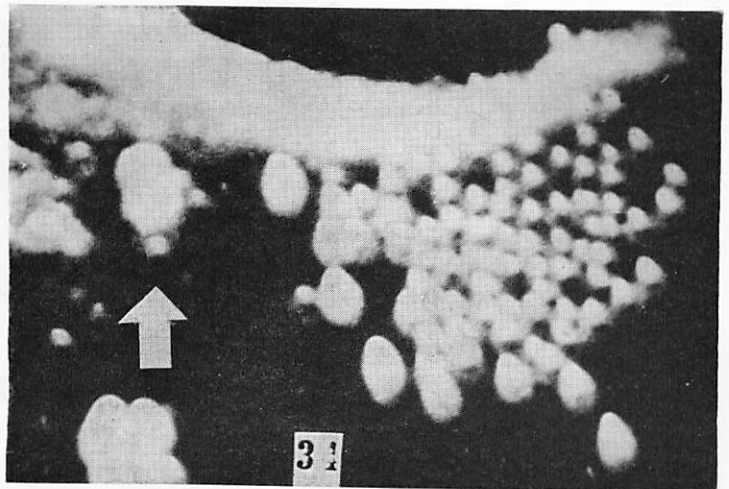
No.31

No.33



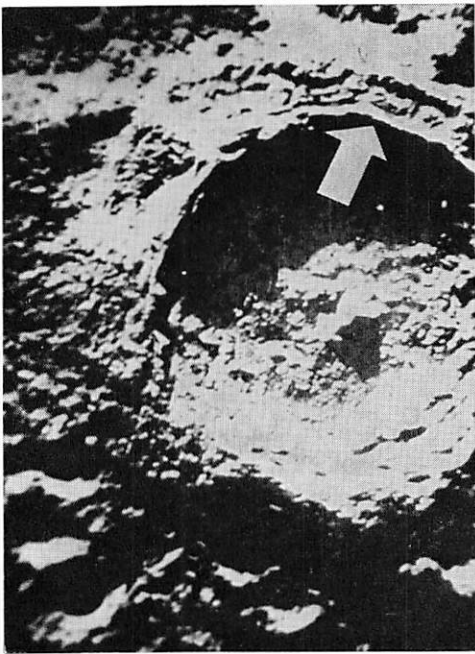
ざるを得ない。
さらにNo 33を見ていただきたい。四つの明瞭なクレーターが写されている。右にあるのがR一一キロのデオニシウス火口で、左方は上からリッター火口、そしてリッターD火口とC火口である。場所は一一Dfで、左上のリッターの主火口は三九キロの直径といわれる。問題になるのは右のデオニシウスと左下のリッターC火口である。これらはそれぞれ拡大され、No 34、35が写されている。

No.34

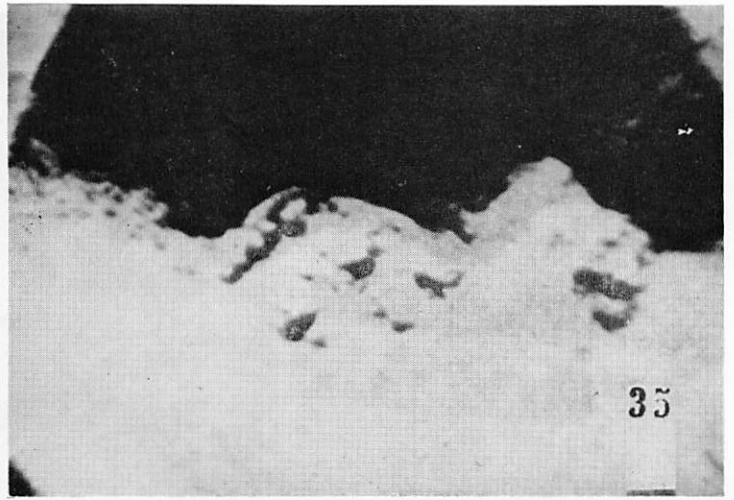


まず、No 33でもわかるように、デオニシウス火口底に何か奇妙なものがあり、35でより明確となるが、この物体についてはNASAの詳細な月面地図にも記載されていないとハンス・ペテルセンは説明している。ちょうど石をストーン・サークルのように配置しているように見えるではないか。

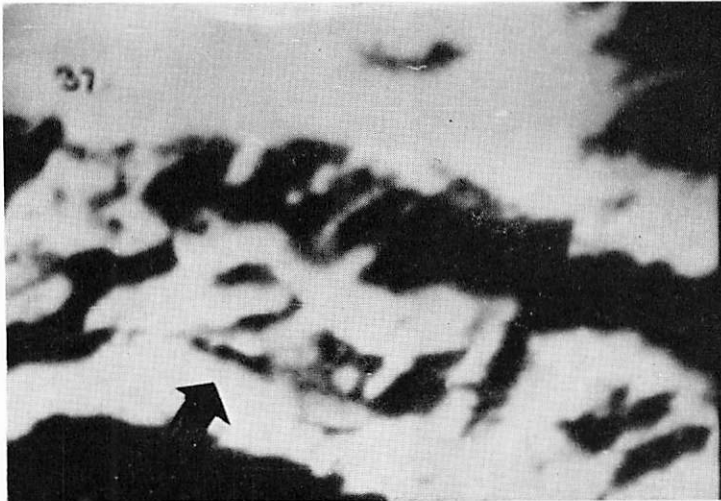
次にリッターC火口壁の外側、No 35では左側に無数の光点群が認められるだろう。この部分を拡大したのがNo 34で、画面の天地が九〇度変わっているが、上方の黒い弧がリッターC火口



No.36



No.35

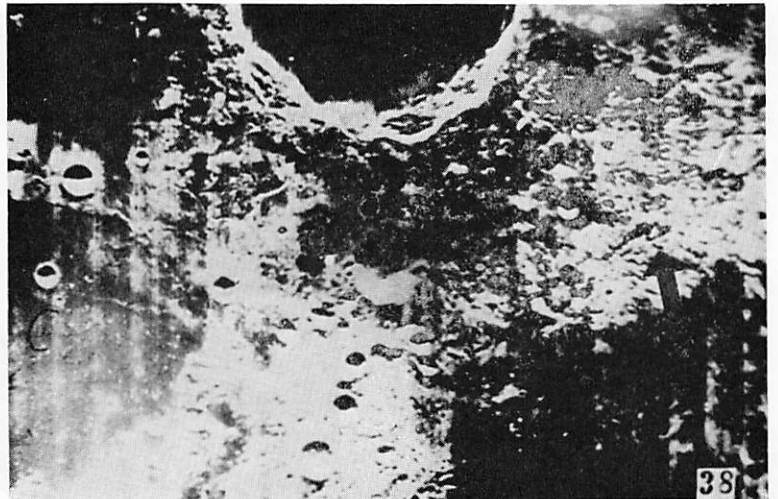


No.37

である。この拡大写真に祭のちようちん行列のようにみえる光点はいったい何だろうか。ハンスの説明によれば、それぞれの光は綿か雲のようで、よく見るとその光の雲状の中から、金属製と思われるチューブ、つまり鉄管のようなものがつき出ているという。そういえば左にある大きな光からそれらしきものがこちら側につき出しているようにみえる（矢印）。

これらの光斑が何であるのかはわからないけ

No.38



れども、私はアポロ10号が月を回っているときヒューストンと交している通信の中に、ヤング飛行士が報告した次の言葉を思い出す。

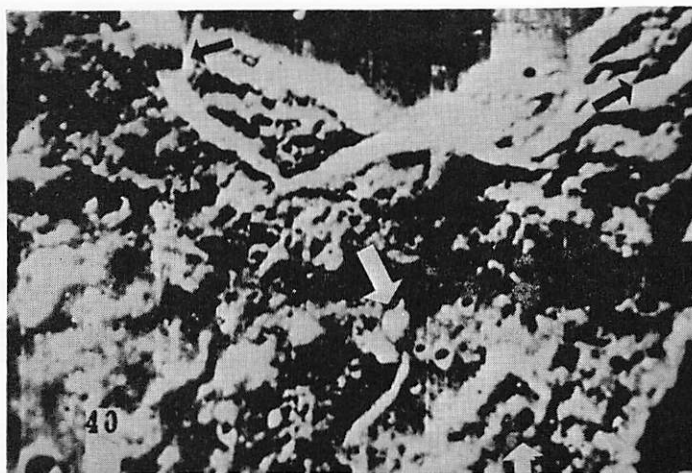
「月の裏側の一部分はクリスマス・ツリーのよう

に光っている……」

彼がどのようなものを見て言ったのかは我々にはわからないが、このNo.34のような情景だったのかもしれない。あるいは地球の都市の夜景

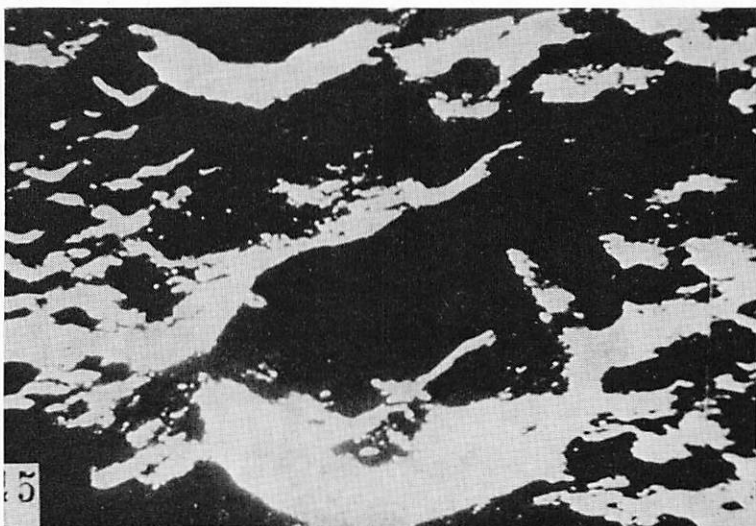
を上空から見たときちようどクリスマスツリーのように見えるのと同じように、ヤング飛行士たちは月の町のあかりを見たのかもしれない。

人工的と思われるものは次の三枚にも見られる。No 36は三ーFbにあるチョコ・クレーターとその外壁は五〇〇〇メートルの高さになっているが、写真の外壁上方のふちに、何か記号のよ



No.40 中央矢印がタービンと思われる物。右下矢印はドーム。上の二つの黒い矢印はトンネル入口

NO.45



うなものが刻まれているように見えるところがある。これはNo 37で拡大され、ごらんのように数字の2であり(矢印)、そのずっと右に、=(イクオール)を少しななめにしたような記号、そしてその中間に何かの記号を破壊したようなものなどがある。自然現象によって偶然にできたのか、だれか地球の数字を知っている者のいたずら(?)なのか、それはわからない。

明らかなる日がくるにちがいない。

このシリーズには他にNo 41、43、46、50にも他の場所の今まで述べてきたような地形が紹介されているが、鮮明度の不足等の理由により省略させていただいた。

No 45はルナ・オービター5号が撮影した月の裏側にある無名のクレーターで、R二九・五キロのものである。その火口底に小山のようなものがあり、その頂上付近に長方形の、何か建造物らしきものが認められるとハンスは説明しているが、写真版ではわかりにくいかもしれないけれど、確かに何かあるようだ。

月の裏側の様子に関し、最初の人工衛星が打ち上げられる三年前に、他の惑星の宇宙船で月に行ったという、ジョージ・アダムスキーの体験をここで取りあげたい。彼は次のように言っているのである。「月の裏側の谷や山腹には、大小多くの町があり……」(空飛ぶ円盤同乗記〈高文社刊〉一八六頁)

その他裏側の方が地形が複雑であるとか、湖や川の存在、植物の成育等、彼の言葉はまだ常識的には否定されているけれども、ハンスのNASA月面写真シリーズによって、否定し切れない要素もあることを感ずるのである。だいたい米ソの宇宙開発で、月の写真は何万枚撮影されたかわからないけれど、その七割以上は一般人が見ていないと思われる。おそらくは公開できないようなものが写っているものもあるのだろう。UFOの謎と共に、いつかこれらの真相が

ニューヨーク州の着陸事件

—— テッド・ブリーチャー ——

1964年11月、ニューベルリン市に2機のUFOが着陸、中から“人間”が出てきて機体を修理、その4時間にわたる目撃によると——。

● 第一部 —— 報告

今まで報告されたことのないこのUFOが着陸して乗員が現れたという事件の情報は、古くからの友人で同僚でもあるニューヨーク市のアレクサンダー・D・ミーベインから送られてきた。レックス・ミーベインはこの事件のことを、彼と最初の目撃者メリー・メリウエザー（仮名）夫人の共通の友人から聞いたのである。

シャーロット・ロナルド嬢がニューヨーク州ニューベルリンにあるメリー夫人の家で週末をすごしたのは、一九七〇年か七一年の初秋のことだった。そのとき二人は、丘の上空を飛ばす正体不明の光を何度か目撃した。このことがメリー夫人に五、六年前の体験を打ち明けさせるきっかけとなった。彼女は、二機の物体が着陸して乗員らしいものが修理をしている光景を目撃したのである。ロナルド嬢はレックスもこの問題に深い関心を寄せているのを知っていたので、彼女自身が目撃したところとメリーの体験談を彼に話して聞かせた。そこで今度はレックスがその詳細を一九七二年一月、私に知らせてきたというわけである。私は二月一二日にメリー夫人に手紙を書き、乗員のことをもっと詳しく教えてもらえま

いかと頼んだ。しかし彼女からは何の返事もなかった。

一九七三年六月二日、私はメリー夫人に長距離電話をかけ、自己紹介をしてから、彼女の最初の目撃体験のことをぜひ直接に聞きたいのだと申し入れた。

私の希望が真剣なものであり、私が単なる物好きのおせっかい屋でないことがわかったらしく、彼女は喜んでその事件の詳細を話してくれた。三〇分も長話していると、この前例のない重要なUFO事件について彼女が首尾一貫した率直な話をしてくれていたことも、ただ一度の電話でその全容をつかむのはとても不可能であることもはっきりしてきた。

そこで彼女は、ペンシルバニアにある現在の自宅でインタビューに応じることを承知した。その日は、一九七三年六月一〇日（日曜）の午後と決定した。

インタビュー

この報告はその三時間におよんだインタビューの長い録音テープとメモを基にして書いたものだ。このインタビ

ューでメリー夫人は、丘の中腹に二機の物体が着陸し、その一機を乗員——二人はいたと思われる——のうちの二人が修理しているのを四時間にわたって観察したことを話してくれた。六月一〇日のインタビューのちも私は、何度も電話したり簡条書にした質問書を送ったりして、更に詳しい情報を入手したのである。

ニュージャージー州モンクトレアの精神科医バートルド・シュワルツ博士はフライング・ソーサー・レビュウ誌の顧問兼執筆者として読者にはよく知られている。

彼が同様な事件の目撃者へのインタビューの経験豊かなことを知っている私は、ニューベルリン事件を彼に知らせてやった。シュワルツ博士はメリー夫人と連絡をとり、一九七三年八月四日に四時間にわたって彼女の話を聞いた。この会見では、催眠術で彼女に過去を思い出させることも含んで目撃者に関して更に貴重な情報が手に入った。

また、事件から一、二日後着陸地点で目撃者が発見した一機の航空機で適当な実験を実施することも考えているので、その時は実験結果に関する追加報告を発表するつもりである。

メリー・メリウエザーにはこの不思議な体験を利用して有名になろうというような気持は毛頭ない。それとこ

ろか彼女は評判になることを避け、事件についても家族や親しい友人など二人くらの人としか話し合っていないほどののである。

事件の場所

事件が起こったのはニューヨーク州ニューベルリンの中心部から約一マイル北、ファイヴ・コーナース（北緯四二度三九分、西経七五度二〇分）地帯のすぐ北西の国道八〇号線上の地点である。

UFOは目撃者のいた場所から北西へ一三〇〇ヤードほどはなれた丘の頂上に着陸した。一九六四年一月二五日（水曜）のことである。一九六四年はメリーの結婚第一年であるのでよく覚えていた。同じように日付も確かである。

というのは、一月二四日が両親の結婚記念日だからである。事件が起こったのはその次の日、午前〇時四五分ごろから午前四時五十分ごろ（東部標準時）にかけてだった。

目撃者としては、当時二〇歳だったメリーのほかに、彼女の義母がいる。メリーは義母の家に泊まっていたのである。

彼女はニューベルリンの近くで大きくなり、一九六二年から六四年までイサカ大学で音楽を専攻した。現在の

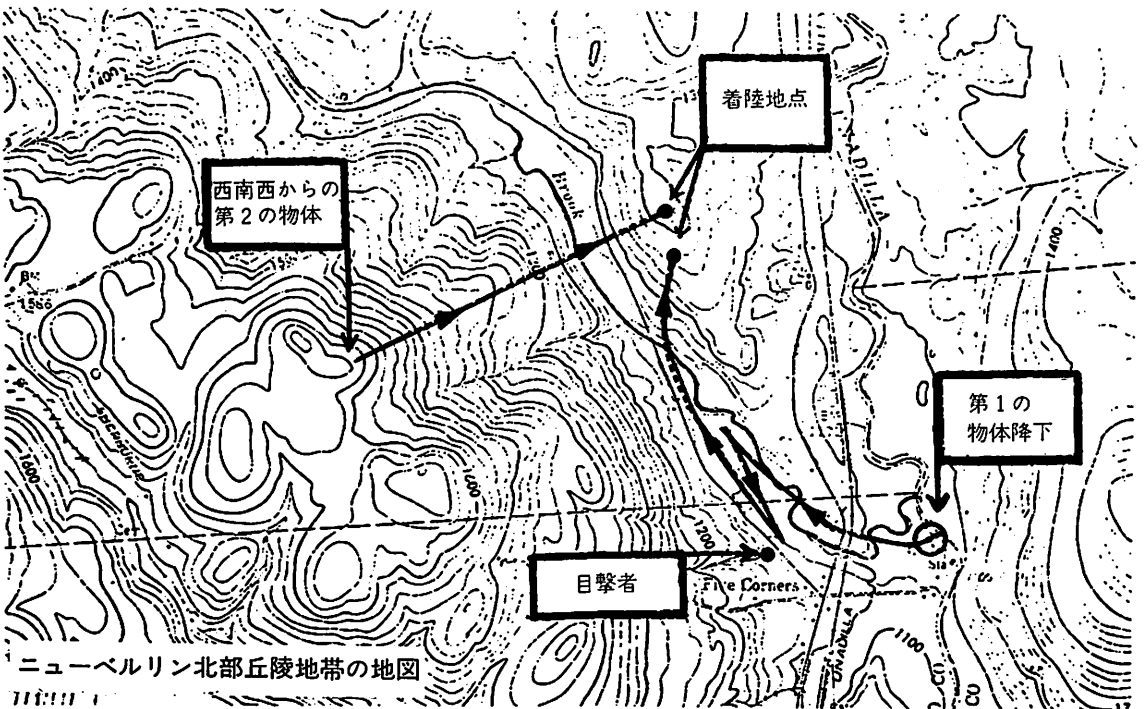
夫、化学技師のリチャードと結婚したのも一九六四年のことである。事件当時はニューヨーク州シラキューズに住んでいた。

一九六四年の感謝祭の週、二人はニューベルリンに住む夫の両親を訪れた。一月二五日には夫とその父は近所の人たちと狩猟に出かけ、メリーは義母がさびしがるといけないので一緒に留守番をしていた。

一九七三年六月にインタビュールたときには、メリーウェザー夫妻には六歳の男の子と四歳の女の子、計二人の子供があったが、七月には二人目の女の子が生まれた。

六月上旬に私をはじめ電話してからというものは、彼女はいつも親切に心から協力してくれた。私に関するかぎり本件の目撃者は完全に信頼できると思う。彼女の物語は、彼女自身不思議な事実と思っている事件をできるだけ正確に述べたものと考えて差支えない。

以下の物語は直接メリーから得た証言を基にしたものだ。事件の本筋を追うため無駄な枝葉は少々刈り込んだけれど、一九六四年の事件を語った言葉はすべて目撃者自身のものである。カッコでかこんで付け加えた部分は、インタビュや電話のさい書きつけた私のメモから出ている。



ニューベルリン北部丘陵地帯の地図

● 第二部 — 目撃者の物語

ディックは彼の父と狩に出かけ、私は義母がさびしがらぬように国道八〇号線の北寄りのニューベルリンのファイヴ・コーナーズの家で留守番をしていました。夜中の二時半になりましたが眠れそうにもありません……テレビをつけると、何度も見たことのある古い映画をやっていました。ちっとも面白くないので、起きてジンジャー・エールを飲み、様子を見に外へ出ようと思いましたが。

一月にしてはめずらしくよく晴れた夜でした……その年は晩になると雪が降り、雲が多くて気分がクシャクシャしました。

でもその夜だけはとてもよく晴れていたのです。驚くほどたくさん星が見えました。月も出てきて明るく輝いていました。

玄関まで出ましたが寒いので……上衣を取りにもどり、もう一度出かけました。星をながめながら星座を見つけようとしていると、流星が一つ目に入りました。

北北東を見ていたのですが、その流れ星はいつものとおり弓形の線をえがいて東の地平線めがけて落ちてきました。

UFOを発見

続いて流れ星がもう一つ、今度は弓形をえがいて飛ぶかわりにまっすぐ落ちてきました。前とほとんど同じ場所です。ハイウェー（国道八〇号線、ニューベルリンから北へ走る）の真上かすこし東寄り、ファイヴ・コーナーズのそばでした。それから小川にそって、家の前を通っている国道八〇号線と平行に飛ぶのです。そのとき私は事の異常なのに気づきました。というのは……流れ星もはつきり見えますが、小川の上、道路の北側の丘が流れ星の上にはつきり見えるのです。それに光が明るすぎます。今まで見たことがないほど明るく強く光るのです。水銀灯はずいぶん明るいのですが、この光はそれよりもまだ明るいくらいなのです。

異常なのは目に見えるものだけではありませんでした。低いブーンという音がきこえるのです。水ポンプを運転しているような、変化のない同じ高さの音です。

義母が起きてきてバスルームのほうへ行きかけましたので、居間を通りか

かったときドアを開けて「ちょっといらっしやいませんか。見ていた大きなものがありますの」と声をかけました。義母はいつもこの時間になると犬を外に出してやるのです。彼女にとてもなついた英国産のスプリングガー・スパニエルがいて、毎夜今ごろになると外へ出て行くのです。

UFO接近す

今度は自動車一台通りかかりました。たぶん映画婦りの若者たちでしょう。ニューベルリンから北に向かつて走って来て、私と川床の間のハイウェーを進んで行きます。何だかゆっくりと走っているように見えたが、一分半ほど後でまた一台の車がやって来ました。二台ともスピードを落としました。家の北東側で道路わきに寄りました。すると飛んでいる物体もスピードを落としてちょっと空中で停止し、ふたたび動きだすと止まっている車を飛び越して私のほうへやってきました。同時に車も動きはじめて走り去ってしまいました。

（この時いろいろなことがほとんど同時に起こった。メリーの義母が入口にやって来てドアを開いて一歩外に出たとたん、物体は、その時にはもうドライブウェーに立っていたメリーめがけて高速飛行をはじめた。メリーは物体

の突然の動きにおどろいて、急いで玄関へ逃げ帰った。車もおそろしい勢いで走り去ってしまった）

物体が私めがけて飛んで来るようなので、これは近寄りすぎたと思って私も逃げだしました。走れば家まであとひと息というくらい距離でした。義母は玄関まで出て来たときその物体を見つけ、あわててもう一度ドアをしめようとしたが……私がとり残されるといけないので細目に開けておいてくれました。でも自分で外に出ようとはしなかったのです。彼女はあの物体はいかにもあやしいと言ひ、私に早く家に入るよう呼びかけましたが、私は入りませんでした。物体は道路の向こう側、家から二、三〇〇ヤードくらいの場所ですべて止まっています……その物体を見つめながら私は、何だかむこうからも見つめられているような気がしてなりませんでした。

動物の反応

母は、私に仲間みたいなものでもついでいればと思つたのでしよう。犬を外に出そうとしている苦勞していません。母の足より前に出ようとはしません——ただそこに長く佇んでいるのです。ふるえているのが私からも見えました。ガタガタふるえてい



るのです。

物体の着陸

また車が一台やって来てスピードを落しました。これで三百目です。車

がスピードを落とすと物体は動きはじめ、車と同じくらいの速度で飛びまゝです。彼ら(車中の人たち)は驚いた様子で、逃げだしてしまいました。物体はやはりそろそろと谷にそって飛びました。川床の上を飛んで丘に上がり：

：北北西に飛行して、地図で計って家から一〇〇メートルほどはなれた山中の腹を上昇して行きましたが、やがて尾根よりすこし下で停止しました。ブーンという音はもうきこえません。しかし光はよく見えました。「さあ、

もう家の中にお入りなさい」と義母が言いましたが私はまだ外にいますと言って双眼鏡を取ってきてもらいました。

義母が玄関からまた声をかけ、食堂の窓から見たほうがよく見えるよと言います。食堂は北北西向きなのです。

私に風邪をひかせたくないので。私ももうかなり長くなるので寒くなりました。そこで義母の言葉にしたがうことにしました。義母はずっと食堂の窓から見ていたのです。なるほどそこからはよく見えました……私が屋内に入ったのは物体が着陸して二、三分後だったと思います。義母もやっと安心したふうでしたが、私も暖かくなってホッとしました。夫は義母の足許にくっついて、どこへ行ってもついて行きます。恐怖で体が固くなっていました。よほどこわかったのでしょう。

(メリーが作った時間表によると、彼女が家に入ったのは午前一時すこし過ぎだった)

乗員を発見

食堂の窓から双眼鏡で見ようとしたのですが、レンズが光ってよく見えません。義母が上下に傾けてごらんと言うのでそのとおりにすると、ちょうど反射が消えてよく見える位置が見つかりました。物体のまわりで動くものが見えます。義母が「何か見えるの？」

とたずねるので「光が見えます。それ
にまわりで何か動いているようです
わ。人間らしいものが」と答えまし
た。

物体の全体の形はよくわかりません
でした。ただ、光が物体の下部から来
るらしいこと、それに物体が脚で着陸
していることはわかりました。という
のは、物体の底部は地面からかなりは
なれていて、あの人たち——「人」と
いうのは、私には彼らが何者だかわか
らないのですが人間のような体格をし
ていたのですから——が下に入って
四つんばいか、すわっているかしてい
たからです。職工がトラックや乗用車
でやるようにあおむけになったのもい
ましたが、車の下よりもかなり余裕が
あったようです。

彼らは物体の周囲を行ったり来たり
して、二人がかりでないと思えないく
らいの工具箱らしいものを持ち出しま
した。二個（工具箱が）か三個かよく
わかりませんでした。一個よりは多
いようでした。何かのまわりを半円形
に歩きまわっています。丸い形の乗物
のまわりを歩くような具合です。光が
明るすぎるのでその形はわかりませ
んでした。光は物体の下部にあるよう
で……その輝きがあまり強いので物体の
形がわからなかったのです。

彼女（義母）に、双眼鏡を渡して、上
下に傾けて何が動いているかのぞいて

「ごらん下さいと言っていると、彼女はしばらく
見ていましたが「ええ、よく見える
わ」と言いました。（人間たちを）見
たことはたしかです。彼女の身体が固
くなるのがわかりましたから。母はお
びえて私に言いました。「ええ、よく
見えるわ。でも今度はあなたが見て私
に教えてよ。私はもうあんなもの二度
と見たくないわ」

宇宙人の様子

さて、私の見た「人たち」のことで
すが、五、六人はいたようです……ス
キン・ダイバーのウェット・スーツの
ようなものを着ていました。その色は
黒っぽい色で、手はスーツの手首から
外に出ていました。皮膚の色はスーツ
より明るい色をしていました。体格は
人間そっくりで、頭は首の上であり、
その首は肩の上にある、といったふう
です。がっちりした体つきをしている
ことも、背骨があるらしいこともわか
りました。彼らは私たちと同じように
二本の足で立ち、私たちのと同じよう
な手を使って働いています。ただ一つ
ちがう点は、私たちよりすこし高いこ
とです——一・八メートルから二・四
メートルはあったでしょう。
（メリーは、双眼鏡の視野の下部に見
えた茂みの高さからそう推定したので
ある）

私によく見えたのは、物体のすぐ近
くにいて光で明るく照らし出された人
たちだけでした。大部分は背中か横顔
を私に向けていました。顔や首の皮膚
の色も、手と同じように明るい色でし
た。横顔や首はよく見えたのです、と
いっても一部の人たちだけですが……
頭には何もかぶっていませんでした。
今日の若者たちのような長いものでは
ありませんが頭髮もちゃんとありまし
た。短くきれいに散髪してありまし
た。物体の下側の地面にいた人たちの
横顔も私たちと変わりありません。

乗員たちの活動

彼らは、私の父が農業機械をあつか
うように物体をあつかっていました。
私たちがこわれた機械やエンジンを修
理するとき使うのと同じようなレン
チ、ドライバーその他の工具を使って
いるようです。物体の中心部から何か
を持ち出して、それを手でそっと下に
おろしました。手袋をしていたかどう
かは覚えていません。五人で一組にな
っていました。

それよりすこし前、私がかの中に入
ってこのほうがよく見えると思っ
て五分から七分くらい後、母は立ち上
がってあちこち動きまわっていました
が、やがて言いました。「あら、また
一つ来たわ」

二機目のUFO着陸す

双眼鏡から目をはなすと、もう一機
の物体が西南西から東北東へ飛んで、
最初の物体が着陸しているすぐ上の尾
根の頂上に着陸するのが見えました。
地上で働いていた人たちにもう四、六
人が新しく加わったのは、彼ら（最初
の乗員たち）がエンジンか発電機のよ
うなものを機体の中心部から降ろし
たすぐあとでした……新しく加わった人
たちも働きはじまりました……すこし丘
を下った手前のほうに立っている人た
ちもいました。長い重そうな——そう
見えたのです——鋼索を切っているよ
うです。鋼索は輪になって人々の間に
落ちました。同じ長さに切りそろえて
いるのです。皆一心に仕事をしていま
した。重たいからか、扱いにくいから
か、大きすぎるからか、理由はわかり
ません。鋼索は黒っぽい色をしてい
るようで、皆はそれを使って機体から
はずした機械を固定していました。

修理作業は続く

彼らはそれ——エンジンか発電機の
ようなもの——を、おろした場所に置
いたままで仕事をしていました。彼ら
が仕事にとりかかったとき、義母がも
う一時一分だよと教えてくれました

が、私はそれでも観察を続けました。切ったり、りきんだり、歩きまわったり、すわったり、あおむけに寝たり、肘をついて腹ばいになったり、ひざをついたりしています。全部で一〇人から二人くらいいたようです——確かではありません、いろんな物を機内から運び出したり持ち込んだりして行ったり来たりしていましたので。

双眼鏡なしで人の形はわかりませんでした。双眼鏡を使わずに見えたのは光——二個の光——だけです。頂上の下に一個と上に一個見えます。上のほうの光はそれほど明るくありませんでした。強くはあるけれども大きくないのです。頂上の光は満月よりすこし小さかったでしょう。下の光はその三倍くらいありました。故障の原因が何かはわかりませんが、光の大きさに関係があるように思われました。

義母は何度も時間を教えてくれました。彼女は「あれが逃げるか他の事が起るまでは眠る気になれないし、あなた一人を起きたままにしておくわけにはいかないからね」と言つて、私と一緒に起きていることにきめました。「犬は死ぬほどおびえていますよ。私と同じようにね」とも言いました。私はちっとも怖くありませんでした。あんな光は今まで見たことがないのでこわいのだと義母は言います。警察が政府関係の役所に知らせたほうがいいのか

しらと言いましたが、私が「知らせたくはありませんわ」と言うとき義母も「私もそうよ」と答えました。そこで私は言いました。「ね、だれかを呼べば小銃や大砲を持った人たちが来て、あの人たちを邪魔するでしょう。あの人たちはただ、あの機械を修理して飛んで行きたいだけなんですよ」私もその結果起こるゴタゴタにまきこまれたくありませんでした。義母もそうだったと思います。その時は二人ともあつたといふいろいろなうさひが起ころうとは考えもしませんでした。あの人たちはただ修理をすませて飛び去りたけななでしようし、私たちも馬鹿な連中に邪魔をさせたくなかつたのです。

私がわざと警察を呼ばなかつたことは彼らもわかってくれていると、私は確信しています……車が逃げ出したとき彼らは私を見たに違いありません。私はたたくさんの目で見られているという感じがしてなりませんでした。人は知りませんが私なら見つめられればわかります。私はじっと見つめられているという気がしました。義母も、私たちは見つめられているようだとおっしゃいました。彼女はこうも言いました。「理由はうまく言えないけど、私たちが警察を呼ばなかつたことも、呼ぶつもりもないことも、彼らはわかっていると思うわ」

トラブル起こる

台所の時計がちょうど四時半になったとき、一団の男たちが降りてきました。全部で九人です——その後にも三人、例の機械から同じ距離をおいてならんでいました。それからその後にも六人が一列にならんで立っています。何かを待っているか、すぐ何かに取りかかる準備ができてるように見えました。一人一人が工具を持っていました。力を合せて働いているようです。修理が

すんだものか、両手で合図していた指導者らしい人物が「さあ、気をつけてやろう」というような身振りをし……皆その機械に手をかけました。指導者が「さあ、動かせ」と言うような合図をすると、皆いっせいにそれを持ち上げ、機体の底にはめこもうとしたのです。機械は真直ぐ上に、約二〇センチほど持ち上がりましたが……傾いたように見えました。モーターの裏側のような血形の底が見えました。機械が持ち上がったから傾いたことは、底が水平でなく傾いていたのでよくわかりました。彼らがそれをほめこもうとしたとき、ねじこむようにグルリと回しました。機械は少しまわっただけでそれ以上動こうとはしませんでした。もう八〜一〇センチで機械を機体に装着できたのですが、機械は傾いた

ただけでそれ以上動きません。そこで彼らは、さっきしたことを逆にやりなおして、機械をもう一度地上におろしました。それから一〇分以上も作業をしたのちもう一度やり直しましたが、やはりうまくいきません。彼らはまた逆の手順で機械を地上におろし、一〇分あまり修理を続けました。さっき鋼索を切っていた人たちはまた鋼索のようなものを切断しています。今度はすこし明るい色のものを前より短く切っています。いそいでいるらしい様子がよくわかりました。

彼らは三度目の作業にとりかかりました。機械を持ち上げ、機体に近づけます。でもやはりだめでした。もう四センチほどなのにまっすぐに傾かないで傾くのです。どうしてもちゃんと装着することができません。一人が「だめだ」というような身振りをしました。彼らはいらいらして、早く作業を終りたいように見えました。でもどうしてもうまくいかないのです。

彼らはもう一度機械を外して地上に降ろしました。今度の修理には三分くらいかかったでしょうか……それから指導者らしい男が「さあ気をつけてもう一度いこう。きちんとはめるんだ」というような身振りをしたのです。彼はこのモーターのような機械の左側に立っていました。声はひろく聞こえますが、彼らがそう言っているように見えたの

です。彼らは注意深く機械を持ち上げ、今度はビタリとはめこみました。

修理成功、そして出発

物体の前面（目撃者に面した側）は割合に明るかったので、丸くなっていくのがよく見えました。底面は丸かったか円錐形だったか、今となってははっきりしません。機械が機体の中心部におさまるすぐ前に——機械は円筒形でしたが上部はどんな形だったかわかりません——強烈な光が機体の下から出ました。とにかく、機械がうまくはまって彼らはとてもうれしそうです。五時六分前でした。乗員たちは急いですべてをかたづけ、頂上の機体から来た乗員たちはその方へ走り帰りました。皆よほど重い物を持った走りかたです。工具箱は二人がかりで運んでいます。工具箱は少なくとも三個はあったようです。彼らは機体の後へ走り去り、その後は姿を現しませんでした。他の人たちはその場に落ちている鋼索を拾い集めてから丘をかけたが、それからはだれも現れませんでした。

昇し、丘の頂上よりすこし高度をとってから、一番機と同じ方向に同じ速度で飛んで行きました。それで終わります。長い長い夜でした。

翌朝起きると私は養母に「あそこへ

行ってみたいんです」と言いました。母はそうだろうと思っていた、と答えました。ところで母は私くらい背が高いうえにうんと重く、関節炎と滑液囊炎に悩まされていますから歩き回ることは得意ではありません。あの物体が着陸していた場所は牧草地に使われていますが、そこまで行くにはかなり急な斜面を上がらなくてはなりません。有刺鉄線の垣根を二カ所越えなくてはなりませんし、野いちごの茂みをかきわけたり、牧場のいちばんきいたない部分を通りぬけたりしなければなりません。養母にとっても行けない場所です。

でも私は道路近くの農家に行き——現場はその一家の土地なのです——あそこまで上がってもよいかとたずねました。それはかまわない、と彼らは答えました。何だかうさんくさそうに私をじろじろ見ていましたが、私は別に何の説明もしませんでした。幸い彼らもそれ以上聞くともしません。ですから彼らは何も見していないことは確かです。何が起こったかも知らないでしょう。私は礼を述べて上がりはじめました。母は車の中にすわっています。彼女はこう言ったのです。

「あそこまでは上がれないけど、車から見ておくことはできますからね」

痕跡を発見

頂上を探しまわった私は、前夜見たのと同じ場所に、円錐形で先端の丸い非常に重い何かの三カ所地面にめりこんだ凹みを見つけました。一辺が四五メートルから六メートルくらいの三角形にならんでいます。三脚の跡のように少し中心に傾いていました。その一つでは岩が割れていましたし地下の岩盤までめりこんでいましたから、よほど重い物が乗っていたと思われる。下に岩のないただの土の地面に残った跡の直径は約三五センチ、深さは四五センチありました。いちばん浅い穴の深さは約一〇センチでした。痕跡は二組ありました。一組は丘の頂上、一組は中腹の斜面です。穴は間隔の同じ正三角形にならっていました。

遺留品を発見

あれこれ探しまわっているうちに、乗員たちが鋼索のようなものを切っていたことを思い出し、高い草が茂ったあたりまで降りて行ってもう一度探しました。それを見つけたのがその日のことだったか、それともディックが狩りから帰ってから二人で登ったときの

ことだったかははっきり覚えていないのですが、その日のことだったような気がします。下のほうの一組の凹みからさらに一五〜一八メートル下がった地上に、七・五センチばかりの鋼索の切れはしのようなものを見つけました。彼らが拾い忘れたものでしょう。外側には茶色の紙タオルのような——といっても私たちが使う紙タオルとはかなり違いますが——手ざわりのする被覆がついています。管状になって中身を包んでいました。スッパリと横に切断されたこの落とし物の中心には、非常に細いアルミニウムの線のようなものが直径二・五センチほどの束になってつまっていました。長さは外側の紙と同じに切れています。色も感じもアルミそっくりですが、アルミではありません。アルミなら折れますが、これは折れないのです。外側の紙には縦に切れ目が入れてあったので中の金属線は容易に取り出すことができました。

私が発見したのはそれだけです。もし捨てなければ今でも養母の家にあるはずですが、だれにもさわらせぬよう私がかまっておきたかったのですが、母がほしがったものだから。大変軽いもので、被覆と一緒にしてもほとんど目方を感じないほどでした。

（この遺留品は、本文を書いた一九七三年一月一日現在ではどこにあるか不明である）

UFO情報

音のない物体がゆっくり移動

●自衛隊小松基地も首ひねる

黒部市の上空にUFO（未確認飛行物体）出現—一九七四年十月二十日午後4時55分頃、黒部市天神新、国鉄黒部駅の下り線海側ホームへ向かおうとした職員、村田稔さん（45）が、北西の空にゆっくりと輝きながら動く物体を見つけた。

「円盤みたいだ」という村田さんの声で、駅事務室にいた7、8人の職員がかけつけ、これをはっきり確認した。

村田さんらの話では、物体の大きさは10センチほどで、ちょうどまんじゅうを横から見た形。銀色に光りながら石田浜上空を西から南へ向け、時折り止まったりふわりふわり上がり下がりをしながら、ゆっくり雲の中に消えた。この間2、3分だったという。

「音も全くなく飛行機ではなさそう」と村田さん。他の職員も「鳥とも星とも違う不気味なものだった」「今まで空であんなものを見たのは初めて」と興奮した口ぶり。

職員の多くはテレビでUFOをよく見

ているようで、同夜の駅事務室はこの話でも切りだった。

自衛隊小松基地では「状況から見てジェット機とは思えない。またヘリコプターなら、すぐわかるはず。見当がつかない」と不審顔。

また、富山地方気象台では「毎日午後2時頃、輪島測候所からラジオゾンデを飛ばしているが、時間や状況から見てもゾンデとは違うようだ」といっている。（一九七四年十月21日付、北日本新聞）

オレンジの葉巻型UFO

●約5秒間目撃

私も「空飛ぶ円盤」を見た—尾道市内の会社員が一九七四年十月21日朝、中国新聞尾道支局に名乗り出た。同市新浜一丁目、会社員中山勇さん（26）。「空飛ぶ円盤」カラーでパチリ。尾道の高校生という同日付中国新聞の記事を讀み「やっぱり」と「証言」に立った。

中山さんの話では「円盤」を目撃したのは19日午前11時中頃、会社の寮の7階の窓から千光寺山の方を見ていると、頂上付近を葉巻型の「円盤」がオレンジ色に近い鈍い光を放ちながら移動、間もなく千光寺の向こうに姿を消した。飛行時間には5秒前後だった、と言う。

中山さんは「円盤」では—と思いがながらも半信半疑でいたところ、同市栗原町尾道工業高校一年藤松和彦君（15）が、カラーフィルムに撮影、自分が目撃した日の午後藤松君がクラスメート4人が

同様、確認していることを知り、尾道支局に連絡した。（一九七四年十月22日付、中国新聞）

野球のボール大の物体が飛来

●地元富山県では大騒ぎ

最近、富山県東部の上空に光るUFO（未確認飛行物体）が出現、住民は「幻の物体」だと大騒ぎ。正体不明のため天文学者や科学者が、しばしば出現する旧新川海岸に集まりはじめている。

ナゾの動く物体が出はじめたのは一九七四年十月10日から。同夜下新川郡朝日町宮崎浜から白馬岳の方向に向かって薄青と金色の光をキラキラ輝かせながら野球ボール大の物体が弧を描くように3分ほど飛んだあと姿を消した。また、20日夜、黒部市の石田浜から山に向かって銀色に輝く物体が時折り止まったり、ふわりふわり上昇したり、あるいは下降したりしながら、ゆっくり雲の中に消えた。

形は円盤を真横から見たような物体。さらに24日夜8時すぎ、今度は滑川浜の上空にソフトボール大の光る物体がふわりふわりと北アルプス方向に流れた。

国鉄滑川駅職員や滑川署員らが「光る物体だ」と大騒ぎしていると、2分もしないうちに金色の輝きを見せながら南の方へ流れてストップ。1分ほど停止したあと、今度は同じ南の方に向け動き出し間もなく姿を消した。

このほか小、中学校の教諭らから魚津黒部、下新川郡で「9月以来、夜空に銀

金、青い光を放つ円盤のような物体が音もなく動いているのを見た。正体は…」という問い合わせが気象台や県、警察などに殺到しており「人工衛星では」「空飛ぶ円盤だ」「いや、火星の破壊だ」などとさまざまな憶測が乱れ飛び、果ては

「地球異変の前兆だ。関東震災の前年に全くよく似た光る物体が富山湾の上空から立山連峰の方向に流れた」と力説する古老の漁師まで現れ、いまでは恐怖におびえる住民さえいる仕末。（一九七四年十月26日付、サンケイ新聞北陸版）

岡山県で写真撮影に成功

●ラジオゾンデではない

岡山県久米郡旭町で一九七四年十月24日夜、同郡棚原町役場職員の山本泰示さん（24）がUFO（正体不明の飛行物体）の光跡を撮影した。場所は旭川ダムに臨む旭町西川上の三休地区で南の峰に雲より低い位置で西方向へ赤い光が1回2、3分流れた。同夜は6時20分から4回見えたが、カメラに収めたのは8時45分。

同地区は9月くらい第2小児童が空飛ぶ円盤を見たといひだして学校で父兄にアンケートしたり、神戸に本部をおく日本UFO研究会から調査にくるなど、謎の物体の話題でもちきり。

最近22日から連夜あらわれて、町農協の湯浅謙二さん（33）、安藤弘之さん（36）、氏平公二さん（23）ら熱心な地元ファンが観測している。「とにかく不

思議です。ラジオゾンデか風向計か気象台や水鳥の工場に問い合わせたが揚げていないという返事。科学者の目と知識で解明してほしい」と話しており、深まる秋とともにナゾも深まる一方。

(一九七四年十月二十九日付、山陽新聞)

土星型で銀色に輝いて飛来

●高崎市の小学生たちが目撃

「校庭で野球中に、僕たち、空飛ぶ円盤を見たよ」と高崎市北小6年の飯島英彦君(11)から――。

飯島君の話によると、一九七四年十月二十八日午後3時半頃、友だちの同小3年、五十嵐裕君と五十嵐君の家族ら9人と同校の校庭で野球をしていたところ、突然そのうちの一人が「あっ、空飛ぶ円盤だ！」

見ると校庭の西の空に、土星型をした銀色に光る、星のようなものが動いていた。この物体は9人全員が確認しておりボールを拾いに行った飯島君が、もう一度見ようとしたときには、姿を消していたという。

(一九七四年十月二十九日付、上毛新聞)

風に揺れるような動きの物体!

●不気味さに大阪・和泉市の人たち仰天

一九七四年十月二十七日夜、大阪・和泉市に「上空でバチバチ音がし、光る物体が見える」と和泉市観音寺地区の住民から一〇番が相次いだ。同署のバトカーが

急行したところ、三角形の物体が風に揺れているのを見つけた。

このため同地区一帯は大騒ぎ。約100人が夜空を指さし「空飛ぶ円盤?」「季節はずれのタコが引っかかっただけ」とあれこれ。同署員10人が出て投光器を持ち出し、夜空を明々と照らして追跡したころには物体は姿を消し、音も聞こえなくなった。

同地区はまだ田畑の残る静かな住宅地。時ならぬサイレンの音と金属をこするような音に気味悪がる人も出たが、付近には高圧線も通っておらず、この「なぞの物体」茶の間をにぎわしそう。

急行したところ、三角形の物体が風に揺れているのを見つけた。このため同地区一帯は大騒ぎ。約100人が夜空を指さし「空飛ぶ円盤?」「季節はずれのタコが引っかかっただけ」とあれこれ。同署員10人が出て投光器を持ち出し、夜空を明々と照らして追跡したころには物体は姿を消し、音も聞こえなくなった。

真昼間に火の玉落下

●山狩りしたが何も現れず

海部郡日和佐町で去る一九七四年十月二十六日、真昼の「火の玉騒動」が持ち上がったが、28日には目撃した日和佐保健所庶務係、野口実さん(48)らが昼休みを利用して山狩りを行い、「現場検証」をした。しかし、現場はスギと雑木の密生地でなにも確認できず、以然、怪物は謎のまま。

事の起こりは26日午前11時前、同町弁財天の通称・内ヶ磯の山に直径1メートル前後の火の玉がふわりふわりと落下したのを、約500メートル離れた県日和佐合同庁舎内の日和佐保健所員が目撃したというもの。物体は深紅の丸型で、かすかに白い尾を引いており、気がついてから落下するまで約5秒間。落ちてからしばらく、煙状の白いモノが流れていたという。

(一九七四年十月三十日付、上毛新聞)

地上から10メートルに物体!

●曇2枚大で黒っぽい色

秋の空にUFO(空飛ぶ円盤)の話題がまたにぎわいだした。松山管内北松山町の中学生がカメラでとらえた物体はラグビーのボール形。広島県の高校生が写した写真は屋根の上に奇妙な姿をはっきりとらえている。

北松山町でUFOを写したのは同町愛知30、農業新家子秀男さんの二男優次君(12)。「北松山中1年」で優次君の家は水田地帯の一軒家。日曜日の27日午後4時頃、カゼ気味で自宅6畳の勉強部屋で寝ていたとき、突然鈍い金属音とともに突風が吹き、窓ガラスが鳴り、犬がほえた。起きて外を見ると花畑の花が折れんばかりにそよぎ、地上から10メートルぐらい上に丸い大きな物体がグルグル回っていたという。

高崎市で今度は主婦が目撃

●形も色も同一

「私も(一九七四年)28日の午後、空飛ぶ円盤を見ました」と前橋市総社町総社の主婦、中島キク江さん。

時間は午後3時頃というから高崎市北小6年の飯島英彦君らが校庭で見た(29日付)のとピッタリ。中島さんの説明によると、大渡橋と中央大橋の間の市街地の上空に、土星の形をした銀色の物体を発見。30秒ぐらいでピルの陰に消えたという。

高崎と前橋で同じ時刻に同じ物体を見たとことになるが、さてその正体は?

優次君は円盤だと直感、部屋の柱に掛けてあったカメラを持って外へ飛び出し夢中でシャッターを切り、3枚ほど写したとき、それまであまり移動しなかった物体はスピードを出し南の山の方向へ飛び去ったという。「家のテレビアンテナのすぐ上あたり。驚いてはつきり覚えていないが、大きさは曇2枚ぐらい。黒っぽかった」と話している。

カメラは、父親から借りていたボックス型二眼レフ。フィルムは6×6型。町内のDP店で現像、本社北松山支局に級

友と3人で持ってきたネガフィルムは、追っかけて撮ったのを含めて7枚。うち6枚にラグビーボール形の物体がはっきり写っており、特に一番最初のものは鮮明で、アンテナを支える針金も写っている。

同君は宇宙人に連れ去られるのではないかと眠れなかったという。
(一九七四年十月三十日付、北海道新聞)

UFO、毎夜のように出現

●広島県久米郡旭町付近

久米郡旭町では小学生の間に、UFO(未確認飛行物体)の「目撃者」が相次いで現れ、さらに同町の山の上からは毎夜なぞの飛行光線が見えるためアマ無線グループが他町からも大勢詰めかけ、町当局は火災の心配までする始末。また24日夕方には同町の医師、看護婦もUFOの飛行を目撃した、とあって「UFO騒ぎ」は、ますます広がる気配を示している。

ことの起りは同町西北部にある中地区(第三小学校)の児童の目撃談から始まった。一九七四年9月中旬、同町第二小学校の6年のクラスで理科の「宇宙」学習をまとめをしていた時、児童会長の岡田正人君(12)が「2年前、学校の帰りに友達4人とUFOを見た」と言い出した。このUFOは「空飛ぶ円盤」型、山の上からふわふわと舞い降り、学校の近くを通り北の山の方へ消え去った。みんなの位置から200メートルぐらいのところ

を通ったという。

この話をきっかけに同校児童の中から「ぼくも見たことがある」という報告が相次いだ。同13日夜に見たという3年生難波義美君(9)の話をもとに、6年生担任の三船昌行教諭(27)が学区の南端北当地区の山へ登ってみると直径2メートルほどの丸く草が倒れた所が見つかった。これが今月初め、一新聞などで大きく取り上げられ、町中にUFO騒ぎをかき立てた。

一方、同町中央部高原の三休地区の旭中学校3年生明石隆道君(15)が学校で「星の観測をしていたら、よく怪しい光が南の空を飛んでいる」と話したため、同校の教師や生徒たちが標高300メートルの同町三休、桜花苑の裏山へ登ってこの「第2のUFO」を確認した。1週間ほど前から、これを伝える聞いた町民がつきつぎに桜花苑裏山へUFO見物に登るようになった。26日の土曜日には隣の真庭郡落合町などから来た人も加え、山の上は100人を超えるにぎわいとなった。UFOが見えるのは、午後6時半すぎ、同7時すぎ、同9時すぎの3回でそれぞれ6〜7分の間、金星から2等星ぐらいの明るさの光が点滅しながら、標高400メートルから600メートルの山並みの少し上をゆっくり飛ばす。

時には月の少し下の中央から斜めに走る光も交じる。これらは流星か人工衛星と考えられるが「水平に飛ぶのは飛行機ではないか」と言う人もある。同町農協職員の湯浅謙爾さん(33)らアマチュア

無線グループが、19日頃から無線で連絡を取りながら三休と5キロ東の同町黒岩など2点でこの怪光の方向を同時観測しどの辺を飛んでいるかを確認する努力を続けている。

同町では、隣の広島県西城町の怪獣、「ヒバゴン」の例にならって「観光客誘致にUFOを利用しては」という声もある。

しかし、山本勝資助役は「現状では車がどんどん来て、ゴミが残るばかり。観光収入には結びつかない。火事でも起こされては大変なので、そっとして置いてほしい」と言っている。しかし同町西川病院の中尾美久院長(53)が24日夕方同町東部高原にある西井和で、けい光灯に丸みを持たせたような「第3のUFO」が西から東へ飛ぶのを目撃したと言っており、ますますUFO騒ぎは広がりをよな雲行き。

(一九七四年十月三十日付、山陽新聞)

銀色に光る物体が飛行

●高校生の野球部員が発見

一九七四年十月28日午後の「空飛ぶ円盤」目撃者3人目は勢多農1年の坂本和昭君(15)。

野球部員の坂本君は午後3時頃、校庭で練習中、東京の方向に銀色に光った丸い物体を発見したが、10秒間ぐらいで消えてしまったという。

「そばにいた友だちも見したが、あっといふ間の出来事だったので、あまりはつきり

は確認できなかった」と坂本君。
(一九七四年十一月一日付、上毛新聞)

高度1000メートルにUFO

●「天変地異の前兆」と校長ら不安顔

空飛ぶ円盤などUFOが県内各地で話題になっているが、石川地方でも「この目で確認した」という人が相次ぎ、玉川村小高字池ノ入48、左官業添田義勝さん(24)も福島民友新聞社石川支局に電話で連絡してきた。

添田さんの話では一九七四年十一月5日午後5時頃、石川町の母畑温泉街から同町立養護老人ホーム長生園方面へ飛んで行ったということで、黄色っぽい丸形をしており30センチ程度の大きさに見えたという。

同日は同時刻頃、同村立泉中の本田吉之助校長や吉田昭典教頭らも校長室で会議中に、高度1000メートルの上空に月ぐらいの大きさのものが、ものすごいスピードで浅川町方面に直線に飛び去ったのを見ており、確認時間は2秒から3秒だったが、物体の色はやはり黄色で、紫と青色がかかった尾を引いていて、音は全く聞こえなかった。

このほかにも石川町野木沢の萩原功校長、平岡村逢田中の歌川治央教諭、石川町の石川中生徒ら多数が「怪物体」を目撃しており「天変地異の前兆でなければよいが、それにしても真相はなにか」などと話している。

(一九七四年十一月三日付、福島民友)

前橋市で目撃者続出

●アンパン状の銀色に輝く物体
目撃者が相づく「空飛ぶ円盤」にまた2人が名乗り出た。

「一九七四年」10月30日午後5時頃、下校中の富士見村と前橋市青柳町を流れる大正用水のほとり、赤城山の方へ銀色に輝く平べったくてアンパンのような形をした物体が飛んでいった。コウモリのように飛び、10秒間ぐらいで見えなくなった」(富士見村原之郷、勢多農1年・品川安雄君)

「一日午前9時頃、前橋市本町の西友ストア工事現場の上空を、銀色に光る丸くて平べったい感じの物体が、飛行機のようなスピードで、北から南へ飛んでいった。その間30秒ほど。友だちから飛行機の間違いでないか、とひやかされたが絶対に「空飛ぶ円盤」(村山工事・白谷秀則さん)。(一九七四年11月5日付、上毛新聞)

再び前橋で目撃者ノ

●黒い色をした物体がゆっくり飛ぶ
またまた「空飛ぶ物体」の目撃者。前橋・群大付風小2年の、高橋正勝君(7)から「一九七四年」10月28日午前8時20分すぎ頃、朝礼の最中に西の方を見たら、黒い色をした物体が静かに下の方へ動いていった」という。

高橋君は友だちに話したけれど、信用

してもらえないので……とぼやいていた。(一九七四年11月6日付、上毛新聞)

フットボールに似たオレンジ色の物体

●熊本の人吉市に出現

人吉市では「空飛ぶ円盤」を見たという話かなりあり、カラーフィルムを入れて夜間の撮影に成功しようと張り切る人もいる。

球磨工業高校教諭の、榎並宏信さん(41)夫婦はこのほど夜11時半頃、車で瓦屋町の市道を走っていると、前方の夜空にきれいなオレンジ色の物体が浮いているのを発見した。初め、妻の紀美子さん(37)が「あんなに大きな月！」と思わず指さしたが、大きさと色、月の出ている方向が違うことから、宏信さんが「空飛ぶ円盤だ！」夫婦ともゾーッ。

フットボールに似た鮮やかなオレンジ色で、円盤の下部には、さらに一段と濃いオレンジ色のおわんをくっつけたような形。

人吉市ではそのほか8月中旬から未確認の飛行物体を見た人が相次ぎ、ちょっとした話題となっている。榎並さんらは時折り、カメラをもって夜の10時頃からフィルムに収めるべく、これとおぼしき道筋を車で回っている。

(一九七四年11月6日付、熊本日日新聞)

「円盤は必ず実在します」

「円盤は必ず実在します」

●国際UFO観測隊大阪支局長語る

最近(一九七四年11月)紀南地方でUFOらしいとの目撃が相次いでいるが、このほど紀伊民報社(国際UFO観測隊大阪支局長、小土光秋さん)ら2人が訪れた。

本紙(紀伊民報)ですでに報道した目撃者宅を巡回してその時の模様をくわしく聞いて帰ったが、同氏は「紀南地方の目撃は、今のところ何であるかわかりません。一般の方々の目撃した中には流星や人工衛星、火の玉などと見間違っただものもありますが、空飛ぶ円盤と思われるものもあり円盤は実在します」という。(一九七四年11月20日付、紀伊民報)

紀南の田んぼに赤い物体

●近づくビリビリと感電?

このところ紀南地方でUFOらしいものが飛んでいるのを目撃した人が相次いでいるが、和歌山県日高郡高部川村内で一九七四年8月頃から11月にかけて夜間に光を放ちながら飛ぶ不思議な物体が話題となっている。

今年の8月12日夜7時頃、同村筋、超世寺・関本睦子さん(44)の二男、南部高校2年、交待君(17)が、南部町内へ単車で帰る途中、自宅から約20メートル手前、お寺の屋根とそばの南部川添いの山の中間ぐらいの上空に鶏卵ぐらいの大きさのオレンジ色に光る物体を見つけたので、自宅にかけ込んで母親に知らせ一緒に確認した。また、さらに同15日夜

9時頃、関本君がお盆の鐘を突いていると、そばの八丁田んぼで花火のようなものが光るのを目撃、フットボールぐらいの薄赤い物体が光っていたので、単車で近づくくと、全身が「ビリビリ」と電気にふれたように痛み、金属のような変な匂いがしたので気味悪くなり逃げ帰った。物体の空での高さは、はっきりわからないが、400〜500メートルぐらいだったという。

また近所の農業、前田篤夫さん(29)と母親のかつさん(67)や、家族と会社員前山忠一さん(27)らも10数回、近くの高田山上空で「パッパッ」と光を放ちながら飛ぶ物体を目撃している。

前山さんは10月3日夜8時頃、点滅しながら飛ぶ物体をカラー写真に見事キャッチしたほか、数枚の写真も記録した。

この物体は、高田山上空で消えるので前山さんは夜の山に登って観察したことがあるほど。

また、10月18日夜8時頃、同地区から東へ約5キロの同村東本庄、会社員、中松勝さん(26)は、田辺から上芳養を通って自宅へ帰る途中の山上で、谷間の上空にダイコンをつるしたような縦長のピンク色の物体が停止し、下部から火を噴射しているのを発見、中松さんは車のエンジンで切った約5分間見ていたが同じ状態が続いたので約1キロ離れた自宅へ帰って、物体があった方向を見るときう見えなかったという。「大きさは40センチぐらいだった」と話している。(一九七四年11月22日付、紀伊民報)

東北方面から茨城県にかけて “謎の光る物体” が飛行

●パイロットはじめ目撃者続出

(一九七五年一月) 15日夕、東北地方から茨城県にかけての太平洋沿岸ぞいの上空を光る物体が飛んだという目撃者からの届け出が、観測所や警察に殺到した。謎の物体は20数個がひとかたまりになって南の空へ消えたという。

届け出のトップは、岩手県岩手郡玉山村好摩、家具店経営小向伸さん(41)。午後5時48分頃、自宅前で西の空を白くぼく光が糸を引くようにして流れていく10数個の物体を目撃、すぐ一〇番したという。

同じ頃、同県水沢市の国立緯度観測所にも同じ村の中学生から似たような通報があり、岩手県警では一時「飛行機事故では」と捜索を始める騒ぎとなった。

(盛岡)

このあと、午後六時頃には、福島県いわき市と茨城県日立市から那珂湊市にかけての海岸沿いの住宅から届け出が殺到した。

小名浜観測所(いわき市)にはいわき市三和町から双葉郡富岡町にかけて40〜50キロの範囲にわたる。10数人から、「目撃した」という通報があった。それらの話によると、同市四倉町の上空に現れた青白い北斗七星ほどの光る物体20個ぐらひがひとかたまりになって江名沖の海上に向けて飛んだ。約1分30秒後に消えたが、その間に光はオレンジ色に変わ

ったという。

(いわき)

一方、水戸地方気象台(水戸市)にも「流星群のようなものを見た」という電話が約50件入った。「滞空時間」は10秒から14秒くらいだったということで、同地方気象台では、目撃者の証言を東京天文台(東京都三鷹市)に報告、謎の物体究明を急いでいる。

(水戸)

東京天文台観測所の北村正利教授は、「観測してないので断言できないが、流星群の可能性が強い。大気条件で比較的低く見える時もあるし、数も一〇〇個を超える流星群があり、少しずつ消滅していけば20数個というのも理解できる」といっている。

(一九七五年一月16日付、読売新聞)

* * *

15日夕、東京地方から茨城県にかけての太平洋沿岸沿い上空に現れた「謎の光る物体」を、全日空のパイロットが約二〇〇メートル近くで見ていることが16日わかった。このパイロットは樋口敏樹さん(26)で、これまで見たこともない物体だったため目の錯覚かと思っていたが、16日朝の本紙を見て、他にも目撃者のあったことを知り、急ぎ「正体不明の飛行物体」という報告書をまとめ会社に提出した。

樋口さんが謎の物体を目撃したのは千

葉県御宿上空で、15日午後6時8分から20秒ほどの間。樋口さんはこの日、広島発東京行き全日空六八〇便YS11機の副操縦士として勤務、御宿の約一八〇メートル上空で管制塔の着陸許可を待っていた。北北東に向けていた機首を右旋回しようとしたとき、右前方に同機より三〇メートル上空にグレーがか

った青く光る物体が、ぼんやり見えた。明るさは20ワット裸電球程度で、数は15〜16個。二つの集団に分かれ先頭に10個、それからやや離れたところに5、6個かたまり、「光源」の大きさは直径50センチ程。これらの長さ五〇メートルほどの雲のような物体の中で、青く光って見えたという。

樋口さんは最初、窓ガラスが曇っているせいだと思い、手袋でふいてみた。次には薄い層雲の向こう側にある飛行機のライトかと思ひ、レーダーを確認したが飛行機はなかった。そのうち「物体」は

同機と、同機より二〇〇メートル上空

を旋回していた日航ジャンボ機との間にいったため、ジャンボ機の半分がかすんで見えた。「物体」は東北東から南南西へ同機の前を横切るようにして、御宿上空から大島と八丈島の間コースに向かって時速三七〇キロほどの速さで消え去ったという。

樋口さんはこの物体を9キロ手前で発見、最も近づいた時は一・八キロほどだった。

樋口さんはいさり火、UFO、アポロ

の残がいなど考えられるケースを頭に浮

かべてみたがいずれとも異なり、流星群にしては①水平に飛行しており、尾が見られない②速度が遅い③地上から約二一〇〇メートルの上空を飛行しており、地上からの距離が近過ぎる——などから違うと思うと話している。

一方、埼玉県所沢市にある狭山湖でも物体群を見たという目撃者が出た。東京中野区に住む大学生島田浩一さん(19)で、15日午後6時過ぎ、友だち数人と狭山湖の堤防の上を歩いたとき、北西の空から東京に向けて飛ぶ流星のような物体を目撃。不思議に感じていたが、16日の読売新聞朝刊を見て、本社に知らせた。

島田さんの話では、光物体群は、大きい星のような物体を先頭に、それに続くように20個前後がひとかたまりになって飛んでおり、色はオレンジ色という。

* * *

また、福島県会津若松市で、同市役所秘書広報課主事、渋谷民男さん(27)がたまたまこの物体を写真に撮影した。渋谷さんは15日夕6時頃、しめ飾りなどを焼く正月行事の写真撮影の帰り、市内神指町付近で何気なく空をおおいだところ白く光る数個の物体が流れるのを見て、持っていたカメラ(ニコンF2、フィルムはトライX)で連続シャッターを切った。

現象したところ、流れ星のような物体が「感光」していた。

(会津若松)

(一九七五年一月17日付、読売新聞)

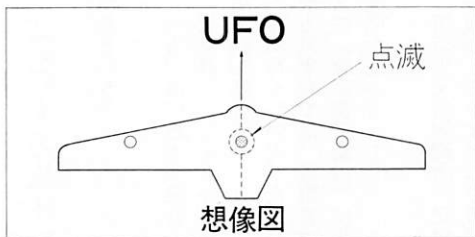


- ①谷 弘之(20)
- ②一九七四年十一月十三日午後6時15分頃
- ③福岡県大牟田市一ノ木四七九(県道御幸返橋上)
- ④晴
- ⑤3分
- ⑥近くにいた男女数人
- ⑦肉眼
- ⑧物体の大きさはジェット旅客機(ボーイング707)位で平行に3個のランプ(標識灯?)がついている。機体は暗くてよくわからないが形は二等辺三角形。
- ⑨南天仰角30°付近で物体を発見、プロペラ旅客機に酷似してエンジン音はな

凡例

- ①氏名(年齢)・職業・学校名
- ②目撃日時
- ③目撃地点
- ④天候
- ⑤目撃継続時間
- ⑥同時目撃者
- ⑦観測機器・方法
- ⑧物体について
- ⑨飛行状態その他

()内は目撃者の住所



く、南から北へ進行していて、進行方向に向かって左から赤ダイダイ色、真中が0.5秒おきに点滅する青色。青色は光度1等星位のランプが水平に3個ついている。飛行速度はプロペラ飛行機程度で南天仰角40°付近で物体は停空、

10数秒後動き出すと同時に点滅する青色光がダイダイ色に左右の赤ダイダイと青色の光が黄色に変化した。よく見ると物体は横揺れしたり、不規則な前進運動をしてい

て物体が頭上にさしかかった頃にはランプの光度が1等星級に明るくなった。ちょうどその時、北からプロペラ旅客機(福岡⇩鹿児島)が飛来して北天仰角40°付近で物体と左右ですれちがい、その後、飛行機は標識ランプを、次ぎつぎと消してしまった。プロペラ旅客機の航空会社は機種はわからないが、そのパイロットと乗客は物体を大牟田市上空で目前に見たことは確かである。なお、これと同じ飛行物体は一九七四年9月にも目撃している。

(〒837 福岡県大牟田市一ノ木八八五—六)

①柳沢伸司(14) 川越市立高階中学校 3年

②一九七四年十月二十四日午前10時57分頃

③埼玉県川越市大字藤岡一〇番地、高階中学校校庭

④快晴

⑤約15秒

⑥吉田文彦(学友)他 10数名

⑦肉眼

⑧前方がオレンジ色に光っていた。長さは約12~13メ

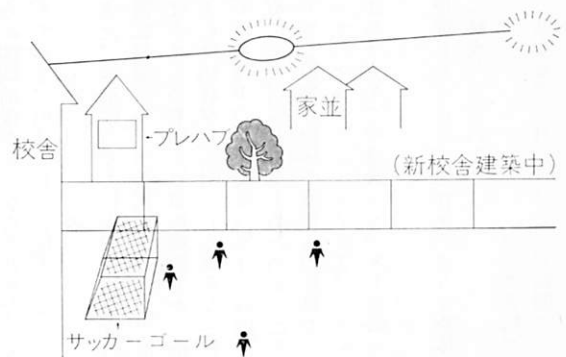
⑨全体に銀色

①林 英成(15) 川崎市立今井中学校 3年 1回目

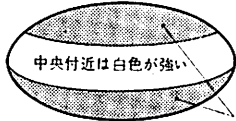


⑨飛び方は少し斜めに傾いて、北から南東の方へ飛行していった。時速約100キロ位。飛行中の形態や色、光度の変化はなかった。高度は約100メートル位だったと思う。南東の方へ飛行してゆくに連れ、だんだん物体全体が消えていった。音はなかった。

(〒356 埼玉県川越市砂九二九—一五)



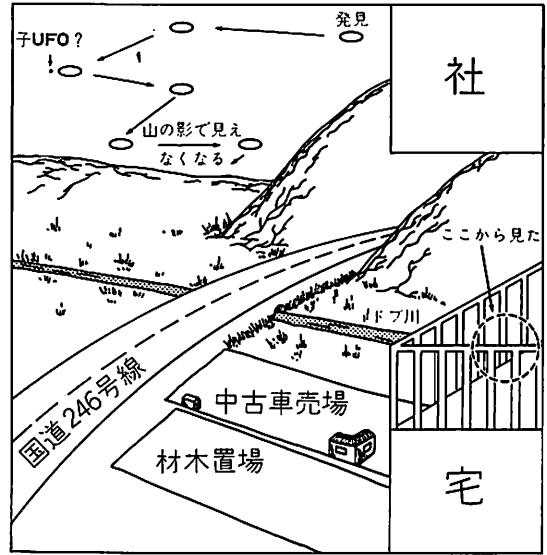
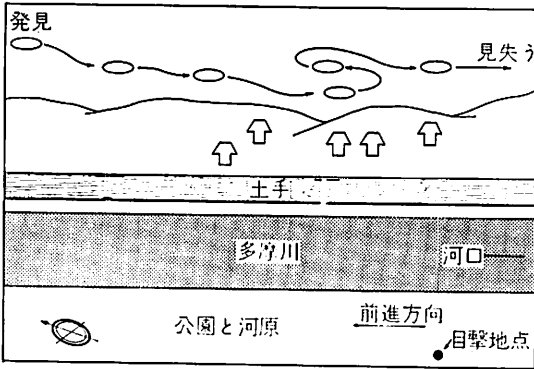
子UFO?



上下部にいくにしたがってオレンジ色が強くなる
周りが光に包まれていてよく見えなかった

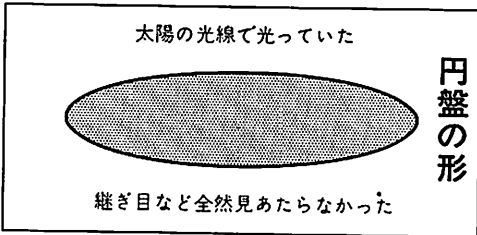
- ④ ほぼ暗れ
- ③ 自宅の玄関前(二子玉川の社宅、4階)
- ② 一九七〇年7月なかばの午後7〜9時頃
- ① ほぼ暗れ
- ⑤ 40秒/約1分間
- ⑦ 肉眼
- ⑧ オレンジがかかった白色、大きさ
- は横12メートル、高さ
- トル、高さ
- 8〜9メートル位、無音。

円盤拡大図



65キロで、高度は120〜140メートル。

④ 流れ星かと思ったが目にもとまらぬ速さで100メートル位上昇し、10秒間位その場に静止したあとジグザクに飛びながら下降しはじめ山陰に入る時に急に赤色がかかった白色に変わった。降りてゆくときに、何かその近くに赤く点滅しているものが1つあった。(子のUFOか?)。次の動作に移った時には見えなくなっていた。仰角5°。スピードは時速60



た。窓らしきものは全然見あたらなかった。全体が凹凸なくのっぺりとしていた。自転車を止めた所がコースの真ん中だったの、のかそうとほんの少しの間(約45秒)目を離れたスキに見え

2回目

② 一九七三年4月頃の午後1時から2時30分頃

③ 多摩川サイクリングコース(神奈川県側、キャノン多摩川工場付近)

④ ほぼ暗れ

⑤ 5〜10分間

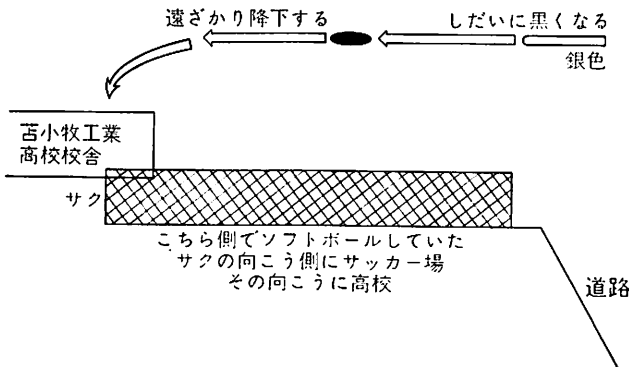
⑥ 数人の通りがかりの人達

⑦ 肉眼

⑧ 横30メートル、縦10メートル位で葉巻型、無音。

⑨ 自転車をこいで前方を見たときに見。自転車から降りて観測してみるとゆっくりとしたスピードなので初めは飛行船かと思ったが、人が乗る所のゴンドラが付いていなかったし、何も書いてなかった。色は、銀白色に光っていた。窓らしきものは全然見あたらなかった。全体が凹凸なくのっぺりとしていた。自転車を止めた所がコースの真ん中だったの、のかそうとほんの少しの間(約45秒)目を離れたスキに見え

- ① 宗像宏充(14) 苫小牧市立苫小牧中学校3年
- ② 一九七四年11月16日(土) 午後2時
- ③ 苫小牧市末広町末広公園で
- ④ 晴
- ⑤ 約15秒
- ⑥ ソフトボールをしていた友達10人程
- ⑦ 肉眼



なくなくなってしまった。仰角7〜8°。スピードは10〜15キロ、高度100〜140メートル。
* * * (苫小牧市) 神奈川県川崎市中原区今井南町四六三、日本原子力今井寮)

⑧明らかに棒状だった。大きさは初めジャンボ機よりやや長く、太さは半分程度だったが、最後は黒点になった。最後まで無音。

⑨公園でソフトボールをしていた最中に海の方(南)の建物の後ろから出現し、非常に細長く、速度は旅客機の数倍あり輝いていた。しかしその物体が我々のちょうど真正面に位置するまで旋回しながら飛んだのか、あるいは物体そのものが縮まったのか、わからない。太さはあまり変化しなかったが、長さは半分になり、輝きもなくなり黒くなってしまった。(ぼくは物体そのものが縮まったと考えている)。

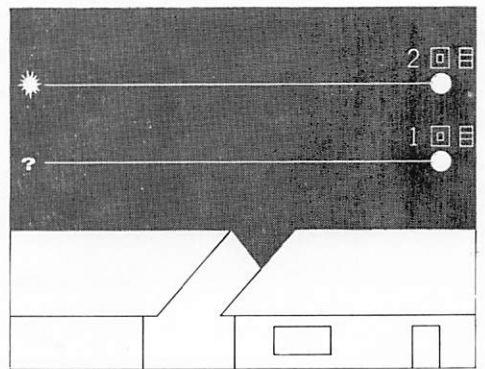
このあとそのまま札幌方向(北)に飛び続けたが、急に我々のいる方向と逆の東方に向かって旋回しそれと共に降下して苫小牧工業高校の陰になり黒々となって消えてしまった。

飛び去った方向は千歳空港のある方向ではない。また、あれだけの長さのものはいろいろな航空機(ジャンボも)を見ているが、お目にかかったことはなかった。

(千歳) 北海道苫小牧市新中野二二七一―一五、大東アパート)

* * *
①五島長門(14) 豊明市立豊明中学校在学

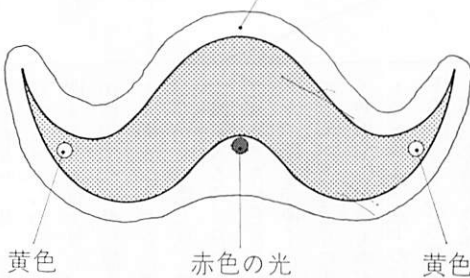
②一九七四年九月二十日午後九時十分頃
③愛知県名古屋市緑区有松町桶狭間セ



④曇
⑤約15秒
⑥なし

⑦肉眼

全体が白色で包まれていた



⑧初め白銀色、途中でオレンジ色に変わる。そのあと目にも止まらぬ速さで飛び去った。

⑨形は卵形で、途中から三角形に変わったが、初めは飛行機か人工衛星かと思ったが、飛行状態からして明らかに円盤だと思った。大きさは米粒位。

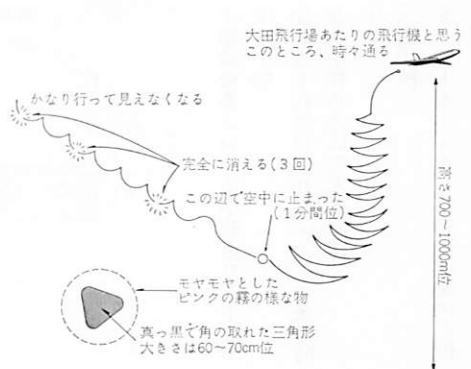
この発見のあと友達と円盤探しをして26日再び2個を発見、その初めの方は午後6時35分頃で南天に火星位の明るさの物体が飛んでいた。だが3秒間で消えてしまった。後の方は少ししてからで少し暗く速かった。この方の消え方は星が爆発するような状態だった。色は青白く銀色をしていた。

その後もこの日から一週間後、友達5人とV字型を逆にしたような形の物体が北西から東に向けて飛び去ったのを目撃した。

(千歳) 愛知県名古屋市緑区有松町桶狭間セト山四六)

* * *
①古田 裕(25) 広告業
②一九七四年十一月二十日午前11時
③安中市市自動車教習所の便所の窓から目撃。
⑦肉眼

⑧図の飛行機の付近から落ちて来る物があったので、拾いに行こうと思つて5分間ほど見つづけていたが、目の前10メートル位の所まで来て急にビタ



リと止まった。

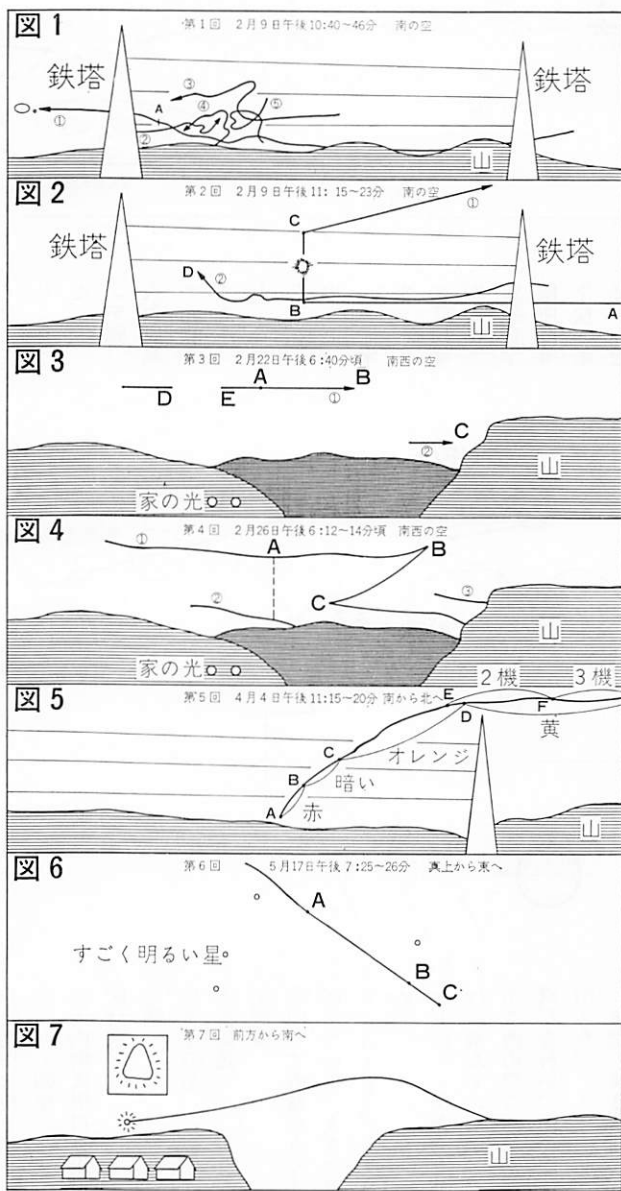
物体は三角形の黒いものでピンクのモヤがかかっており、しばらくするとひらひらと動き出したが、途中3回程消えた。目がおかしくなったかと思つた程だった。知人も以前野球のバットのようなものが光りながら飛んでいくのを昼間見ているので、これもUFOではなかったかと思う。

なお、この時は風がなかったのでゴミの類ではない。

(千歳) 01 安中市
安中四三二四)

* * *
①深山治(16) 千葉
県立印旛高校在学
②図で説明





③図で説明
 ④図で説明
 ⑧⑨昨1年間の報告。
 1回目は2月9日午後10時40分から46分位(図1)、初め①しか見えなかった。①はA地点から1機見えたり2機見えたりして他の②③④⑤より明るかった。色は黄色で周りがちょっと赤かった。④と⑤はくっついたり離れたりしていた。②③⑤は薄赤い光を発していた。

それから30分位して、また外へ出てみたらまた、南の空に低く飛んでいた(図2)。図2の①はA~Bまで止ま

つたり動いたりした。BC間はちょっと速くなってBとCの中間位で急に止まり、1等星より明るくなった。Cから北へ向かって飛んで行った。②も止まったり動いたりしてDで消滅した。なお、念のため下総航空基地に電話したら「今日は1機もこの時刻には飛ばなかった」という。

3回目(図3)は2月22日午後6時40分頃、南西の空で①がゆっくり止まったり、動いたりして進んだ。Aに来たら突然②が光を出して現れた。①がBに、②がCに達すると、一緒に消えてしまった。①はDで1回消えてEで

4回目(図4)は、2月26日午後6時12分~14分頃、同じく南西の空で①②③とっぴんに動いていた。①は②より速くAで②を抜いていた。そしてBでUターンし、CでまたUターンしてちょっと暗くなって山にかくれた。③は①と②の中間位の速さで、山にかくれた。

5回目(図5)は4月4日午後11時15分~20分、南から北へ動いた。この日は春一番で風が強く、星が一つも見えないのにこれだけが見えるのは不思議だと思っていた。初めはAから上

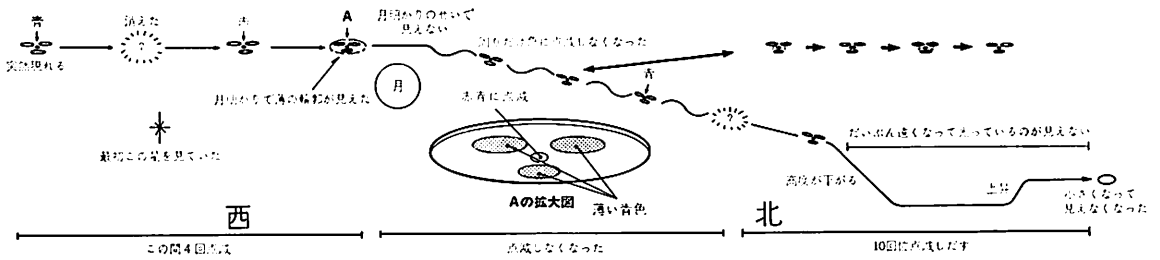
6回目(図6)は5月17日午後7時25分~26分。真上から東へ動く。黄色でAからBまで急に速くなり、Bからは暗くなってCで消えた。

最後に目撃したのは(図7)8月(〒270-14 千葉県葛飾郡沼南町布瀬二七四八)

昇してBで一度暗くなって明るくなった。CからDまでではオレンジ色でDからは黄色になった。EからFまでは2機見えた。この2機は後ろが小さく前が大きい。Fからは3機見えて前の2機の下に1機小さいのが見えた。それは北へ向かった。

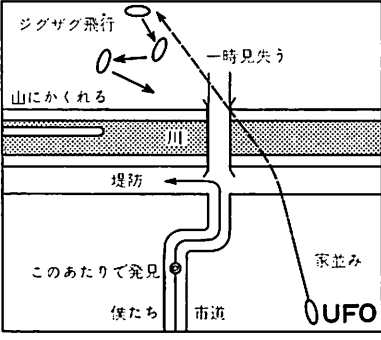
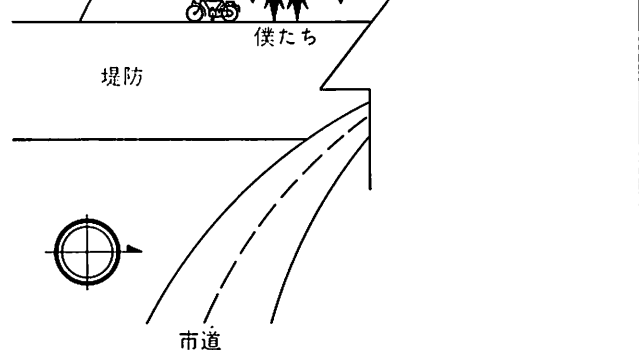
7回目(図7)は前方から南へ

①中川俊哉(14) 高石中学校2年
 ②一九七四年12月6日午後3時35分頃
 ③高石中学校廊下にて
 ④曇
 ⑤約3分間
 ⑥友人の細川勇夫、増田ヤスオ、板原浩行
 ⑦肉眼
 ⑧中型田盤で葉巻型、時々オレンジ色の光を放ち、中心にかけてふくらみをおびていた。
 ⑨速度は飛行機よりやや遅いくらいのスピードで、地面と水平に飛んでおり

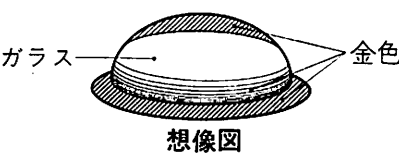


光はオレンジ色だったが、時々消えたりした。これは僕たちが4人が下校中目撃したもので、最後は高度が低くなって見えなくなってしまうた。
 (千502) 大阪府高石市東羽衣五十一七一二

②一九七三年 雲雀丘学園中学校3年
 ①江田孝志(15)
 * * * * *
 四年11月24日午後6時37分から39分の間
 ③清和台の自宅の庭



⑤2分間
 ⑧飛行機より一回り大きく、薄い青色をしていた。
 ⑨月の横にある星の少し上を見ると何か光っていたが、よく見るとゆっくり動いていて点滅していた。
 (千666-01) 兵庫県川西市清和台西一四二二



①井上正美(13) 石岡市立石岡中学！
 ②一九七四年10月23日午後5時20分
 ③茨城県石岡市東大橋、東小の庭から
 ④曇
 ⑤一分間
 ⑥母ミチ子
 ⑦肉眼
 ⑧かなり遠いのか光を反射しないのか真っ黒で無音。後方がでっぱっている。
 ⑨ジェット機より速く大きな輪を描くように飛んでいた。アンテナのようなものが後方に出ていた。
 (千311-33) 茨城県石岡市東大橋三三三四

* * * * *
 ①小田真佐子(16) 都立駒場高校2年
 ②一九六六年10月頃
 ③東京都大田区、自宅の庭
 ④快晴
 ⑤約1分
 ⑦肉眼
 ⑧金色で直径4~5メートルの円形。
 (143) 東京都大田区中央八二二二〇一三〇九

つい先ほどサンタカタリナ州サン・ミゲル海岸でUFO（未確認飛行物体）が爆発して海中に落下した。ちょうどそこで引網をおろしていた漁師たちがこれを目撃した。漁師たちは驚いて網を引き上げてみると網がズタズタに裂け大きな穴があいていた。

また付近の海中からアルミニウムに似てはいるが、硬度がまるで違う今まで見たことのない不思議な金属片が見つかった。この金属片は現在関係方面で慎重な分析研究をしているのでまもなくその結果が判明するはず。これは1957年9月ウバツバ海岸で同様な輝く円盤が爆発落下して、付近からこの地球にはない高純度のマグネシウム金属片が発見されたのに次いで2度目のことである。

そこでこの度のサン・ミゲル海岸で発見された金属片の分析結果次第では、他の天体からの飛行物体の存在が確実に実証されることにもなるとみられる。

これはブラジルOVNI（未確認飛行物体）研究委員会会長フラビオ・ペレイラ教授の確信である。同教授は円盤に関する数1000の証言を入手しており、この問題研究の権威である。

ブラジルのこの委員会は、1958年作られた公の機関で、専門的科学家、軍関係のオブザーバーなどで構成され、すでにブラジルで5回の大会を開いている。

10月にはサンパウロで第6回大会を開くはずでこれには新たに外務省もこの件に関する一分課を設けオブザーバーを送るといふ。現在この委員会が最も興味をもっているのは、もっぱら地球上に着地したという円盤に関する証言である。

フラビオ教授によれば発光物体の出現という件ではあまりしばしばなので、すでに研究対象としての興味や価値を失ってしまっているという。

「しかし」と教授は言葉をついで「物的こん跡はほとんどまれで、大概の場合はやっと証人の証言を得るくらいのものだ」と述べている。

そこでサンタ・カタリナで見つかった金属片の出現は極めて重要で、かつて17年前ウバツバで発見され、世界でも最初といわれ興味をもたれたものについて第2番目で国際的にも信頼性があるものとして、科学者たちから価値を認められている。

ブラジルのUFOの残骸？

ウバツバの場合

1957年9月のある明け方のことだった。朝起きの漁夫たちは光り輝く円盤が海岸へ降下してゆくのを見つけてびっくりしてこれを見守っていた。やがてこれが海面に触れると大音響と共に爆発を起こし巨大な炎と光ぼうを放って燃えた。

あとで漁師たちは爆発のあった付近の海から珍しい金属片を採取した。この金属片は当時この方面の研究者で知られていたリオのオラーボ・フォンテス氏の手元に送られた。

この物質は5年間金属学的、鉱物学的、結晶学的に慎重に分析研究を続けた結果、1962年純マグネシウムの合金金属であることが発表された。そしてこの純度をもつマグネシウムはこの地球上には存在しないことが明らかになった。

この発表についてフラビオ・ペレイラ教授は、このことはUFOが存在することの重要な証拠になるものだと述べている。このような金属マグネシウムは米国でもソ連でも宇宙衛星やミサイルなどに欠くことのできない重要資材である。ところがこの発見された純度のマグネシウムは米・ソが現在ミサイルや人

●軍艦アルミランテ「パロージ」号上から写した、UFOについては最良の写真といわれるもの。



工衛星製造用に使っている金属マグネシウムに比べてはるかに純度の高いものである。ウバツバで発見されたこの金属片の一部は分析研究のため米国にも送られ、ブラジルでの場合と同様米国の科学者たちをビックリさせたものである。

現在この金属片はリオの「空飛ぶ未確認物体研究委員会」の金庫に厳重に保管されている。この物質は明らかに地球外のいずかか天体から来たものに違いないとされている。

空飛ぶ円盤とは？

円盤に関するすべての問題はいつも次の3つの根本問題に引っ掛かりがあるとフラビオ教授はいふ。——すなわち、円盤とは何んであるか？そして何を望んでいるのか？という疑問である。第1の問題は技術問題として科学者に最も興味ある問題だが、われわれの科学者がもし円盤をとりまく1000年も進んだ技術を解明できるなら、最初に車輪が発見されたときと同様の

の革命が達成されるだろう。第2の問題はフラビオ教授によれば、

国家の保安に関心があるので軍部に関心がある。円盤とは、米国やソ連などの超大国の秘密兵器なのかもしれないといった仮説にもとづいた調査も行われたが、円盤出現をめぐる神秘的データはこうした仮説の尺度からはるかに遠いようである。第3の彼らは何を望むのか？についてはまだ全然不可知である。他の宇宙人が果して地球人に敵意を持つものかどうか今のところ全然その証左はない。ではその反対かということもこれまた全然不明である。しかし、この3つの問題の重要性は、ウ・タント前国連事務総長の言明に要約されている。——国連にとって、円盤問題は冷戦や開発途上国の経済問題と同様の重要性をもつ問題である。

統計

1800年にヨーロッパの天文雑誌に現れている円盤問題についての報告は60件である。

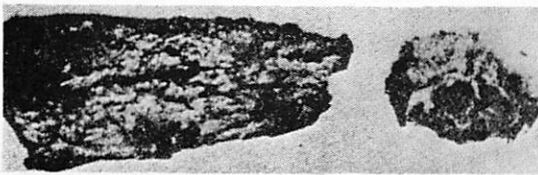
それが1900年には300件に増えている。しかもこれは年々増加しており、2000年までには驚くべき数字になるだろうとみられ、フラビオ教授はこの問題の深い研究の必要を力説している。

神秘性

サンタ・カタリナ州で見つけられた不思議な金属片に関してフラビオ教授は非常に重要視していて、この金属片は、いわゆる「宇宙塵」やまたは宇宙競争で米国やソ連から打上げられたロケットや衛星の残骸などでないことをよく実証する必要がある。第1そうした「宇宙塵」は地上に到達する前に燃えつきてしまうはずであるという。

いずれにせよ、サン・ミゲル海岸で見つけられた不思議な金属片の調査研究は、これほどことから来たものに関心を持つ海軍も一緒に加わっているし、まだその結果が判明するまでにはかなりの時間がかかるものと見られている。

(1974年8月6日付、パウリスタ新聞)



●ウバツバ海岸で1957年に爆発した円盤の破片と見られる、純金属マグネシウム片。この地球上には存在しないといわれる純度のもの。

科学 ニュース

新種キノコを発見

●中学の理科担任の先生

徳島県海部郡日和佐町大戸の山林で、このほど(一九七四年十一月)新種とみられるキノコが見つかった。発見したのは日本菌学会員で日和佐中学理科担当の大橋孝教諭(36)で、腐食した落ち葉の上にはぼ置一枚分の大きさに群生、カサは直径2/3センチ、厚さ5ミリの濃紫色。茎は長さ5センチ程で細くてやわらかくヒダも紫色だった。

同教諭が調べたところ日本在

来のアマタケ、ワサビカレバダケ、モノノカレバダケなどのどれにも当てはまらないため、キノコ分類学者の滋賀大本郷次雄教授に鑑定を求めたところ、文献にもない、きわめて珍しいものとわかった。

群生はまもなく消滅したが、大橋教諭は「必要な養分を吸収し尽くしたか、何らかの抗生物質を出して自滅したのではないか」といっており、今「幻のキノコ」の発生条件を究明している。

X線照射の過剰は健康に害

●アメリカで調査報告

不必要なX線撮影に対しアメリカ人は1年に14億ドル支払っており、1000人の生命を奪っている、一九七四年12月18日ラルフ・ネーダーの健康リサーチ・グループが報告を発表した。

デイキンソン大学物理学助教授プリシラ・W・ロウズ女史は年間1億3000万に及ぶ医学的、歯の治療のためのX線撮影の30%は医学的に正当化されないものであるとしている。

この「医学的X線、不必要な

放射能の危険に身をさらすことを避けるための消費者ガイド」と題する報告書は、低いレベルの放射能が出生に際しての欠陥や遺伝的な突然変異、ガン、白血病を増大させること、人類はいつも核兵器テスト、テレビ、ラジウム、ダイヤル時計、そして高度飛行で放射能攻めに会っているなど、米国は多大のX線にさらされていると報告している。

また、胃へのX線照射は喫煙による肺ガンより危険なガン発生率を示していることを伝えている。

ことに危険にさらされるところの多いのは、胆のう、肝臓、脊椎、胸、骨盤、ヒップだという。そしてどうしてもX線を使用するには重症の場合のみに限るべきだと警告している。

レーザー光線で 家庭ゴミ分解

家庭から出るゴミを分解するための焼却炉がシドニーの実験で成功したと一九七四年11月23日、マクワイヤー大学の客員講師のエルマー・ライスク氏が発表した。この焼却炉はレーザー

光線を使用するもので、安あがりという。しかし取り扱いが難しく一般的使用にはまだ間があるという。

また、ゴミが分解するときに発生するガスがバーナーの燃料として使用でき、家庭に熱いお湯を供給するようにもなっている。レーザーの熱量は大きく、量大出力20ワットで金属を分解するほどでナイフ、フォーク類も溶けてしまうという。

だが、実際、普及されるにはこれらの危険性は取り除かれる必要があると警告が出されている。

ことし1月エロスを 特別調査

一九七四年12月4日、ソ連の新聞ブラウダは、ソ連の科学者は一九三二年以来小惑星エロスが最も地球に接近する一九七五年1月に特別調査を行う予定である、と発表した。

記録されてない小惑星は一八〇〇以上もあるなかでエロスを調査することになった理由を科学者は、エロスが異常な楕円軌道を持つことと、断続的な光を放つことであると、この光を

分析することでその輪郭を正確に把握でき、小惑星の起源についての知識を広げることができらうと語っている。

新氷河時代は間近に

●「突発的にやってくる」

一九七四年11月20日、イギリスのテレビ・ドキュメント番組で、新氷河時代が現代人の生きている間に来るかもしれないと発表された。

発表したのはイギリスの科学作家・ニーゲル・カルダー氏で「新氷河時代の脅威は今や人類にとって全体的な死と災いをもたらす核の脅威と同様に考えなければならぬ」と、語っている。

「理論通りにいけば、今のところ、トロント、レニングラード、グラスゴーは厚い氷の下に閉ざされているべきだ。が、それはゆっくりゆっくり広まるというのではなく、劇的に「雪の猛攻」が襲ってくる。その証拠もあるので注意すべきだ」とカルダー氏は述べているが、メイソンのジョージ・デントン氏も次のように語った。「今は事実上の氷河期中期に入

っている。それは今世紀の暖かい天候がくずれやすいことに現れている。たとえば一九五〇年以来、北半球が寒冷化し、一九七〇年にはインド、アフリカに異常干ばつを見舞っているのがそのしるしだ。これは大氷河期が始まることの現れてないといはけつして言えない」。

こうした証言は、科学者たちが氷河時代は、太陽に対する地球の傾きによる軌道のわずかな変化によって生ずる、という理論に基づいているといわれる。

そして、この氷河時代到来の誘因となるのは、大火山の爆発と人工的大気汚染で生じた大気圏の「ほこり」だと警告している。

「だが、人類が与えられている時間内に、気象学における国際的協力をして気候パターンを交えればうまく氷河期を迎えなくてすむかもしれない。それは空中の炭酸ガスの量を人工的に増加させることだ」とカルダー氏は強調している。

地震の予測は可能！

●地球の回転率などに原因

アメリカ、パサデナにあるカ

リフォルニア工科大学のドナルド・アンダーソン氏は一九七四年11月15日、科学作家の会合で「地震はゆきあたりばつたりに起るのではなく、世界的パターンに基づくものだから、十分なる地震研究所の設置で予測も可能になる。それは、地球の回転率や1日の長さのわずかな変化が地震に圧迫を加えていて、それが危険なレベルまで近づくと地震が起きる。また、この回転率には、風、火山活動と相互作用の関係がある」と語った。

同氏の予測によると、大地震は60〜100年の内には起こらないが、小規模のものは広い地域にわたって起こる、という。この理論を裏付けるこれまでの例として同氏は「一八九七年から一九〇七年までの10年間、世界で45の大地震が起きたが、これは地球が最も急速に回転速度を遅くした時期であり、過去二〇〇年の内の最大の地震活動だった」と語っており、この時、天候パターンも温度変化も急変化したという。

新構造の素粒子を発見

●長寿命で大きな質量をもつ

米スタンフォード大学は一九七四年11月18日、これまで知られていなかった新しい素粒子が同大の線型加速器センターとニューヨークのブルックヘブン国立研究所でこのほど、ほぼ同時に発見されたと発表した。

スタンフォード大学のバートン・リヒター教授とブルックヘブン研究所のサムエル・C・C・ティン教授は、この日の共同記者会見で「この新素粒子は、我々が知っている素粒子とは違ったもので、新しい構造をもっていると思う。どのような特性があるのか全く知られていない素粒子が突然発見されたことは非常に興奮させられる出来事である」と述べた。

発表によると、この新素粒子については理論的にも説明されておらず、現在、理論物理学者たちが、これまでの素粒子論のワクの中でとらえられるかどうか懸命に研究している最中で、これまでの原子物理学理論の空白を埋めるものと期待されている。

新素粒子のエネルギーは30億

電子ボルトを少し超える程度でこの素粒子は1秒の1兆分の1または1億分の1という短い時

間のうちに崩壊して「ハドロオン」(重粒子)や「レプトン」(軽粒子)と呼ばれる素粒子に変わってしまう。だがこの新素粒子の寿命は、大きな質量をもつ素粒子にしては予想以上に長いといわれる。

こうした現象は、この素粒子がまだ知られていない新しい特性を持っていることを示唆すると考えられている。

続いて新素粒子発見

スタンフォード大学線型加速器センター(SLAC) 研究班主任のバートン・リヒター教授は一九七四年11月22日、同センターで、また新しい素粒子が発見されたと発表した。この素粒子は21日、素粒子の衝突で生まれる素粒子シャワーの中から発見されたもので、エネルギーは37億電子ボルトで「プサイ3700」と名づけられた。

ところが、同センターとマサチューセッツ工科大学・ブルックヘブン国立研究所共同チーム

は16日、三億五〇〇〇万電子

ボルトの素粒子を発見したと発表「プサイ3105」と名づけ、マサチューセッツ工科大・

ブルックヘブン国立共同チームは「J粒子」と命名している。

これら新粒子の不思議な性質の一つは、寿命がマイナスイオン20乗と比較的長いこと。新素粒子については原子核内の強い相互作用を持つ粒子、あるいは弱い相互作用の力を持つ粒子とみるなど、さまざまな仮説が提起されている。

地球の中心部は鉄ではない

●大阪大の川井教授らが研究

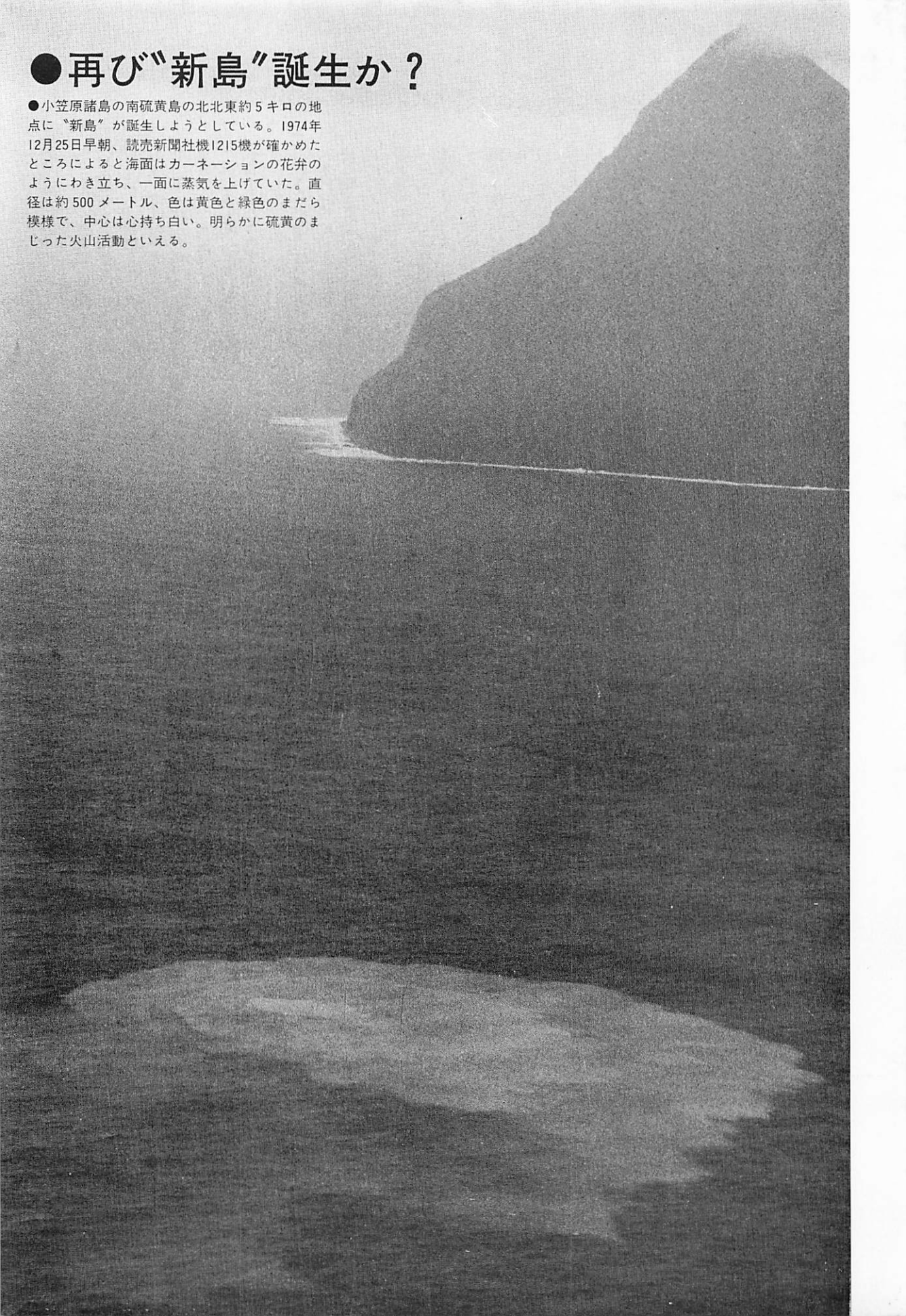
大阪大学基礎工学部の川井直人教授らは、一〇〇万気圧を超える超高压下では、地球の主要構成物である石英(シリカ)、酸化マグネシウムが金属と同じ性質をもつようになること(金属化)を実験で確かめ、国立京都国際会議場で開かれている第4回超高压力国際会議4日目の(一九七四年)11月28日発表した。

一〇〇万気圧というのは、地球の中心部の核の内部に匹敵する圧力。地球の核はドロドロとけた鉄で出来ているというのが定説だが、こんどの実験結果は核が石英など、ありふれた酸化物で出来ている可能性を示すもの

である

●再び“新島”誕生か？

●小笠原諸島の南硫黄島の北北東約5キロの地点に“新島”が誕生しようとしている。1974年12月25日早朝、読売新聞社機1215機が確かめたところによると海面はカーネーションの花弁のようにわき立ち、一面に蒸気を上げていた。直径は約500メートル、色は黄色と緑色のまだら模様で、中心は心持ち白い。明らかに硫黄のまじった火山活動といえる。



だとして注目されている。

実験に使われた超高压発生装置は、川井教授が9年前に考え出した分割球体型の2段加圧装置。

川井教授はこの装置を使って昨年から、当時大学院生だった西川昭夫さん（現在三菱金属勤務）と共同で、九九・九九%という純粋な石英、酸化マグネシウムの結晶を使って金属化実験に取り組んだ。この結果、常温常圧では石英、酸化マグネシウムは電気を通さない絶縁体だが、圧力を高くしてやるとしだいに電気を通しやすくなり、ある圧力に達すると一挙に一〇〇万倍以上も電気伝導率がよくくなった。それ以上の圧力を加えても電気伝導率が変わらなかったことから、金属状態に達したことが確かめられたという。

この時の電気伝導率は鉄や銅に比べて二けた低く、金属化に必要な圧力は、酸化マグネシウムの方が石英よりかなり高かった。

しかし、50万気圧以上の超高压の測定方法が確立されていないため、金属化した時の圧力は正確にわからず、一五〇万気圧程度と推定されると言う。

空耳は自分の「声なき声」

●脳波・筋電図学会で発表

空耳（幻聴）は他人の音が聞こえてくるのではなく、自分の、「声なき声」だった——大阪大学医学部（精神医学）の志水講師が研究したもので、その人のど、くちびるの周りにある発語筋の筋電図に変化がおこっており、声にならない言葉（内言語）が出来ていることがわかった。

大阪市北区の日本生命中之島研究所で開かれた第4回脳波・筋電図学会最終日の（一九七四年11月）29日発表したもので、これは夢の中で話をしているとき（寝言ではなく無言）に、同じ発語筋に筋放電が記録されたという同講師の3年前の発表を発展させたもので、2つの研究で、「空耳は起きていたときの夢」という仮説が実証されたといえそうだ。

大阪府立中宮病院の井上健医師と慢性精神分裂病患者約20人の協力で実験したもので、同講師は幻聴と発語筋の筋放電が一致するかどうかみるために、くちびるの下にある発語筋の部分に毛髪くらの細さの金属電極

をそえて患者が悪口や脅迫などの幻聴を聞きはじめたら、ただちに合図のボタンを押してもらうようにして、同時に発語筋の筋電図をポリグラフにとった。

すると、患者がボタンを押す直前かあるいは押しているあいだ発語筋の少なくとも一筋で、筋放電が同時に出ていることが約半分の患者ではっきり認められた。

また、筋放電は幻聴の音が大きい場合ほど大きく、筋放電は大體、幻聴より1、2秒先行して起こっており、筋電図に変化がある時間と幻聴を聞いている時間の長さもほぼ一致した。

このことから、志水講師は、「幻聴は実は自分自身の心のある考えが、内部で無意識に言語化（内言語またはサブ・ポーカー・スピーチ）されてその「言葉」を他人の声として聞いていることになっている。一般の人でも暗算したり、黙読したりするとき、他人に聞こえる有音にせずに、言葉をつくってくちびるだけが動いていることがあるが、そのような、声になっていない言語が他人の声として聞いているのだと思う」と説明している。

西之島の南方にまた「新島」

西之島の南方にまた「新島」

一九七四年12月24日、在日米海軍から海上保安庁に「小笠原群島の南硫黄島付近の北緯二四度一六分、東経一四一度三〇分の海域で、火山活動による「新島」を発見した」と連絡してきた。

海上保安庁によるとこの「新島」は火山活動で誕生した「西之島」の南方三五〇キロの地点に位置するものであるとみている。

木星に生物がいる！

●探査機からの写真で判明？

（一九七四年）12月3日、これまでになく木星に接近した米国の木星探査機バイオニア11号からは地球に次々と写真が送られてきているが、いずれの写真にもオレンジ色が見られるため科学者たちは木星に生物がいるのではないかとにわかに関心を強めている。

このオレンジ色について2つの見方がある。
1つは生物の基本的構成物質である有機分子が存在している

という見方。つまり木星の大気には40億年前、地球で生物を生み出したとみられる、同じ化合物のアンモニア、メタン、水素に水を合わせたものが含まれているとされること。

2つ目の見方は、オレンジ色かアンモニアと硫化水素の化合物を含む雲が存在していることを示すというもの。

この2つの見方は、過去、科学者たちによってとなえられてきたことから、木星に生物がいることの信ぴょう性が高いとみられている。

日本初の高速ビーム達成

●サイクロトロンで4億7千

日本で陽子ビームを四億七〇〇万電子ボルトまで加速することに成功したのは茨城県・筑波学園都市にある国立高エネルギー物理学研究所で一九七四年12月5日に発表した。

加速に成功したのは同研究所に建設したわが国最大の陽子加速器（シンクロトロン）のブルースター。シンクロトロンというのは原子核に陽子を体当たりさせて破壊し、中に隠れている素粒子を見つめる装置で、核内

から素粒子を飛び出させるには原子核自身の一〇〇倍から一〇〇〇倍のエネルギーが必要となる。この高エネルギーを陽子に身につけさせるために加速するのがシンクロトロン役目だ。

このスピードは、光速の75%近くに当たる。陽子の加速が一億電子ボルトの大会を超えたのは国内の研究施設では初めてのこと。

太陽と地球との関連究明へ

●西独が人工衛星打ち上げる

西独の人工衛星「ヘリオス」(重さ三七〇キロ)が一九七四年12月10日午前2時11分(日本時間同日午後4時11分)タイタン・セントロールロケットで打ち上げられた。

ヘリオスは太陽を3周して太陽から四五〇〇万キロ以内まで接近する予定で、ことし11月にはもう1つのヘリオス衛星も打ち上げられる予定。

今回の飛行期間は18カ月をかけ、太陽が地球にどういふ影響を与えているかについて科学情報を収集するが、国際協力で地球の引力圏を脱出して太陽を回る人工衛星が打ち上げられたの

は、ヘリオスが初めて。

精神安定剤使用は異常児を産む

トランキライザー(精神神経安定剤)が先天異常児を産む原因になっていると、医学誌「ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディスン」が伝えている。

発表されたのは一九七四年12月初旬の同誌で妊娠初期にこれを飲むと異常児を産む危険が高まるという。その精神神経安定剤はメクロバメートとクロルジ

アゼボキシドの2つで、いろいろの商品名で売られている。カリフォルニア大の学者の研究によると、2つの薬を妊娠6週間以内に飲んだ妊婦は、精神的か肉体的か、ときには両方の障害を持った赤ちゃんを産む危険が増加するという。

この調査は6年間にわたって妊娠中に不安とか、緊張感、軽い抑うつ症状を訴えた女性約2万人の記録を分析したもので、妊娠6週間以内にこの2つの薬を飲んだ母親はこの期間に精神神経安定剤を全然飲まなかった母親に比べて約6倍の率で先天

異常児を産んだ。異常の内容は知能の遅れ、心臓の奇形、難聴、関節の欠陥、腸の奇形など。

ミルコピッチ女史は「この問題の難しさの1つは、患者が妊娠しているかどうか分からない時期に服薬がよくない点だ。妊娠初期のころだから……」といっている。

他の惑星の知性体にメッセージ

●フェルトリコから発信

宇宙の他の天体の知性体と通信するため、人類初の協定した試みが進行中である。しかしメッセージが目的地に到達するのは二万四〇〇〇年後であり、メッセージが正確に受信され理解され、返答されるかどうかを知る方法はいまだにない。

そのメッセージを解く手がかり、その発信者および受信地が示されているメッセージは、フェルトリコのアレシポにある世界最大の電波望遠鏡から外宇宙に向けて発信されている。

これはかつて地球から発信されたメッセージのうちで最も規模の大きなものである。電波望遠鏡の四五万ワットの発信器と

直径三〇〇メートルのパラボラは宇宙へメッセージを発信するために結合されており、その望遠鏡を操作している係員によると、かつて人間が人工的に起こした電気の25倍に相当する出力を持っているという。

その目標とする地球から二万四〇〇〇光年の約三〇万個の星からなるM13までそのメッセージが到達するためには、それくらいの出力が必要である。

M13が目標として選ばれたのは2つの理由がある。

まず第1にM13にはある生命体を維持する可能性があると天文学者が考えている多くの星を含むこと。

第2に、M13は星団のすべてがメッセージを1つ残らず受信するのに正確なサイズだ。

人類はその最先端をゆく伝達媒体を使いながら一方、人類の最も基本的な言葉である数字と絵画を使用しているが、このメッセージの中の符号の合計数は一六七九で、2つの素数、つまりそれ自身か、または1で割り切れない数字から成っている。

科学者たちはこの電波を受信した生命体が、これがメッセージであることに気づき、そのメ

ッセージが23種の記号と73列からなる一つのゴパンの目に組み立てられることを理解するだろうと考えている。

また、メッセージはその言葉の要素である1から10までの素数で初まる。それから水素、酸素、窒素、炭素、リンなど、我々太陽系そして宇宙の基本的な要素である原子番号がくる。それに地球の基礎的生物学の基本的な説明である生命のカギと考えられているDNA分子の構成要素を数字で明らかにしたものと、DNA構造の図式的な絵とでなっている。

そのほかに2つの数字からなる単純な人間の図がある。数字の一つは四〇億。これは大地球の人口を示している。もう一つは一四で、これはそのメッセージの二・一・六センチの波長の14倍で、人類の平均身長一七六・四センチを示している。また我々太陽系の図は地球のサイズおよび太陽と他の惑星と地球の位置関係を現している。

最初の発信は一九七四年11月16日だったが、電波望遠鏡が他の目的に使われていないときはいつでも発信されることになっている。

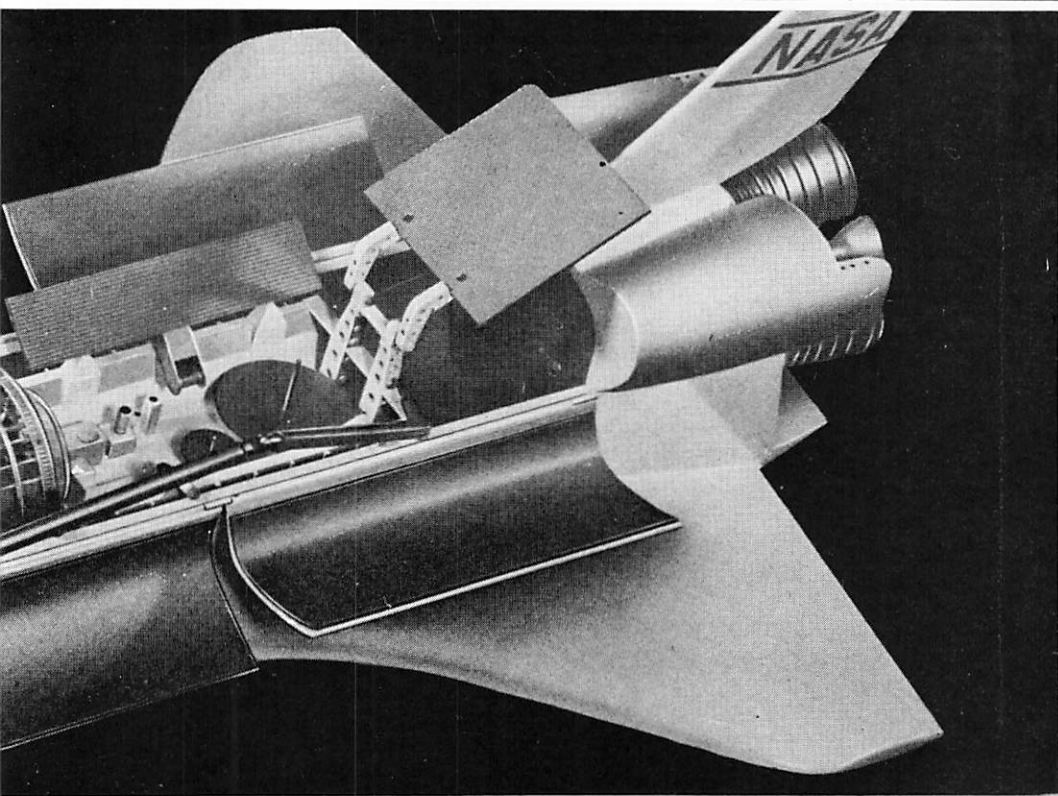
UFO研究と語学

■日本で出ているUFO関係の図書はまだ少数であり、しかも大体に文筆家またはアマチュア研究家の書いたものが多く、教授・科学者の手になるUFO研究書はほとんどない。これは学者がUFO問題を取り上げようとしないうえ後進性のためだが、海外では一流大学の学者が堂々とUFOの研究書を出しており、特に米圏は壯観である。ところが、これらの著書のすべてが日本で翻訳されているわけではないので、より多くの知識・情報を得ようと思えばどうしても海外の原書を読まねばならない。そこで重要な武器となるのが語学である。語学といっても数カ国語をやる必要はなく、英語だけでもマスターすれば英米の重要なUFO関係文献（入手さえすれば）すべて読めるわけで、知識は飛躍的に増大する。日本のUFO研究者で著書を出している人は海外の資料を読破しては材料を仕入れているのである。■ところで、この英語というヤツが簡単にはものにならない。多年のキャリアを持つ専門家の訳文がミスだけであつたり、直訳調のぎごちない文章であつたりする。英国の有名なUFO専門誌 *Flying Saucer Review*（隔月刊・32頁）などはかなり格調高い英文で書いてあるので、生半可な語学力では読めない。これが楽に読めれば相当なものである。翻訳ともなると英語そのもの以外に科学・文化一般の広い知識を必要とし、そのための十分な参考書類を持たないとだめだが、根本的には語学力がものをいうので、これを徹底的に習得しなければならぬ。■そこで問題となるのは「どうすれば英語が上達するか」である。これについて筆者は数十年来考えに考え抜いたあげく、ある一つのアイデアを生み出すに至った。これはオーソドックスな学者先生方ならあたまたから嘲笑されるかもしれないような風変わりな方法なのだが、多数の学習者を対象とした実験をくり返して結果を見ないことにはうかつに発表できないので、ここでは省略する。しかし従来のオーソドックスな学習法でも努力さえすればかなりのレベルに到達できると思う。だがそれ以外にも自分なりの独特な学習法をみずから考案して勉強することが大切である。ずばぬけて記憶力のよい人が辞書を見てかたづけしてから単語を丸暗記しているからといって、だれもがこの方法を応用できるわけではない。初歩者がこんな方法でやると、かえってよくない結果をもたらすだろう。まして辞書や単語集を見てアルファベット順に単語を暗記するのは愚策としか言いようがない。

■基礎学力をつけるには何といっても中学・高校のレベルを徹底的に学習してこれを踏み越えることが重要である。この段階を克服しないでUFO関係原書を読むことは全く不可能である。中学・高校の英語教科書の英文はたしかに基礎となるのであって、こうした英文を丸暗記するまで反復熟読することが重要なのだが、大半の生徒は試験が終わればもう用はないものとして学習した部分を忘れてしまう。これでは力がつかない。文法にしても高校程度をマスターしておけば大体足りる。あとは原書を読んで更に自分の語彙を広げてゆくのである。しかし雑多な原書を漫然と読み流しているだけでは決して向上しない。これと思う何か1冊の原書を手にして、それを暗記するほどに徹底的に

反復熟読する方がよい。英字新聞を毎日読めば力がつくとされているが、これも読み流しているだけではだめで、それよりもある日の1日分の英字新聞を何日もかかって隅々まで徹底的に調べて、不明の単語を全部単語ノートに書き抜いて、それを暗記するまでは別な日の英字新聞を読まない、というやり方がよい。■UFO研究者が英文原書の読書力をつけようとする場合も同様で、無差別に各種の原書を、それも訳文を書かないで断片的に読みとばすよりも、立派な英文で書かれたUFO関係の原書を徹底的に読んで訳文を書き、少しでも原文を暗記する方がよいのである。■どんな原書がよいか、となると、人によって好みは異なるだろうが、筆者は George Adamski と Desmond Leslie 共著の *Flying Saucers Have Landed* と、同じく Adamski の *Inside the Space Ships* をおすすめる。前者の Leslie が書いた第1部にある古代からのUFO出現史は、いわゆる目撃報告の典型的な英文の宝庫であつて、これを徹底的に学習すれば英文目撃報告のかなりな程度のもので読めるようになる。第2部の Adamski の書いた部分と後者の書物は *contact story* の代表的なもので、内容に対する信・不信は別として、英文で書かれた各種の *contact story* を読むための絶好の基礎テキストとなる。前者は信堂・高文社から「空飛ぶ円盤実見記」、後者は「空飛ぶ円盤同乗記」と題して邦訳版が出ているが、更に後者の改訳が日本GAP発行の機関誌「GAPニューズレター」に連載されている。これらの原書や「GAPニューズレター」の入手法に関しては本誌編集部に照会するとよいだろう。あるいは英国の *Flying Saucer Review* 誌のどれか1冊を入手して隅々まで研究するのもよい。ただし自分で訳した場合は誤りに気づかぬ場合があるので、不明な点は専門家の教示を得ることが肝要である。この *Flying Saucer Review* 誌には英米で発行されるUFO関係の新刊書の広告も出たりするので都合がよい。■以上の特定原書重点主義による学習にもやはり中学・高校程度の基礎学力が土台となっていなければならない。UFO関係原書には一般の刊行物であり使用されない特殊な語が出てくることもあるが、文章構成法からみれば高校の英語と本質的には異ならない。単語・熟語に難易の相違があるだけだ。恐れることはない。■大体、横文字がぎっしりと並んでいるのを見ただけでうんざりしたり畏怖心を起こしたりするのは、英語というものを極端に神聖視して教えてきた学校教育に原因があるろう。欧米文化崇拜思想がまだ日本人の意識の中に根強く残っているらしく、UFO関係原書にしても、なかにはいかかわしい書物もあるのだが、日本人にとってはオソレオイように見える横文字であるため、とにかく横文字で印刷してあるUFO関係原書なら何でもかんでも権威があり真実が述べられているような錯覚を起こして引用したりする。もっと横文字そのものに対する観点を養う必要があると思う。印刷物のレイアウト作業で写植（写真植字）の貼込みなどをやってみるとわかるが、横文字よりも複雑な日本文字の方がはるかに優美な感じがする。また我々日本人が外人にとっては絵やら文字やらわからぬような複雑な漢字を手書きで急速に書いてみせると彼らは驚嘆するのである。こうした文字の書ける我々ももっとプライドを持つべきだ。そして横文字コンプレックスを解消する最大の手段こそ語学に強くなることである、と言えよう。話が少々脱線してしまった。（常岡理太郎）

●〈天空と大地〉科学シリーズ(9)



一九八〇年代の宇宙連絡船

今や宇宙開発はスペース・シャトル時代！
世界的レベルをゆく東大の研究成果は？

東京大学助教授
理学博士

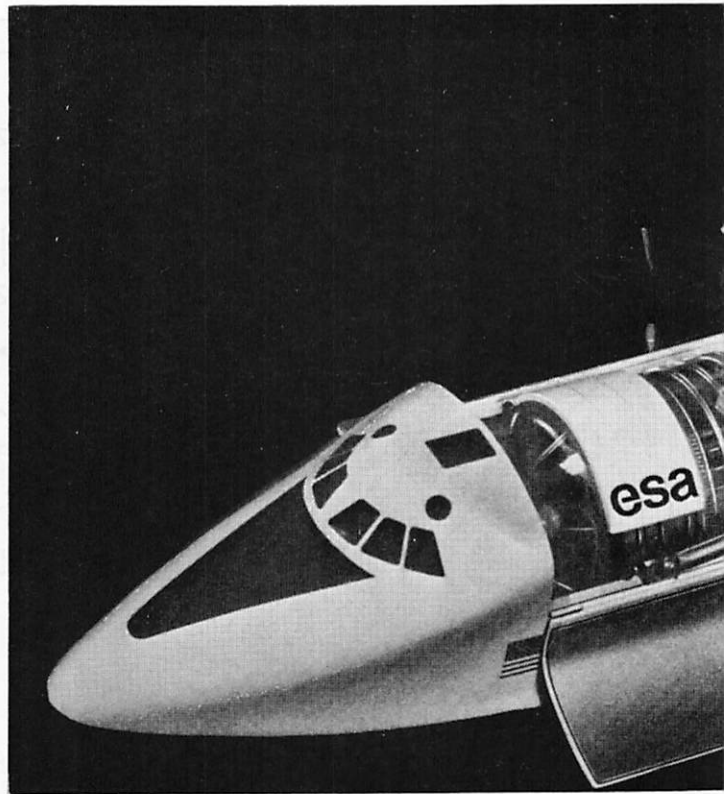
河島信樹
東京大学宇宙航空研究所

一、はじめに

一九五八年に人類初の人工衛星がソビエトによって軌道に乗せることに成功して以来、すでに一五年以上を過ぎ、その間における人類の手による宇宙開発の進歩は目ざましいものであった。これはアメリカとソビエトと言う二つの大国がその国威をかけて競争したことが大きな力になっているが、何と言っても人類全体が宇宙開発の成果に対して大きな期待をもっていたことが強い支えになっていた。確かに宇宙というものは夜、私たちが外へ出て空を眺めればすぐに目にはいって来て、

そこに人類の未知のものへの夢をふくらませてくれる本当に身近な存在である。昔から空を眺めながら人々は空想をめぐらし月でうさぎが餅をつく様に感じたり火星にいるかも知れない宇宙人に思いをめぐらしたのである。この様に宇宙開発は単に純粋な学問的興味や実用目的のみならず、日頃特に科学や工学に無縁の人たちの興味にも支えられてこれまで発展してきた。

私たちの生活レベルの向上と共に物質的な欲望に対しての充足率が上がると共にこの様な未知の世界への夢をか



なえると、言う欲望が占める比重はますます大きくなっていくであろうから、宇宙開発が今後共この様な人類共通の宇宙への興味に支えられることは変わらないであろう。

その様な意味でこれまでの宇宙開発のピークは何と言ってもアメリカが達成したアポロ計画による人類の月世界探検であろう。私達は初めての人工衛星に大いに驚嘆しその偉大な成果に拍手を送ったのであるがその時に僅か一年ほどで人類が月に足を直接おろすことが出来ると予想をした人はほとんどなかったのである。この月世界探検は人類の宇宙の神秘に対する興味を直

接満足させてくれた第一歩であろう。

さてこの間にそれと並行して宇宙開発の実用的な面での進歩も全く驚異的なものであった。たとえば最も身近な例では通信衛星によるテレビの衛星中継である。地球の裏側の様子が私たちの近くのもののテレビ放送と全く遜色なく再現されているのに驚く。また、気象衛星によって送られて来る地上の雲の写真をみれば、私たち全くの気象の素人にも実に気象の変化を明確に教えてくれる。最近では、資源探査衛星アーツの美しい写真の数々で、人類の地上利用の実態や、資源の存在が明らかにされつつある。

もちろんこれまでの宇宙開発の中心的位置を占めていた純粋な科学的成果も見逃すことは出来ない。太陽風と呼ばれる太陽から吹いてくるプラズマ（原子の原子核と電子がばらばらになった状態）の流れと地球の磁場との相互作用の探査は、地上で観測されるオーロラや磁気嵐のメカニズムにメスを入れたし、また地上からは大気層にさえぎられて見えないX線を放出する星の観測は、中性子星やブラック・ホールと呼ばれる物質の極限状態の存在や現代の物理学の本質をつく問題の解明に力がそがれている。更に通信衛星の出現までは国際通信の主役であった電離層の研究は最近ではSST（超音速ジェット機）や地上の公害の問題との関連で研究が進められている。

さて、今までの宇宙開発のこの様なすばらしい成果に支えられてこれから宇宙開発はどの様な方向へ進むのか、また進むべきであるのかと言うことは多くの議論のある所であろう。もちろん、最初に述べた宇宙の神秘に対する興味を満足させてくれるものにはまだ数多くの対象がある。たとえば火星に人類が足を踏み入れることは火星に生物が存在するののかと言う疑問を解き明かすであろうし、また更に遠くの惑星探査によって今まで全然知られていなかった興味ある現象の存在への期待もある。太陽系の外にはまだ未知の

天体が数多く存在し、宇宙の神秘を秘めているが、これらを現在の様に光や電波で観測するだけでなく新しい観測手段を見出すことも新しい宇宙開発の方向であろう。現在人類は、木星まで無人の衛星を到達させたがこれを更に遠くの惑星まで届けるグラント・トゥアー（宇宙大旅行）も今後の新しい方向である。遠い将来には人類が太陽系を出て別の恒星まで到達することも夢ではなくなるであろう。

しかしながら、この様な宇宙開発は、非常にたくさんのお金を必要とするのである。通信衛星、気象衛星等といった直接実用に結びつく面は別として、特に科学的な宇宙探査と言うことは必ずしも私たちの身近な生活とは結びつかない面がある。したがって今日の様に石油問題から端を発したエネルギー危機が叫ばれる時代になると、宇宙開発に非常に多額の経費をかけることは、必ずしもそれを支える一般の人々の支持を得られなくなってきた。したがって、第一の条件として、出来るだけ安価な宇宙の乗物を開発することである。現在のロケットはほとんど部分が一度打ち上げられると宇宙空間が大気圏に捨てられて来る。これが飛行機の様に燃料だけを消費して機体は全て戻って来て何度も使用出来る様にすれば随分安価な衛星打ち上げが出来るはずである。この様な目的で現在

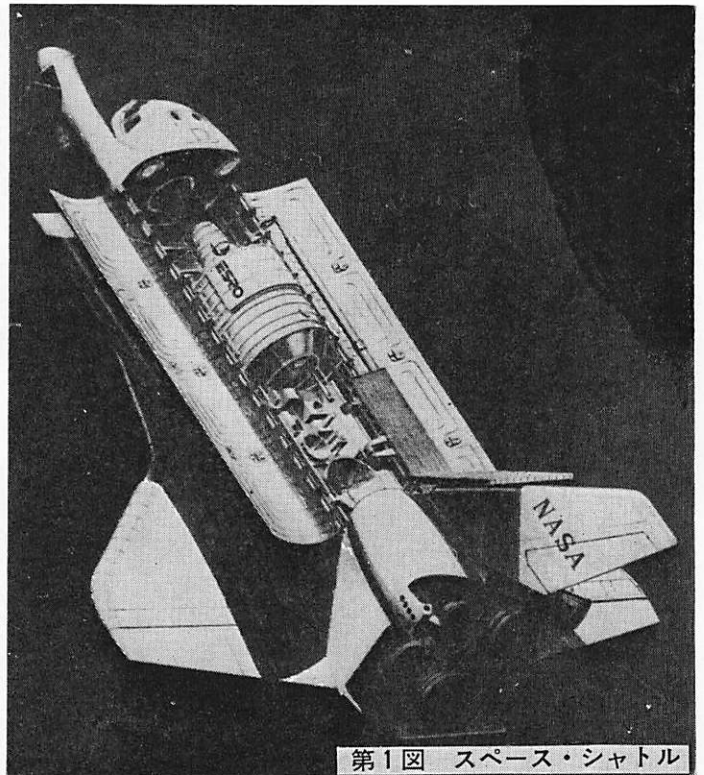
米国で開発されているのがスペース・シャトル(宇宙連絡船)である。このスペース・シャトルはその名前からもわかる様に元々の目的は、宇宙空間にスペース・ステーションと呼ばれる宇宙基地を建設した場合の連絡船として開発されるものである。現在このスペース・ステーションの計画はまだ進行していないが、当然それほど遠くない将来には実現されるものであろう。現在、スペース・シャトルはその前段階として単に連絡船としての機能だけでなく後に述べる様にそれ自身宇宙にお

一、スペース・シャトル

スペース・シャトルは既に述べた様に最終的には、宇宙基地への連絡用の宇宙船であろうが、現在ではまだそれ自身を用いて宇宙における実験を行うことが中心となっている。第1図に示した様に今迄のロケットや、衛星とは形も非常に変わっており、どちらからかと言えば現在の飛行機に近い形であり、大きさは現在のジャンボ・ジェット機よりは小さいが全長は約三〇メートルの長さがある大型飛行機と同じ大きさである。飛行機と同じ様に操縦席がありここに常時船長および操縦士各一名、搭載機器および実験の専門家二名の四名が乗り組んでいる。中央部

ける実験室として利用されることになっているが、これが単にアメリカ一國だけのものではなく国際協力によって行われることが特色である。宇宙開発に関してはもうその国の国威をかけて各国が競争すると言う時代は、アポロ計画による月の人類着陸と言うことによって終わったのである。これからの時代は、宇宙は人類全体のものとして協調して開発していく時代が変わりつつある。その様な意味から、スペース・シャトルは宇宙開発の新しい頁を開く重要な役割を荷っている。

にはスペース・ラブ(宇宙実験室)と呼ばれる実験室や、そこから更にロケットを用いて遠くへ衛星を飛ばしたりする装置等が載る様になっていて大きさは、直径四・六メートル、長さ一九・七メートルの空間が用意されている。この空間は打ち上げ時には二つに開く様になっているフタがかぶっている。最も理想的なスペース・シャトルは、もちろん現在の飛行機の様に滑走路から飛び立ち滑走路へ下りて来るのであるが、現在考えられているものはまだそこまで完全な形ではなく第2図に示した様にまず打上げ時には発射台から発射される。



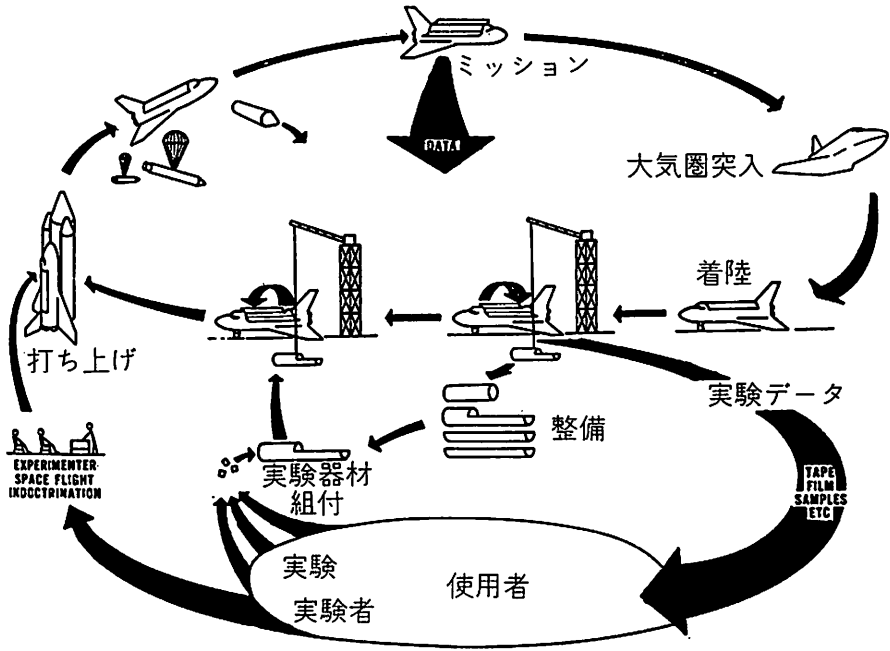
第1図 スペース・シャトル

発射時にはスペース・シャトルは大きな液体燃料のタンクとそのわりに二本の固体燃料のブースターロケット(補助ロケット)を抱いて飛び出していく。燃料タンクからはシャトルのエンジンへ、打ち上げ時の燃料が供給される様になっている。二本の固体補助ロケットは燃え尽きるとパラシュートで海上で回収されるが燃料タンクはそのまま捨ててスペース・シャトルは軌道へ入る。普通の標準的な軌道滞在日数は七日であるが実験目的に応じて変

えられ最高三〇日まで延ばすことが出来る。途中軌道を少し変えたり向きを指定の方向へ向けたりすることが出来る。赤道面と軌道面とのなす角度は初期の頃はケープ・ケネディーから打ち上げられるので最高五七度に制限されているが、バンデンバーグ基地から打ち上げられる様になると北極と南極の上を通る極軌道にも打ち上げが可能になる。軌道の高さは、大地上二〇〇キロメートル以上の円または楕円軌道が可能であるが、更に低い軌道に入る

ことも検討されている。その場合は二〇〇キロメートル以下では空気の抵抗が大きいので、低い所まで下りた所でもう一度エンジンをふかして上がって

くることになる。さて実験を終えたスペース・シャトルは、空気抵抗を利用して速度を落として大気圏にはいつてきた後、通常の



第2図 スペース・シャトル飛行プロフィール

飛行機の様になって地上の滑走路へ下りて来る。スペース・シャトルはこの後、整備され、搭載計器を積みかえて次の飛行に使用されることになる。

現在スペース・シャトル本体のテスト飛行は一九七八年頃から始まり、スペース・シャトルを利用した宇宙空間での実験は一九八〇年からと予定されている。この計画が軌道に乗ると、大体二週間に一回の割合でスペース・シャトルは軌道に上がることになり、基礎的な科学研究から私たちの生活に直接関係のある応用開発実用研究にわたる広い領域で、宇宙空間における実験が行われることになる。

スペース・シャトルは軌道の上で姿勢をいろいろ変えることが出来る様になっており、目標の方向に2度の精度で向けることが出来る。またもつと精度を必要とする天文観測等では後で述べるスペース・ラブの装置を利用してたとえば10度の精度でも向ける様に出

来る。

さてスペース・シャトルは今迄述べた様に宇宙飛行の乗物であり、地上でたとえればトラックの様なものであるが、これに何を乗せてどの様な実験や仕事を行うかについては大きく分けて現在のところ次の三つが考えられている。

1. スペース・ラブ (宇宙実験室) を乗せてその実験室および実験台の上で実験を行う。

2. 新しい衛星をスペース・シャトルの軌道に置いてきたり、静止軌道 (地球の自転と同じ周期で地球の周囲をまわる) や他の惑星への軌道へ打ち出す。

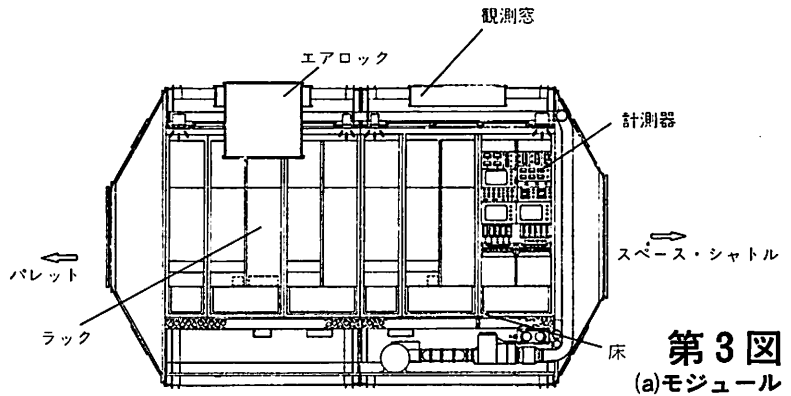
現在スペース・ラブはヨーロッパの各国が共同で宇宙開発を行っている機構 ESRO が約一五〇〇億円の経費をかけて開発を進めている。ここではまずこのスペース・ラブについて詳しく述べてみよう。

三、スペース・ラブ

スペース・ラブと言う言葉はスペースとラボラトリーの合成語で SPACE LAB と一語でつづられる。既に何度も述べた様にスペース・シャトルに搭載される宇宙実験室であるが、基本的には二つの部分から成り立っている。

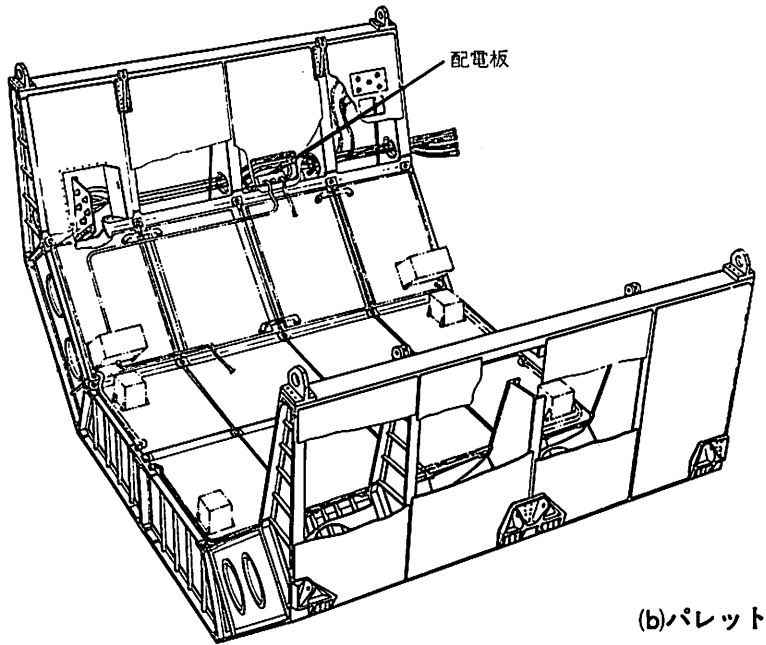
その一つはモジュールと呼ばれる地上と同じ気圧の状態に保たれ人間がその中で機械を操作出来る実験室であり、もう一つは宇宙空間にさらされたパレットと呼ばれる実験室である。それぞれの大体の形は第三図(a)および

(b)に示してあるがモジュールの方は一つのユニットの長さは二・七メートル、第三図(a)にはこれを二つつないだユニットが示されている。パレットの方はユニットの長さが二・九メートルで、スペース・ラブはいくつかのモジュールといくつかのパレットが組み合わされて構成されている。第三図(c)に示した例では二つのモジュールと一つのパレットが組み合わされた構成を示



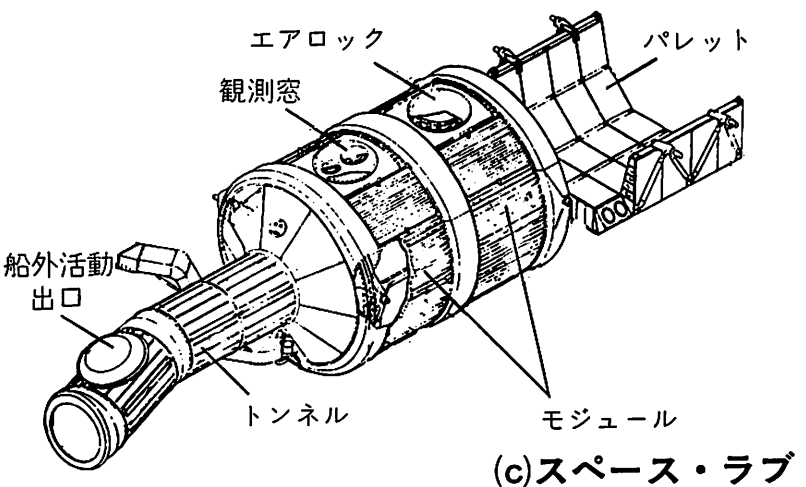
第3図 (a)モジュール

しているが、全部モジュールだけにしたりまた全部パレットだけと言う構成も可能である。この様に構成されたスペース・ラブはスペース・シャトルの荷物台の上に乗せられ、スペース・シャトルの操縦室とはトンネルで連結される。



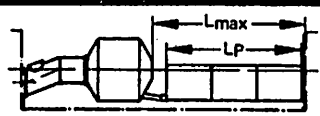
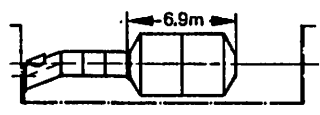
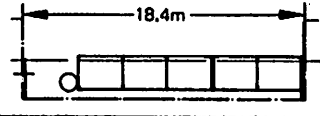
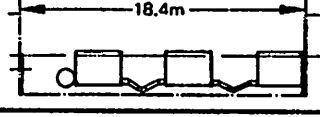
(b)パレット

構成の仕方でいくらか異なっているが大体重量としては五トン程度と考えてよい。この重量は、スペース・シャトルが着陸する時に許容されるスペース・ラブ全体の重量が約一五トンに制限されていることから決められている。



(c)スペース・ラブ

いる科学衛星が高々一〇〇キログラムであるので五トンと言う重量はかなりのものを持って行くことが出来るのである。ただ、米国としては既にアポロ計画での月着陸をはじめ、その後に行われた太陽観測を中心としたスカイ・ラブにおいてこの程度の搭載計器は取り扱って来たので、その点においては決して驚く程の重量ではない。また、アポロ計画、スカイラブ等と異なり今

CONFIGURATION	モジュール	パレット			
	容積 m ³	重量 (kg)	搭載面積 m ²	長さ L _p (m)	長さ L _{max} (m)
1 	8,0	5500	51.3	8.8	10,2
2 	22,6	5500	-	-	-
3 	-	8000	85.7	14.7	18,4
4 	-	9100	53,6	14,9	18,4

第 1 表

度は持って行った計器はまた持って帰ることになること、ミッションが普通は七日間で非常に短いことが特色であるので、搭載計器の製作においては信頼性や寿命の点でかなりゆるやかな基準で考えても良いことになる。極端なことを言えば、私たちが現在地上の実験室で毎日使っているものをそのまま持って行くことが出来ると言えるのであるが、実際問題としては特に初期の飛行実験では、その飛行経費が三〇億円かかること、またミッションの時間が短いために逆に言えば修理している時間がないことを考えると、やはりかなりの信頼性が要求されることはやむを得ないであろう。

重量に次いで重要なものは電力である。一般に今までの無人の衛星では太陽電池を用いて来たがスペース・シャトルでは電源は酸素と水を燃やして発電する燃料電池である。普通水に少し電気伝導度を持つ様に二本の電極を入れ電流を流すと電気分解で酸素と水素が作られるが、燃料電池はちょうどこれと逆のプロセスで電気を作るのである。太陽電池を使用しない理由は太陽電池が非常に高価であるためにスペース・シャトルの様にミッションが七日間と短い場合には燃料電池に比べて劣るのである。また、全部を太陽電池でまかなうとすると、かなりの面積の太陽電池パネルを用意する必要が

あり、開いたりたたんだりの操作が複雑になる上にスペース・シャトルの様に飛行ごとに搭載計器が異なるものでは太陽電池パネルがシャトルの周辺のかなりの部分を占めるとなると非常に不便なものとなるのである。

さて現在計画されている電力は全体で約八〇〇キロワット時（一キロワットの電力を八〇〇時間使用出来る）であり、平均電力は五キロワット、特にたくさんの電力が必要な場合には、九キロワットまで使用出来るがこの場合は三時間のうち一五分だけと制限されている。この電力は、ミッションの必要性に応じて使用出来る様に、

二八ボルト 直流電力（安定化されたもの）

二八ボルト 直流電力（安定化されてないもの）

一一五ボルト 六〇サイクル交流電力

二二〇ボルト 五〇サイクル交流電力

一一五V/二二〇V 四〇〇サイクル三相交流電力

が用意されている。

一方、数キロワットの電力を使うとその大部分は熱になってスペース・ラブおよびその搭載計器の温度を上げることになる。もちろん一部のエネルギーは光やその他実験の内容によってはエネルギーをスペース・シャトルの外

へ放出するものもあるが、それはごく限られたものでほとんどはスペース・シャトルの中で熱に変わる。更に太陽からは一平方メートル当たり一キロワット以上のエネルギーが光の形でスペース・シャトルに当たっているの、これを含めて熱を外部に放散する必要があり、このための装置がスペース・ラブには装備されており、モジュールの温度は居住に快適な摂氏一八度から二七度に保たれる。またパレットの温度も同様にコントロールされ搭載された計器が過熱されるのを防ぐ様になっている。モジュールの内部は温度だけでなく気圧は一気圧に酸素と窒素の比が二対四、炭酸ガスの分圧が五ミリメートル（水銀柱）、湿度は七〇%まで自由にコントロールされると言う様に全ての環境が地上の快適な生活環境と同じになる様に設計されている。

モジュールの中にはラックに組み込まれた計測器が壁にそっておいであり、中央で人が無重力で活動が出来る様になっている。無重力状態での人間の活動については既に一九七三年から七四年にかけて行われたスカイラブの実験で、延半年にわたって九人の人々によって行われてきたので十分の経験が積みまれ、特に問題となるところはな

い。実験は既に述べた様に七日間行われその間スペース・シャトルには船長

(二名)が全体を取りしきり、操縦士(一名)がスペース・シャトルの操縦を行う。この中には、後に述べる遠隔操作のマニピュレーターの操作や船外活動も含まれている。更にミッションに關する専門家(一名)、搭載計器の専門家(一名または複數)がいて前者はまたスペース・シャトル上で行うミッションに關する全責任を持ち、船外活動でもまず第一にこのミッションに關する専門家が行うことになっている。搭載計器の専門家は特に指定しない限り一名であるが、四名までは増すことが出来る。尤だこの場合余分の三名の分の食糧、空気、排泄等のための重量増加は全て搭載計器の中に含まれるので、人間が増した分だけ計器の重量が減ることになる。

これらのスタッフと地上とは緊密に連絡をとりながら実験を行い、特にスペース・シャトルと地上との通信に關しては今まで以上の能力が開発されることになる。一般に飛翔体と地上とを結ぶのには電波が用いられ、これをテレメーター/コマンド系と呼ばれるが、一度に伝送出来る情報の量や情報の伝わる速度には限界がある。そのためスペース・シャトルでは、別に通信専用の衛星(Tracking and Data Relay Satellite (TDRS))をいくつか打ち上げておき、それを介して地上との通信を行うことによって伝送速度を上げる

ことを計画している。現在考えられている伝送速度は六メガヘルツ(六百万ヘルツ)まで伝送可能になる。たとえば電話等の人間の音声の伝送は大体一〇〇〇ヘルツ位あれば良いので数千本の電話回線に相当することになる。信号はもちろん、符号化されたデジタル伝送、および、信号の振幅の時間変化をそのまま送るアナログ伝送の両方

四、衛星をスペース・シャトルの上から打ち上げるモード

スペース・シャトルの上にスペース・ラブを乗せてその中で実験を行うことはスペース・シャトル利用の大きなもの一つであるが、シャトルの上から新しい衛星を置いてきたり打ち出したりすることもまたそれと並んで重要である。大きく分けて二つが考えられており、一つはフリー・フライヤーと呼ばれる新しい衛星をスペース・シャトルの軌道に置いて来るのである。これによって今まで非常に経費のかかった衛星打ち上げが随分安価に出来ることになる。スペース・シャトルには、

が用いられる。このスペース・シャトルのミッションは、地上にプログラムされた実験計画を忠実に行うだけでなく、得られたデータを見ながら臨機応変に実験を行うことが出来る様にすることが有人飛行であることの特色を生かす最大のポイントであるので、地上とシャトル乗員との間の緊密な連絡は絶対に欠かせない条件である。

図に示した様にマニピュレーターと呼ばれる遠隔操作の出来る人工の手が取りつけてあり、これによってこの様な衛星を放り出したり、スペース・ラブで用いられるサテライト(孫衛星)を外へはなすことが行われる。

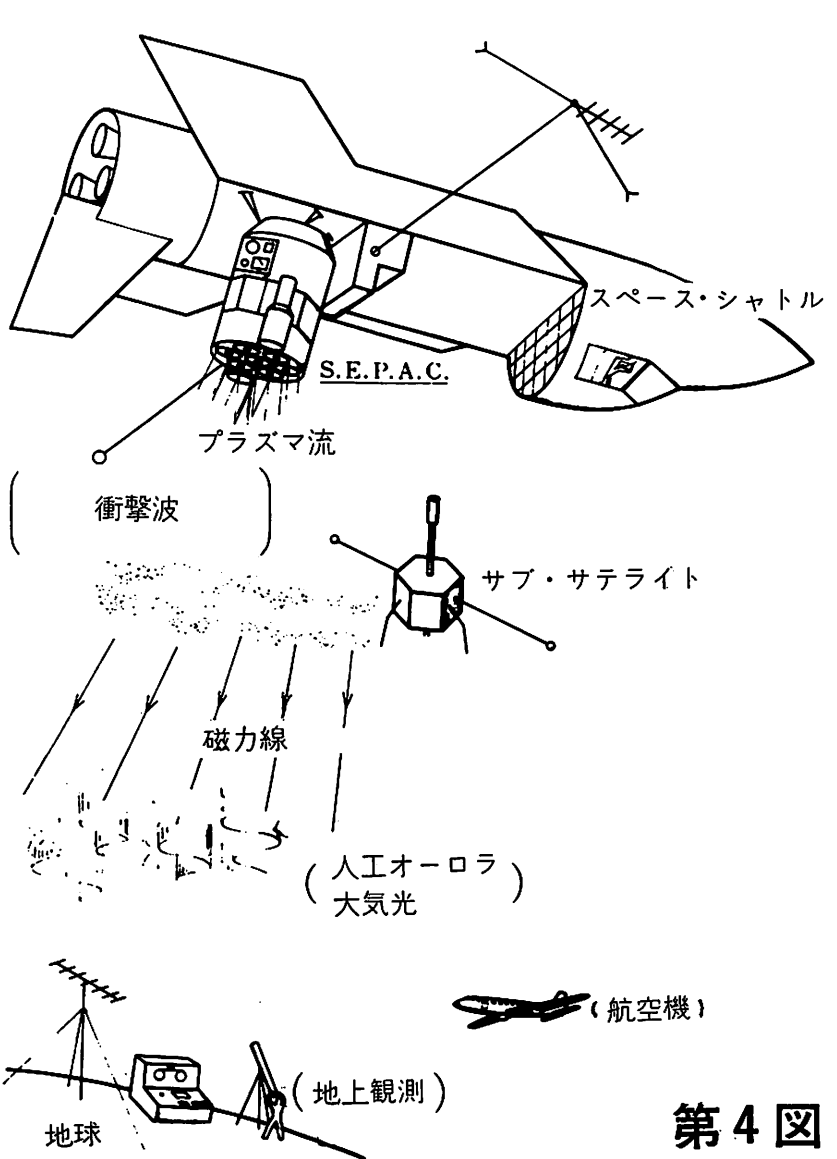
もう一つの衛星を更に遠くのたとえれば静止軌道や木星や土星等の惑星に向けて打ち出すモードはスペース・タグと呼ばれる、現在その方法が開発されており、遅くとも一九八〇年代中頃以降の遠方へ行く衛星はこのタグ・モードで打ち出されることになろう。

五、スペース・ラブを利用した宇宙実験

スペース・ラブを用いた宇宙実験にはいろいろのものが考えられている。大きく分けて、科学実験と応用実験があり、科学実験としては、

1. 大気圏（地上から一〇〇キロメートル付近）の科学
 2. 磁気圏（地球磁場と太陽からのプラズマ流が相互作用して出来る地上数一〇〇キロメートルから地球の半径の一〇倍位までの空間）電離層研究
 3. 地球周辺のプラズマを実験室としたプラズマ研究
 4. 太陽観測
 5. 天文観測
 6. 高エネルギー天文学（X線を中心とした研究）
 7. 宇宙線観測
 8. 地表のリモート・センシング
 9. 生物、生命科学
- 等が考えられる。また応用研究としては、

1. 超高温真空を利用した物質の生成、表面処理等の研究
 2. 無重力状態での合金の生成等無重力を利用した応用研究
 3. 地球の資源探査
- 等がある。これらについてはNASA Aでは、国際協力で研究を進めることを原則として世界各国の研究者の参加を呼びかけており、特に科学研究では既に1、2、3、を一緒にしたAMP



S計画 (Atmospheric, Magnetospheric and Plasma-in-Space) および、太陽観測に関して世界各国に研究テーマの公募が行われ計画が実際に進められている。特にAMP S計画では、我國の東京大学宇宙航空研究所のグループ（大林辰蔵、河島信村、長友信人、栗木恭一）が提案したSEPA C計画 (Space Experiment with Plasma Accelerators: プラズマ加速器を用いた宇宙

科学実験) がAMP S計画の研究テーマの候補の一つとして取り上げられ、昨年八月からその作業部会が二カ月に一回の割合でNASA Aマーシャル・スペース・フライト・センター（ハンツヴィル、アラバマ）等で開かれており、大林辰蔵教授がこれのメンバーとして出席している。AMP S計画は先に述べた様に大気圏科学、磁気圏の科学、および宇宙におけるプラズマ実験

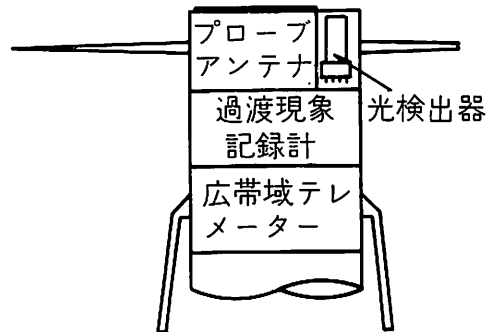
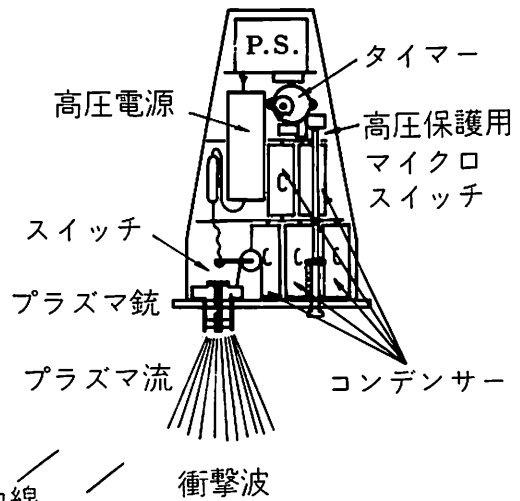
を含んだ広い領域の研究で、その特色は、単に自然現象を観測するだけではなく、自然に起こる現象を人間の手で制御していかうと言うところにある。一般にこれまでの科学の進歩をみると、人間はまず自然を観察することから出発している。この時代はいわゆる発見を伴った時代で、科学者は続々と出て来る新しい現象の発見に興奮する時代である。たとえば、原子核研

究では、キュリーによる放射線の発見がそれである。それからしばらくは人々は発見された現象を詳しく調べその物理的メカニズムの解明に努力するが、すぐにそれには飽き足らなくなつて何とかその現象を人間の手で作り出

し制御していこうとする。光の原子核研究の例では、加速器の発明がそれである。加速器の発明で科学者は自然に起こる現象を再現するのみならず、自然に起こらない新しい現象までも見出すことが出来たのである。その後は人

人はそれを応用に結びつけ実生活に役立たせることになる。原子力発電や、放射線の応用は現代の我々の生活の中で欠かせないものになりつつある。さて飛翔体による地球周辺のプラズマ現象の研究は、既に一九六〇年代に

(子ロケット)



(親ロケット)



第5図

ロケットによる予備実験

自然を観察する時代の華が開いたのである。そして一九七〇年代に入って、特にこれからは自然を人間の手で制御していく時代になるのである。

A M P Sに關連した領域で一般の人にもなじみの深い現象としては、オーロラがある。我國ではオーロラを直接見ることはほとんど出来ないが最近の様には海外旅行が盛んになると実際にオーロラを北の方の国でみた人も少なくないであろう。まっ暗な空の中で全天に赤や緑の光が乱舞する光景は自然の神秘をまざまざとみせてくれる良い例である。オーロラはエネルギーの高い電子やイオンが地球の大気圏へ下りて来て大気原子へ分子を光らしているものであることは既に良く知られているが、この様なエネルギーの高い原子や電子がどこで作られてどの様にして作られたかと言うことについてはまだほとんどわかっていないのである。最近ロケットに電子銃を載せて上空から電子ビームを放出して人工オーロラの生成に成功しているが、これからはこの様な技術を用いて更に自然現象の物理的なメカニズムの解明に役立てる研究が、特に地球の周辺のプラズマが關連した研究の中心になっていく。A M P S計画では、この様な意味から実験手段としては、

1. 電子銃による電子ビーム放出
2. イオンが加速器によるイオンビ

ーム放出

3. プラズマ加速器によるプラズマ
ビーム放出

4. 大電力高周波発振器による波動
励起

5. バリウムやセシウムを上空で大
量に爆発させて人工的なプラズマ
雲や中性ガスの雲を生成する

6. 大出力レーザー発振器による大
気圏の遠隔探査

と言ったものがその計画の主要な部
分を占めている。

我々東大宇宙研のグループが提案し
た3.プラズマ加速器によるプラズマビ
ーム放出は、プラズマ銃やMPDアー
クジェットと呼ばれるパルス的に強力
な大出力プラズマ流を放出する装置を
用いて、

1. 電離層の状態を局部的に変化さ
せて、人工大気光や人工オーロラ
を生成してその物理的メカニズム
を調べる。また波長六三〇〇オン
グストロームの酸素原子の発光を
利用して、電離層の大気の運動
(風)を調べる

2. 電離層や磁気圏を実験室として
プラズマ中の波動やプラズマの振
舞を調べる

ことを目的としている。プラズマの
基本的な性質を知ることはいひてはエ
ネルギー問題と深い関連のある核融合
研究の発展の支えにもなり得る研究で

ある。

実験の模式的な図を第4図に示し
た。スペース・シャトルの上に約一〇
〇キロジュール(ジュールはエネルギー
の単位でコンデンサーの容量及び電
圧をそれぞれC(ファラッド)V(ポ
ルト)とすると $\frac{1}{2}CV^2$ (ジュール)で
与えられる)のコンデンサーバンクを
載せ、そのエネルギーをプラズマ銃や
MPDアークジェットと呼ばれるプラ
ズマ加速器の中で放電によってプラズ
マのエネルギーに移し、大出力のプラ
ズマビームを生成する。このプラズマ
ビームが周囲の電離層のプラズマと相
互作用を起こして自然に観測される波
動現象を人工的に励起したり、また人
工オーロラ、大気光を生成するのであ
る。これらの現象を地上や飛行機によ
る観測、また先に述べたフリー・フラ
イヤーの一つであるサブ・サテライト
を飛ばして生成された現象を観測しよ
うとするのがこの計画の骨子である。

我国ではこの計画をスペース・シャ
トルに搭載する場合の技術的な問題点
を解決していくために現在、東京大学
内之浦ロケット実験場で行っているロ
ケット実験において予備実験を行って
いる。第一回は昨年九月K-9M-46
号機で行われ電離層内でのプラズマ銃
の作動に成功した。このロケットは親
子分離方式を採用し(第5図)子ロ
ケットにプラズマ加速器を乗せ一二秒

に一回の割合でプラズマの放射を行っ
た。第二回目は本年八月にK-9M-
51号機で行われることになっている。
現在、AMPSP計画は、スペース・
シャトルのテスト飛行を含めて第八番
目の飛行として一九八〇年中頃に第一
回の比較的小規模の実験を行い、一九
八一年中頃の第十九番目の飛行でフル
スケールの実験が行われることになっ

六、おわりに

スペース・シャトル計画は、これま
で述べて来た様に一九八〇年代の宇宙
への乗物として、着々と開発が進めら
れており、基礎研究から応用実用の面
まで広い範囲の利用が並行して進めら
れているが、特に実用の面でも大いに
活用される時代が来るであろう。たと
えば宇宙旅行である。広大な宇宙空間
を旅することは、人々の永年の夢であ
り、またたかない星外から見ると地球、
無重力の状態は、地上では経験出来な
い世界である。スペース・シャトルは
更に改良されて地球上の超高速の交通
機関から、宇宙観光旅行に使われる日
もそれ程遠くはないであろう。スペー
ス・シャトルの一週間の飛行に要する
打ち上げ経費は約三〇億円と言われて
いるが、これで五トンの重量のものを
打ち上げることが出来るので一キログ

ており、このプラズマ加速器はそれら
の有力な候補になっている。

以上、AMPSP計画を中心にスペー
ス・シャトルを利用した実験計画につ
いて述べて来たが、我国でもこれから
太陽物理学、高エネルギー天文学等の
物理研究をはじめ応用研究の広い領域
にわたるまで活発な研究が展開される
ことが期待される。

ラム当たり約六万円になる。現在の飛
行機で世界一周旅行をすると一人約六
〇万円かかるので、これは一キログラ
ム当たり一万円になる。このことから
もスペース・シャトルがいかに安価で
現在の飛行機とそれ程大きな開きがな
く、宇宙旅行も決して夢ではないこと
が理解出来るよう。

更に今日の様に地球上でのエネルギ
ー問題がさわがれる反面、公害問題と
の両立が非常に困難になってきている
が、将来は太陽熱発電所や核融合発電
所を宇宙ステーションに作らざるを得
なくなることも考えられる。この様に
スペース・シャトルは私達の生活環境
を広げていく足がかりとしても大いに
意義があり、その利用を我国でも宇宙
研究の自主開発と並行して大いに推進
していく必要がある。

●本号より新連載●

原子・銀河系・理解

ダニエル・フライ

(1)

筆者ダニエル・フライ博士は米国の円盤搭乗者として名高い人で、その有名な体験記 *The White Sands Incident* は「私は円盤に乗った」と題して本誌第2号に全訳が掲載されたが、本号より博士の著書の中で宇宙科学探求の成果ともいふべき *Atoms Galaxies and Understanding* を連載することにした。フライ博士の高度な知識が読者に裨益すれば幸いである。

● 序

本書に述べられた理論は素人、初学者、またはもっと進歩した宇宙科学の学徒に役立つように書かれたものである。すなわち抽象的な数学による複雑な格子細工よりも単純な理解に基づいた科学へのアプローチを試みたのである。

数学はたしかに普遍的な言語であるが、一方、応用し理解する前に学ぶ必要のある言語である。

今の世の中には宇宙の性質についてより多くの知識と理解とを得ようとする人は沢山いるが、数学の知識を必要とする道を苦もなく進んで行けるほどにこの数学という言語に精通するチャンスに恵まれてはいない。

本書が書かれたのはこうした人々のためである。したがって簡単な理論、説明、譬えなどが、できる限り数学のかわりに用いられている。そこで数学

の学者は軽べつするかもしれないが、数学の知識を持たぬ研究者は感謝して理解するだろう。

この記事に示される資料の多くは、もとグレート・ウェスタン大学のために書かれた講演原稿から流用した。また私の書「星々への階段」からとったものもある。これらの基本的概念は今や宇宙学研究者から認められ始めにすぎない。

宇宙学の研究はマイクロゾム（小宇宙）からマクロゾム（大宇宙）を包含するので、本書では自然界の最も細かい基本的な物質の考察から始めることにしよう。この微粒子を互いにつながり合わせていながら、しかもある条件下ではそれらを激しく引き離してしまいう力（複数）を調べることにする。物理学者は本書の内容を単純すぎるという非難するだろうが、研究を続



●筆者ダニエル・フライ博士

けるにつれて、驚いたことに、長年月の忍耐強い観察、テスト、解釈などによって知られてきた物理学の無数の諸法則のほとんどは、実際には読者によ

1 定義

教える技術というものは、一人の人間から他の人間へ知識または情報を伝える順序立った手順にすぎない。この手順は基本的には語られる、または書かれる言葉を用いて遂行されるのであ

って予言できるということがわかるだろう。その法則類について聞いたことも観察したこともなかったにしても――

る。教師の心から学生の心へ概念を伝えるのは言葉であるので、教授をうまくやろうとすれば、用いられる言葉は教師に対して持っているのと全く同じ意味を学生に対しても持っているなけれ

ばならない。

宇宙学においては、他の進歩した考えの分野と同様に、用いられる言葉は沢山あるが、全く正確に定義づけられた言葉はまだない。その結果、この問題に関する一連の討論の第一段階は、これらの言葉に一定の定義を与えることとでなければならない。これは読者が著書の心にある概念の正確な再生を図るためである。

次の各定義はまず読者によって注意深く研究し考察される必要がある。各語の意味が読者に正確に理解されなければ、本書の基本的な目的が失われるからである。

観察点 観察点とは二個またはそれ以上の点があり、その間隔が測定される場合、その点の一つを言う。

運動 運動とはある一定の物体または観察点が、観察者または他の物体または観察点に関連して、相対的な位置で絶えず変化する場合を言う。

だれしも運動について何か絶対的なものと考えがちである。しかし周

囲の宇宙空間を見わたせば空間のあらゆる物質は運動していることがわかる。それらは我々に関して運動しているのであり、またそのいずれも互いに他の物体すべてに関して運動しているのである。絶対的な運動を定義づける観察点というものは存在しない。我々が運動について語るとき、全く相対的な言葉を用いていることを理解する必要がある。「一物体が運動している」と言うとき、その物体の位置は我々か他の一定の物体または観察点に関して変化しているのである。

速度 速度とは運動の割合である。それは一定の時間単位で発生する位置の変化量によって測定できる。自動車、飛行機、その他の乗物の場合、速度は通常時速×マイルとあらわされる(注||これは外国での話)。物理学ではほとんど常に秒速×センチメートルとあらわされる。しかし表記の方法が何であろうとも、何かの意味を持たせようとすれば、速度の測定は一定の観察点から行われねばならぬ。たとえば屋内の安楽椅子にすわっている人は地面に関して速度ゼロであるが、月に開いてはかなりの速度を持つ。これは太陽に関してはもっと高速であり、知られている宇宙空間の無数の星々のいずれに関してもっとも高速である。

加速 加速とは運動の状態において変化が起こった場合を言う。それ

はプラスかマイナスのいずれかである。すなわち、もし観測される速度が増大していれば、その加速はプラスであると言えるが、もし速度が減少していれば、その加速はマイナスと言えるのである。(減速という言葉はときに速度の減少を意味するために用いられるが、マイナスの加速という言葉が大体にもっと正確であると考えられる)

例として一台の自動車が一〇秒間で時速一〇マイルから六〇マイルに、スピード・アップする場合、我々は一秒ごとに時速五マイルの割合で加速したと言う。そしてその加速は一秒につき時速五マイルに等しいと言う。物理学では、加速は通常一秒間につき秒速×メートルまたはセンチメートルであらわす。数学ではこれは通常次のように書かれる。 Cm/S または Cm/S^2

エネルギー これは物体または観察点の位置または状態の変化を起こさせる能力として定義する。しかしエネルギーは、変化が現象化する場合の二点間の差が存在するときのみ、あるいはエネルギーの単位が極または電荷と呼ばれる二つの構成部分に分けられるとき、変化を起こすのである。一つの

2 構築用ブロック

まず最小の基本的な実体である中性

プラスまたは一つのマイナスの極または電荷は、統一されるとき、エネルギーの一つの光子または量子を構成する。

場 場とはエネルギーの各極が離れているとき、その各極を囲む影響範囲である。場は同じ極または電荷間の距離を増大させ、異なる極または電荷間の距離を短縮させる傾向のある力としてあらわれる。場は通常三つの基本的な型に分けられる。電場(電界ともいう)、磁場(磁界ともいう)、重力場である。しかしこの三つは場の原理の特殊な例であり、エネルギーをその二つの構成部分に分けた結果生じたものである。

質量 質量は通常物質と関係しているものをいうが、これはエネルギーにも関係があることがわかっており、それは加速に対して抵抗するものであり、一定の加速の割合を生じるのに必要な量の力によって測定される。以上の各定義は我々のミクロコズムの考察を始めるのに十分であろう。他の定義は必要に応じて与えることにする。

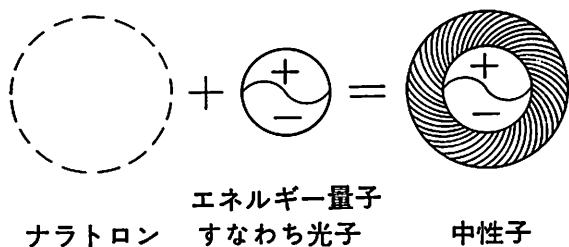
を持つ量子)という四つの性質を手短に考察して宇宙の研究を始めることにしよう。この四つのものを直接に見たい人はいない。きわめて微小なために最も強力な顕微鏡でも分解できないのである。しかるに宇宙のあらゆる物質は最初の三つの物で成り立っており、宇宙の中で発生するあらゆる変化は四番目の物の活動の結果起こるのである。

エネルギーが完全にその粒子に含有されているという状態で、そのナラトロンに対して光子、すなわち通常よく知られているエネルギーを持つ量子を加えれば(図を参照)、その粒子はいくつかの追加特性を得ることがわかる。エネルギーを持つ量子を加えると、その粒子は正負両方の電荷を帯びたことになる(エネルギーの定義の項参照)。これらの電荷は粒子内部で結合されるため、外部に電場はなく、引力場が創り出される。慣性と重力とを帯びた粒子を今度は中性子と呼ぶことにする。この存在は一九三二年イギリスの物理学者サー・ジェームス・チャドウィックによって明らかにされている。

この粒子は電荷もなく、エネルギーもなく、したがっていかなるタイプの場とも関係のないものと仮定しよう。事実この粒子は慣性質量やあるいは慣性抵抗以外の特性を有していないと仮定しよう。われわれが知る限りそのような粒子の存在が現代テクノロジーに適用できるという証拠はないし、またこの粒子は特性を有していないので、その存在を現在知られている方法によって明らかにすることはきわめて困難であるということをとらえず述べておくことにする。にもかかわらず、そのような粒子の存在を仮定することはわれわれが物質の特性を調べる際に理想的な出発点となる。したがってその存在が単に理解の助けになるだけでよいから、その粒子の存在を仮定してみたい。

もし量子を二つの構成部分に分ける方法や、中性子の本体から負電荷を取り出す方法を発見して、電荷が中心核の周りのエネルギーを持つ殻を形成できれば、中性子をすべての原子のなかの最も単純なもの、すなわち元素の原子に変換することができるかもしれない。単純な粒子は今やかなり複雑なメカニズムを有するものになった。ほとんどすべての質量を保持している中心核は、そこから重力場がまだ出ており、今や正電荷を有して、陽子として知られる。エネルギー量子の負の部分を形成しているエネルギー殻は電子として知られている。

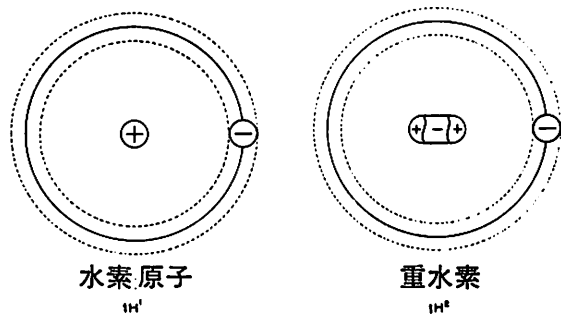
子、電子、光子(すなわちエネルギー)



今日ほとんどの教科書の中で、地球が太陽の周りを回るのと同じように、電子は陽子の周りを正確な軌道を描きながら回る小さな粒子として述べられている。我々がこの研究を化学の分野に押し込めてしまいう限り、この類推は非常的を得たものであるが、もし核仮説によって、観察しうる物質のすべての特性を説明しようとするならば、もっと複雑な類推を必要とすることがわかるのである。

そこで、ナラトロン同様、単に理解のための手段として創り出されるということを前提にしながら、そのような類推を行ってみよう。まず陽子の周り

を単純に回る小さな粒子というような通常の概念から始めることにしよう。そこで、電子がその軌道にそって軌道のすべての部分を占める電荷の輪になるまで引き伸ばされても、まだ同じ回転速度をもっているものと仮定することにしよう。もしその輪を、陽子と、輪内の二つの相対する地点を通過する軸線上で回転させれば、密度は一様ながらも各々二つの軸の回りの正確な角速度によって特性づけられている陽子の周りに電荷の球を創り出せる。一方このような角速度を仮定することは物質の性質に対する基礎研究において特別重要なことではないものの、個体の



晶化とか光の回折とかその他のもっと複雑な現象のいくつかを説明するにあたっては確実に必要となるものである。

理論的創造によって原子を内部から外部へと研究してきたが、今度は原子を外部から内部へと研究する方がよいだろう。

今、創り出した原子はすべての原子族の中で一番単純なものであることを忘れてはならない。それは $1H^+$ すなわち水素として知られている。

もし中性子をこの原子の中心にある陽子に加えると、 $1H^+$ すなわち重水素と呼ばれる粒子ができる。この原子はまだ水素であり、 $1H^+$ と同じ、化学特性を有している。しかしながら、その質量と重さは二倍である。それで $1H^+$ はしばしば重水素と言われている。

もし二番目の中性子を核に加えれば $1H^+$ すなわち三重水素になる。三重水素はまだ化学的に $1H^+$ と同じだが質量は三倍である。それはしばしば重水素として知られている。

元素の化学的特性は電子の数や核内部の陽子の数によって決定されることは明らかである。

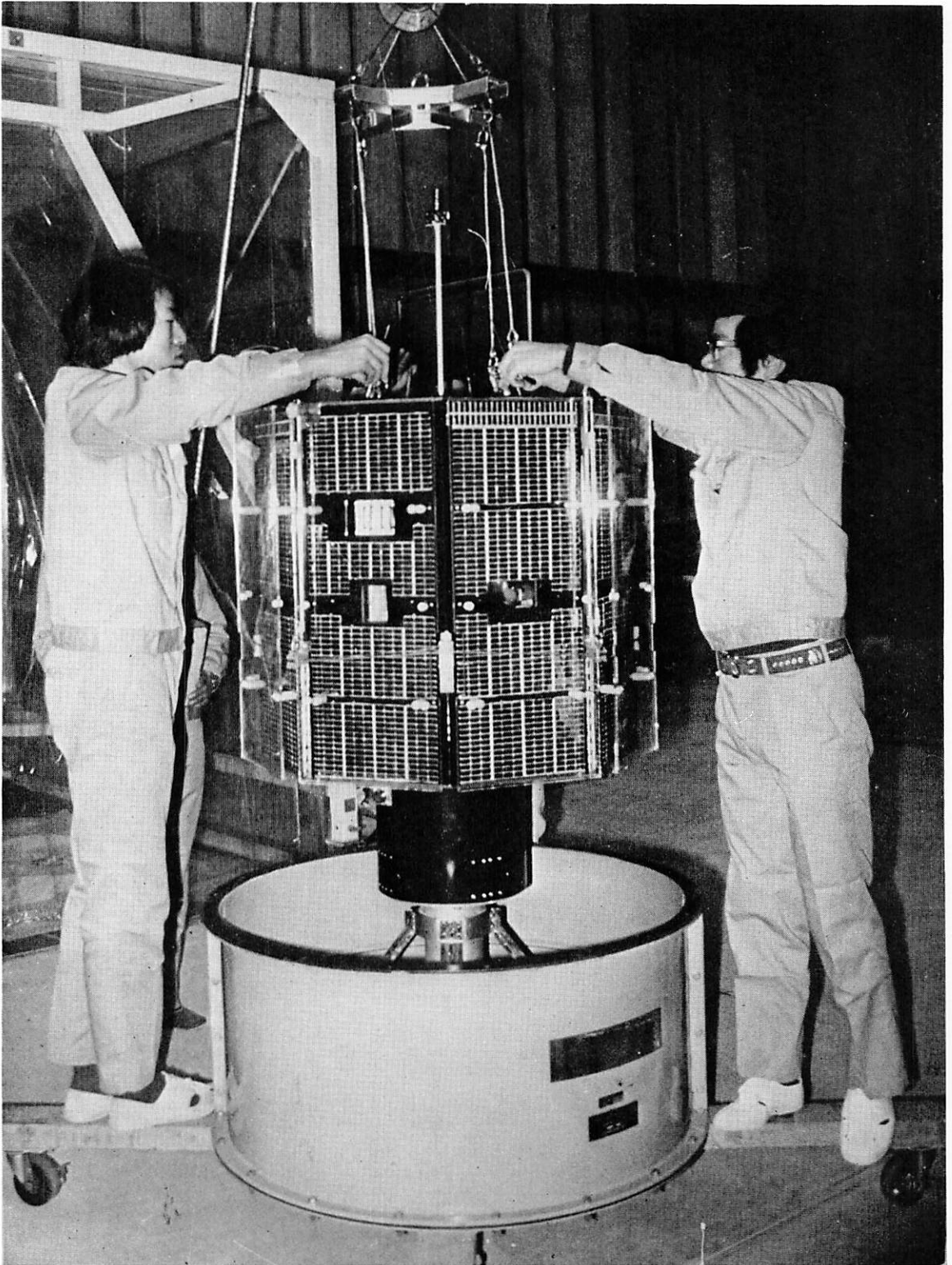
今まで考えてきた三種類原子においては各原子にひとつの電子とひとつの陽子が含まれており、したがって三つとも同じ元素の原子であると考えられる。

もし三番目の中性子を核に加えてみると、原子内部の場の状態はかなりのエネルギーが要求される状態であり、また中性子を無理に適当な位置におこうとする活動は、エネルギー量子が自発的に分かれようとする原因となるだろう。負電荷は中性子から発せられ、二番目の電子として原子をとりまくエネルギー場内部で最初の電子と結合する。残った部分は正電荷を帯びて陽子となる。

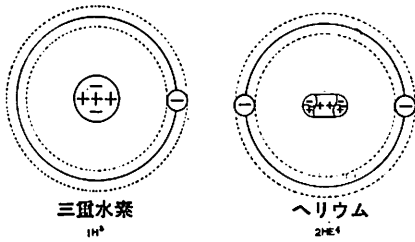
原子は今や二つの電子、二つの陽子そして二つの中性子を含んでいる。われわれは続けてヘリウムと呼ばれる第二の元素の原子を生み出した。このヘリウムという名称はギリシャ語の「ヘリオス(太陽)」からとられたものである。というのはそれが地上で発見される二五年前に太陽スペクトル写真分析によって発見されたからである。

この原子を学術記号であらわすと $2He^+$ となる。文字は元素の名称をあらわしており、文字の前にある数字は周囲を回る電子の数をあらわし、文字のあとにある数字は核内部に含まれている陽子と中性子の合計数をあらわしている。

もしわれわれが中性子を加えていくことによって原子を作り続けていく(理論的に)なら、その過程の各々の段階においてある数の同位元素をつくり出すことができる。すなわち、原子



●わが国で6番目の人工衛星を東大宇宙航空研究所は2月24日、鹿児島の内之浦で打ち上げに成功した。これは科学衛星第3号「スラッツ」で太陽放射線を地球熱圏の相互作用や、人工汚染による破壊が心配されているオゾンの全地球的分布などを調べるのが目的である。



の質量を変える以外は何も変えることなくある数の中性子を加えることができるのである。もしこの数を超えれば、次の中性子を加えるために要求されるエネルギーによって、電荷の負の部分放射され、これが一個の陽子となり、別な電子を原子全体に加えさせることになる。このようにして原子規模における次のもっと高度な元素が形成される。もしこの過程を十分時間をかけて続けるなら、ついには、すべての知られている元素の原子とそれらの可能な同位元素のすべてをつくり出すことになろう。

ヘリウムに続いて次の元素すなわちリチウムをつくる時は、二つの中性子を同時に加えなければならない。な

ぜならしばらくのあいだ一緒に残る五つの核粒子の結合がわからないからである。

私は核に対する中性子の付加を簡単な過程のように述べてきた。それで、読者が誤解をしないように次のことを述べておく。つまり一個の原子核に中性子をむりに加える技術は今のところないし、もし仮にそのような技術を知っているにしても、その過程のどこかでエネルギー面のいちじるしい変化が起こり、その結果、かなりの電磁気放射が発生して、原子の質量の小部分が失われることになる。粒子のすべてがまだ存在しているにしてもである。しかし単なる中性子の付加により達成できる、またまちはいなく成し得る、元素の交換がある。ウランニウム238からプルトニウムへの交換はその二つの例である。

また、一つのエネルギー場を占めている電子の数は限られていると言ってよい。この数の電子が含まれている原子が形成されたあと、もし核内部の粒子からもっと多くの電子が放射されれば、それらは外殻によって吸収されるのではなく、それを通過して最初の殻の外部に第二の殻を形成する。

少しばかり観察規模を拡大して普通の水滴を考えてその水滴を二つの等しい部分に分割すれば、二つの部分のそれぞれはもとの水が有していた特性の

すべてを持っていくことがわかる。各々の部分はまだ水なのである。分割された部分のサイズは別として他に何も変化させることなく同じように分割を繰り返すことはできるが、終局的にはその特性の完全な変化を起こすことなしにそれ以上分割することのできない一個の粒子に達する。この粒子は分子と呼ばれ、化合物質、すなわち「化合物」の最小粒子と定義づけられている。

一つの分子は、外殻の電子のいくつかが原子のすべてを包む新しい殻をつくり出すために、自分たちの軌道を広げるような状態で一緒に結びつく二つがそれ以上の原子で成り立っている。それで、いくつかの原子はある程度あたかも一つであるかのように活動する。

もし水の分子を分解すれば、それをもっとも単純な元素すなわち水素の二つの原子と、酸素と呼ばれるより複雑な元素の一原子から成り立っていることがわかる。

物質の粒子に関して用いられる「アトム」という言葉は古代ギリシャの哲学に由来している。紀元前五世紀にギリシャの哲学者デモクリタスとレウチップスは、すべての物質はそれ以上分解できない小さな単位から成り立っていると仮定した。彼らはこれらの粒子をアトムと名づけた。この言葉の意味

は「分割できないもの」という意味である。

この理論は二〇〇〇年以上も前に発表されたのであるが、この概念の前半の部分に受け入れられるようになったのはつい近年のことであり、同時に精力的に研究と後半の部分が誤っていることを論破するに至ったのである。原子は分割できない粒子ではなく、実際は数多くの互いに助け合う部分からできてゐる。複雑な物であることをきとめたのである。

各部分は原子の大きさと比較しても非常に小さなものであるが、ここにあげた図の中で点線と四角は陽子をあらわすのに描かれており、中性子はその軌道の大きさに比例してかなり大きい。もしそれらが実寸で描かれるなら、強力な顕微鏡を使わなければ見えない。核粒子が占める量は原子の総量の約一〇〇万分の一と考えられる。

原子はギリシャの哲学者たちが考えた固体の目に見えない粒子とは全くかけはなれたものであることをわれわれは知っている。

実際は、原子は全くの空間なのである！しかし強力なフィールド（複數）で満たされた空間であり、原子をあたかも固体で不滅の粒子であるかの如く活動させるのはこれらのフィールドの働きなのである。

東北、東関東をよぎったUFOの大編隊？

全日空のパイロットが目撃、証言。福島県の渋谷さんが撮影に成功。

ことしの一月一五日夕方、東北方面から東関東に向けて一団となった怪光体が飛行した。地上二〇〇メートル

で青白く光りながら通過していったという。一般の人たちの間ではこれはUFOの編隊ではないか、との話も出ている。これは全日空のパイロット樋口敏樹さん(26)も機上から目撃しているので、UFOの信びよう性が高いと

もっぱら評判になっている。そのUFOをカメラでキャッチした人は少ないが、福島県会津若松市に住む渋谷民男さんはその一人。

渋谷さん(会津若松市役所秘書広報課勤務)は、同一五日午後六時頃、市内神指町付近で行われるしめなわを束めて焼く正月行事の写真を撮るため、その場所に出かけていった。

そろそろしめなわ焼きが始まろうとしているので、カメラをセットし終わり、いつでも写せる状態にしていた。夕方で空は薄暗くなろうとしていた。天候は晴れだが、ところどころ雲が出ているという状態だった。

すると、突然、北の空にきらきら白く光る物体が現れた。フィルムはトラ

IXだったので、夕暮れのこの物体をとらえるにはかっこうの条件をそなえていたわけだ。

光る物体は、先の方に七つか八つが一つに固まっており、その後方に三個がややひと固まりになって並んでいて、その全体は形をくずさず、北の空から東の空へとよぎって行った。その間約一五―二〇秒の間を通過するというものすごいスピードで、ジェット機のそれに比すべくもない。色は、物体それぞれの先が白くぼく光り、後方がダイダイ色であり、それが流れているように見えたという。

渋谷さんは「はじめの七、八個の固まりの一つ一つは電球が務の中で光っているようなぼんやりとした状態になっており、それが一つになって形のつかめないような様相をしていた。けれどシャープな形を現していなかった。また、その後ろの方には三個がそれぞれ接近し、一つの集団をつくっていてそのどれもほんとにきれいだ」と目撃の模様を語っている。

渋谷さんと会社の同僚である山田伸一郎さん(31歳・会津若松市神指町才

ノ神)も、同行していたが、そのときの模様を「大きさは、どの星よりも大きかった。それにあんなきれいなものはこれまで見たことがない。私はこれまでUFOに興味を持っていなかった

ので、これが円盤だということは言えないが、けっして流れ星ではない。それは流れ星などと光り方が違うからだ。それに地表に平行に飛んでいたの

で、どうしてもこれが、いわゆるUFOなのかもしれない」と語っている。また渋谷さんが読売新聞に写真を発表したことから(一九七五年一月一七日号)あちこちから同氏あてに手紙が届いているが、円盤か否かについてあるアマチュア天文グループからこういった内容の手紙を受けとっている。「それはUFOではない。落下している人工衛星の姿である」と、結論づけたように書かれてあるという。が、渋谷さんは「人工衛星が落下しているものではない」とその理由をこう述べている。「でも私はあのようにきれいに輝く物体が編隊を組んでおり、ジェット機のようにびちっと並んで間隔をとって飛行しているのは印象的に眼底に

焼きついている。といってジェット機ではない。何の音も聞こえなかったから。それにもし、人工衛星の落下だったら上から下へと移動しているだろうに、水平移動していたのはそれとは当然違った出来事だ。

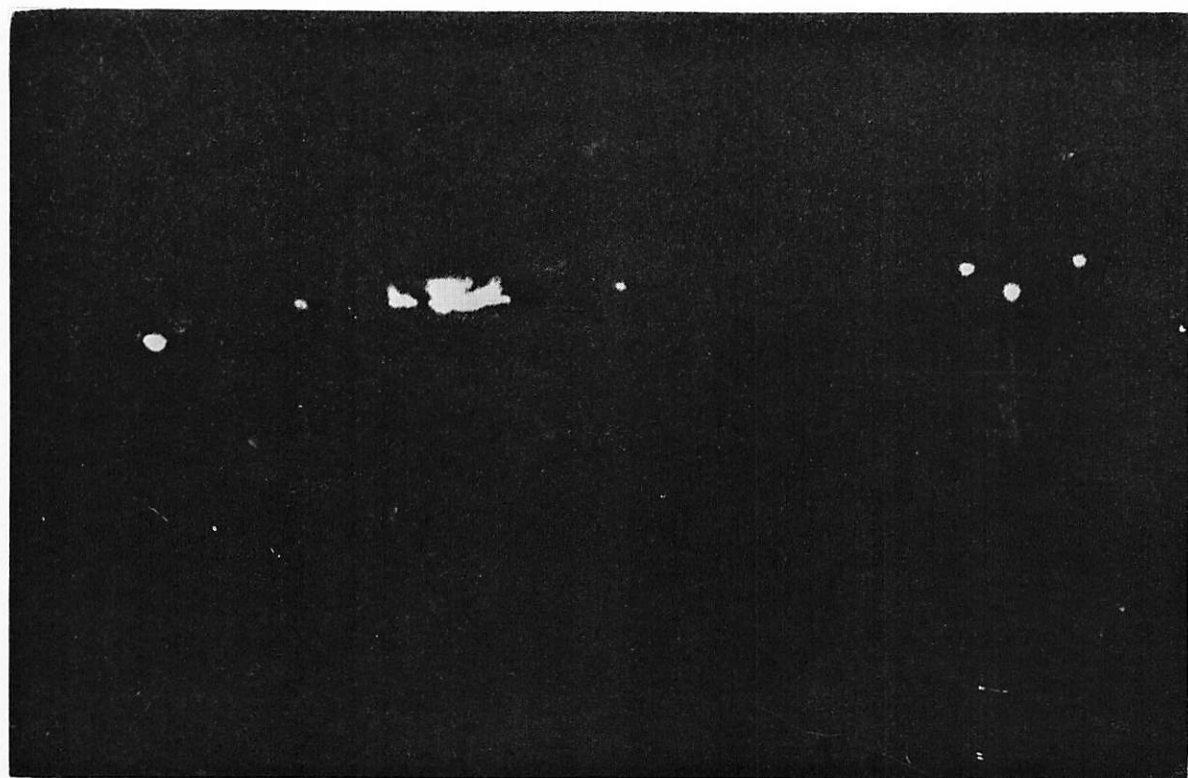
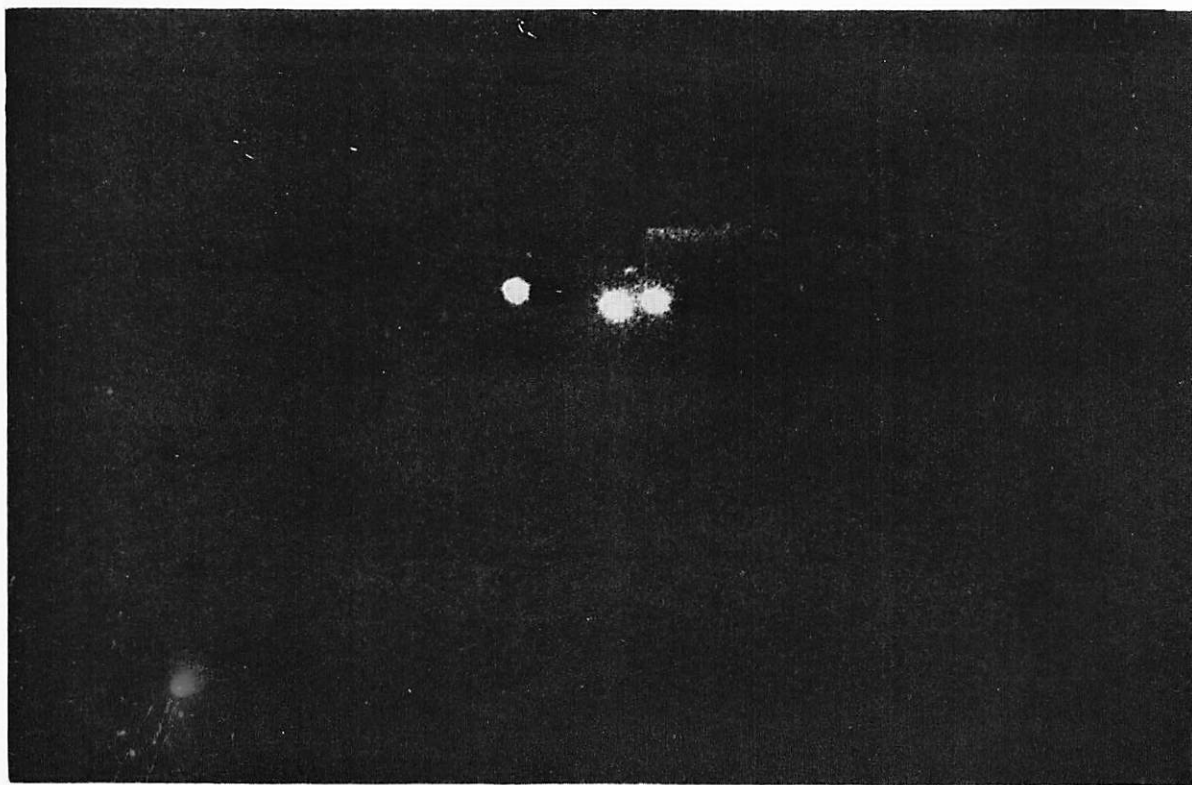
もし私がこの目撃した物体を説明するならば、あるUFO観測隊の人が来て見せてくれたジェミニ7号から撮影された二個のUFO写真のようだということができる。けれどそれとそっくりではないが……」と、円盤にほとんど間違いない、とあれこれの面からその理由をあげている。渋谷さんもこれまでUFOに興味を示したことがなく、またUFOやそれらしきものも見たことがないとのこと。

この物体を同時に目撃した人は渋谷さんの近くにいた人たちの中では一五―一六人いて、それぞれ「あれなんだべ。ジェット機かな。流れ星かな。いやそうでもない。とにかく今まで見たことがないものが飛んでいる」と目を丸くしていたという。

☆ ☆ ☆

左の写真は渋谷さん撮影の貴重な記録写真で物体は写真の左から右へ移動していた。二、三枚シャッターを切ったが、そのうち2枚がとれた。

(データ)ニコンF2、ニッコール35mm、シャッタースピード1/400、開放トライアパン。



〈口絵写真解説〉



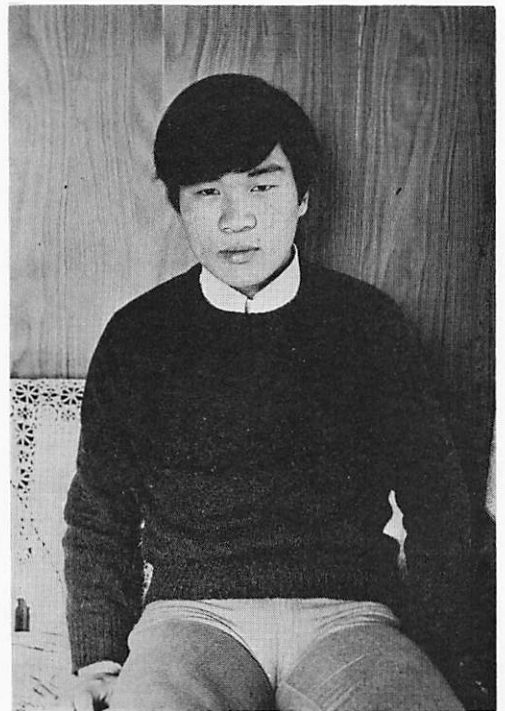
アダムスキー型円盤 尾道市に出現!

昨年十月には備後地帯にUFO出現ブームが発生したが、特に広島県尾道市の高校生が帽子型の鮮明な円盤と葉巻型母船とおぼしき物体の撮影に成功して世間を驚かせるという事件が起こった。これに関してはずでに中国新聞をはじめとして各種の新聞雑誌に報道されているが、本誌では原写真を綿密に検討した結果、きわめて信憑性が高いことや、別な目撃証人が存在することなどから、重要な事件とみなして本年一月十二日に現地へ出張し、直接に取材した。以下はそのルポである。

事件の概要

一九七四年一〇月一日、早朝六時二五分頃、尾道市栗原町に住む高校生の藤松和彦君（広島県立尾道工業高校化学工学科一年）がすでに目を覚まして横になっていたところ、急に胸騒ぎが起った。そこで起き上がって南側の窓をあけると、南東の千光寺山上空から長さ約四〇メートルの黒褐色の葉巻型物体が無音のままゆっくりと北西に向かって飛んでいるのが見えた。とっさにそばにあったカメラで連続二枚の写真を撮影すると、その物体は北西の久山田上空に消えて、まもなくそのあたりから今度は帽子型の物体が出現して同じコースを逆に南東に飛んで来るのを目撃、これもカメラで連続三枚撮影した。

●藤松和彦君



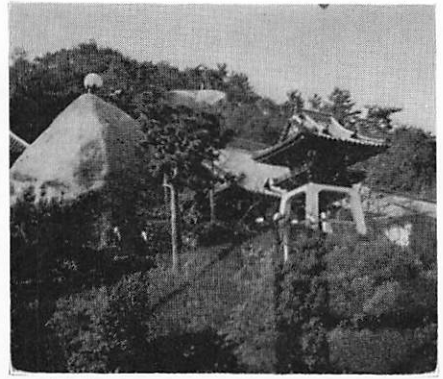
驚いて一時は呆然となった藤松君はとにかくフィルムをD.P.店で現像してもらおうと、たしかに目撃したとおりの二種類の物体が鮮明に写っていた。この写真を一九日に学校に持って行って級友たちに見せたところ、反応はさまざまだったが、特に関心を示したのは同級生の高良輝久君（二六歳）、砂田邦政君（二五歳）、向井芳臣君（二五歳）の三人だった。同日藤松君の家へ

やって来た高良君と昼食を食べている最中の午後一時半頃急に藤松君が「また胸騒ぎがする。円盤が出そうだ」と言い出した。窓から外をのぞいた藤松君と高良君の二人が円盤を目撃、このときも撮影したが失敗に終わった。その後には砂田君と向井君がやって来て帰

るときの午後二時半頃、またまた円盤を目撃したという。

ところが、この記事を新聞で見た同市新浜町の堀田組社員中山勇さん（二六歳）が「自分も一九日に円盤を見た」と名乗り出て、これが有力な傍証となった。中山さんが同日午前十一時半頃会社の寮の七階の窓から千光寺山の方を見ていると、頂上付近を葉巻型のUFOがオレンジ色に輝きながら山のむこうへ飛んで行くのを約五秒間目撃した。「山の斜面がオレンジ色になっているので、一瞬山火事ではないかと錯覚した」という。「信じられぬ現象だから、だれにも話していなかったが、新聞を読んで間違いはないと思っ

た」（同月三日付中国新聞）



●千光寺山

インタビュー

一月二日は日本列島に寒気団が襲いかかった頃で、戸外の風は冷たいが空はよく晴れていた。尾道市栗原町の亀川バス停前で降り立ったのは昼の二時を少し過ぎた頃で、事前の打ち合わせにより藤松君のお母さんが出迎えに来ておられた。丁重なご挨拶に恐縮しながら小高い丘を登って行く。この丘一帯は新興住宅地で、新しい文化住宅が点在する静かな場所である。藤松君宅も新築らしく、きれいな二階建ての家である。玄関わきの応接室に招じ入れられて腰をおろすと、まもなく本人が現れた。小太りの血色のよい顔は健康そのもので、その言動はまことに純朴であり、正直で誠実な性格がにじみ出ている。早速、持参した本誌やUFO写真集を見せたあと、話している

と、一九日の目撃者である同級生の砂田君と向井君がやって来た。高良君は足を痛めたので来られないという連絡があったとお母さんが説明される。熱い紅茶に喉をうるおしながら質疑応答を続けた。質問は本誌側。訥々と答えるのは藤松和彦君である。会見中、ご両親は同席されなかった。

質疑応答

——コズモという雑誌を読んでいますか。

「いやまだです。研究者の人から見せてもらいました」

——ただちょっと見ただけ?

「そうです」

——学校はどこですか。

「尾道工業高等学校」

——広島県立ですね。

「はい」

——何科ですか。

「化学工学科、バケ学です」

——尾道工業はどこにありますか。

「尾道市向島の方。ちょっと船に乗って向う側です」

——向島町ですか。尾道市の。

「はい」

——かなり歴史の古い学校でしょう?

「歴史? あんまりそうないけど」

——そうですか。それで、最初に目撃されたのは一〇月一日ですね。

「はい」

——その時の模様を細大漏らさず、そして、こまかくお話しただきたいんです。いままで新聞、雑誌などにも、あなたのことが出ましたね。

「はい」

——それで、写真は白黒で載っていたのですが、もとはカラーですね?

「はい」

——そのカラー写真を見て驚いたんですが、いまその写真ありますか。

「ちょっと待ってください」

(藤松君 素早く奥の室に写真を取りに行き、まもなくあの問題のカラー写真を右手に持ち、息を切って入ってくる)

——ああ! なるほど、なかなかすごいですねえ、これは。

「あのう、なんか帽子型というのはアメリカでも——」

——ええ、アメリカでジョージ・アダムスキーという人が撮影した写真があるんですがね。この写真とまったく同じような物です。アダムスキーという人の名前を聞いたことがありますか?

「まえにテレビなんかで——」

——テレビで見た? そうですか。それで一日のことをこまかに話していただけますか。思い出しながら——。

「ええと、六時二五分ぐらいに起きたんです」

朝の?

「はい。そのとき体の調子がちょっとわるいというんかね、気分が悪くって」

——どこが悪かったんです?

「ええと、まあ、どこがわるいいうか、なんかもう頭が普通でない。そして、六時三〇分頃になって、ええと、窓を開けて見ると。まあ、あのう、なんか始め見たときは静止しているようだったんですがね。徐々に動いて——。だから、始め飛行機なんか近づいて来たのかなと思うけれど、羽根も、なんもなかったし、UFOじゃないかと——」

——その形はどうでした?

「最初は、こんな——(両手で棒状の物を現わそうとする)」

——細長い? 最初に葉巻型の物が出たんですか。それで南東に現れて、始めは静止してたんですね。

「はい」

——そこから動いた?

「はい」

——それで、目撃したのは大体どれくらいの時間ですか。

「移動する時間は大体40秒ぐらい」

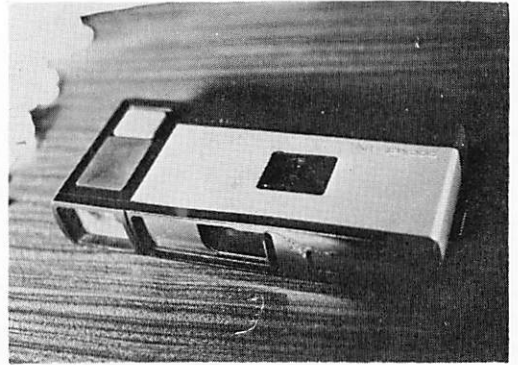
——40秒ぐらい?

「はい」

——朝、早いときだから、あんまり人が外に出ていない頃でしょうね。

「はい」

——それで、そのときに写真を撮った



●撮影に使用したカメラ

わけでしょう？

「はい」

「カメラはすぐ手元にあったのですか。」

「運動会の時に使ったフィルムの残りがあった。机の上に——」

「どんなカメラですか。ちょっと見せていただけませんか。」

「はい」(ふたたび、奥の室にカメラを取りに行き、小型のカメラを持って入って来ると、それを私たちの前に何気なく置く)

「これはコダック・インスタマチック20ですね。」

「はい」

「16ミリのフィルムを使うんでしょう？ これ、いつ頃買いました？」

「昨年の四月頃」

「そうですね。早く撮るには便利ですね。」

「まあ。全部自動なので——」

「写真は何枚撮りました？」

「五枚」

「母船の写真だけですか。」

「いえ。その時は始めに葉巻型を二枚最後に帽子型三枚」

「先に葉巻型が現れて、それから帽子型が現れるまでには何分ぐらいかかりました？」

「もう、すぐに——」

「すぐ出てきたんですか？」

(ちょっと考えてから)

「大体、カメラをひと巻きするぐらい」

「ひと巻きするぐらいの間に、帽子型が？」

「はい」

「やっぱり同じ方向に出てきたんですか。」

「だから、葉巻型がこっち(北西)に行ったら、その逆の方向」

「逆の方向に？」

「はい」

「つまり葉巻型は方角からいって、どっちから、どっちへ。」

「南東から北西の方へ」

「そして、写真を撮ったのは始めに南東に現れた頃ですか。」

「はい。大体そうです」

「そしてこんど、それが北西の方向に行って消えてから、帽子型が出たわけですね。」

「はい、そうです」

「いったん見えなくなってから、帽子型が？」

「葉巻型が見えなくなるまではちょっと確認できませんでした。屋根に隠れて見えなくなったから」

「そして、すぐに帽子型が出たわけですね？」

「逆の方向に。つまり南東の方向に？」

「南東の方向に向かって」

「南東の方向に向かって帽子型が行ったんですか。」

「はい」

「帽子型を見た時間は何秒ぐらいですか。」

「ええと、帽子型は始めの葉巻型より少し長かった」

「そうすると、50秒ぐらいですか。」

「大体そのぐらい。時計を持ってなかったのだからわかりません」

「このときは三枚撮ったのですか？」

「はい」

「はい」

●向井芳臣君(左)と砂田邦政君(右)



「そのときにはどんな気持がしましたか。」

「やっぱり、恐怖というのか——」

「恐怖感が起こった？」

「はい」

「それまで、円盤というものについては本などを読んだり、その他くわしいことは知らなかったのですか。」

「テレビの方では少し——」

「アダムスキーという人の名前も聞いたことはなかったですか。それまでに。」

「その人の円盤は見たような記憶はあるんです」

「テレビで？」

「はい。そして、アダムスキーという人は今度初めて円盤を撮ってから学生の人たちに教えてもらいました」

「それまで知らなかったんですね。」

「はい。あ！ ちょっと、友達が集ったから——」

ここで藤松君は窓越しに友達を見て急いで迎えに出たが、まもなく二人の友達を連れて入って来た。この友達は、去年の一〇月一九日に藤松君が二度目のUFOを目撃したときに、居合わせていたという砂田輝久君、向井芳臣君の二人で、共に尾道工業高校のクラスメートだそうである。藤松君から紹介してもらったあと、ふたたびインタビュイーに入った。

「それで、藤松さん、この写真の物体がアダムスキーが撮影した円盤とまったく同じ型だということは、お友達から教えてもらったの？」

「あのう、同志社大学の学生の人から教えてもらいました」

「そうですか。それで、今ではその円盤を見たことについて、どのように考えていますか。」

「やっぱり(笑いながら)エラい物、

見てしまうの——」

「——それで今度、一〇月一九日にまた、皆さんと一緒に目撃されたそうですね。新聞記事では友達と写真を見ながら円盤の話をしている間に、とまっているけれど——」

「新聞ではそう書いとったけど、本当は、最初高良君とご飯を食べていて、少し僕は気分が悪くなったから、また出るんじゃないかと思って——」

「高良さんと二人だけですか。」

「はい。そして、あとで砂田君と向井君が見ました」

「それは何時頃ですか。」

「ええと、二時か二時半頃です」

「そのときの様子をまた、くわしく話して下さい。」

「最初、僕と高良君がいたとき、僕が一一日と同じようになつてきたんです」

「どんな気分ですか。」

「何というおうか、胸騒ぎがするといおうか」

「——ははあ、新聞では頭が痛くなったと書いてありましたね。」

「まあ、それも一応ありました」

「そして？」

「そして、二階に上がって、また同じ窓から見たんです」

「では、この家の上空ですか。」

「斜めの上空に飛んでたんです」

田さん、向井さんの三人も居られて、四人で一緒に見たんですね。」

「いいえ。最初、高良君と僕と一緒に見たんです。それで、二回目にまた砂田君と向井君が来て、帰る頃に出たんです」

「その日には二回出たんですか。」

「そうです」

「最初に出たのは何時頃ですか。」

「ええと、大体一時半頃」

「そのときは藤松さんと高良さんの二人が見たのですね。それは帽子型でしたか。」

「まあ、大体三角形のような形です」

「黒い物体ですか。」

「はい、黒褐色というか」

「その後は何時頃ですか。」

「(隣の二人を見て)「二時半頃か？」」

「最初の一時半に見たときは、朝早くから胸騒ぎがしていたんですか。」

「いいえ。直前に——」

「二回目の二時半頃は、突然に現れたんですね。」

「はい、見たのは砂田君と向井君の二人です」

「そのときに見られたものは、どんな型のものでしたか。」

砂田君「最初、葉巻型を見て、それで雲の切れ間から三角形みたいなものが出て来た」

「葉巻型の物は、やっぱり雲の中に入ったんですか。」

「半分ぐらい出とったんです。雲から——」

「それはすぐに、引込んだのでしょうか。」

砂田君「その葉巻型見とったら、下の方から、ちょっと変な雲が出てきて、じっと見とったら、三角形になってね——」

「その雲らしき物が、しだいに三角形の形になってきたわけですか。その色は？」

「はい。黒に近い」

「それは、どのくらいの時間、見えましたか。」

「二〇秒ぐらいだったか——」

「そうですか。ところで、藤松さんが一〇月一日に見た葉巻型および帽子型の物は見かけ上、どのくらいの大きさに見えましたか。」

「新聞社の方が、40メートルとか、いろいろ言ったんですが、ちょっと、まあ、かなり大きかった」

「このカメラに付いているレンズでもって、この写真のように大きく写るといことは、よほど大きな物でなければ写らないですね。大体の長さは、どのくらいだと思いますか。千メートルや二千メートルというような、大きなものではなかったですか。」

「まあ、見たのはすごく大きかった。ちょっと、よくわからない」

「そして、帽子型の大きさは、大体

の見当で、どのくらいですか。

「これは大抵、僕の家付近だったの
で、葉巻型より少し小さかった」

「直径はどのくらいでしょう？」

「一五メートルぐらい」

「この帽子型の高さは、どのくらい
でしょうね。地上から」。

「そのときは、ちょっと低空飛行だっ
たから、(ちょっと考えてから、窓越
しの高さ5メートルぐらいの木を指さ
して) あそこの木より、少し上。そこ
の。あれより一五メートル足したぐら
いです」

「葉巻型の高度は？」

「やっぱり、五〇メートル以上はあっ
たんじゃないかなあ」

「この帽子型の底に三個の丸い玉の
ようなものは見えなかったですか。

「それも、もちろん見えました」

「写真では暗いから丸い玉が」。

「ちょっと写らなかった。むしろ側が
明るかったから」(藤松君は逆光で写
ったことを意味しているらしい)

「逆光になってたんですね。」

「帽子型の方の窓はどうでした？」

「二つぐらい、あつたんじゃないかな
あと思います」

「本物の円盤写真の特徴は、その周
囲にボーツとしたような、フォース・
フィールドが出ることもあるんです
が、肉眼で見えませんでしたか。」

「肉眼では見えなかったけど、現像し

てみたら、何かあるような感じ——」

「この写真にも、ボーツとしたよう
なものが取り巻いているようにも見え
るんですが——。これを我々はフォ
ース・フィールドと言っているんです。

円盤自体が重力場を持っていると考え
られるんです。惑星と同じように。地
球なんかでも重力があるでしょう。こ
れを円盤は人工的に作り出して重力の
場を持っているわけですね。だから、
円盤の周囲に一種のフィールドがあっ
て、そのために周囲に雲のようなもの
が出来たりすることがあるんです。

「音は聞こえなかったですか。」

「ええ、まあ、ここは近くに道路が通
っていますから、その関係で、音は出
ていたかもしれませんが、ちょっとと
聞こえなかった」

「飛行機の音は聞こえなかった？」

「ええ、そんなものは聞こえなかつ
た。それで、そのとき、ラジオを聞い
ていたんですけど、ラジオがなんかバ
チバチといったようでした」

「それは、最初の一日の日には？」

「そうです。かなり、ひどかったよう
で——」

「他に何か変わったようなことは？」

「高圧電線から鳥が落ちました」

「一日の日ですか。」

(隣りの二人に向かって)「いえ。あ
れは、一九日じゃの？」

(二人)「二九日！」

「高圧線の一番電圧の高い所で——」

「それで、一九日にまた、別に見た
という人がいるんですよ。中山勇さん
という方ですが。」

「一時半頃に見たという方ですね」

「藤松さんは、中山さんという方を
前もって知っていましたか。」

「全然知らない人で、僕も驚いたんで
す」

「そうでしょうね。」

「他に、見たという人を知りませ
んか？」

(隣の二人に向かって)「かなり居
たのう。後で新聞社の人たちが調べた
らしいのですが、因島の方で女子中学
生の方が、円盤と飛行機がぶつかりそ
うになったとか？ その人が何かスケ

ッチをしていた——」

「それは一日ですか。」

「いいえ。日時は違います」

この事件は次のとおりである。昨年
一〇月一七日午後六時頃、広島県因島
市土生町に住む池田庸子さん(中三、
一四歳)が三階の自室で勉強中、頭が
痛くなったので、窓をあけると、暮れ
残った東方の天狗山上空に、黒味がか
った帽子型の円盤が西方に無音で移動
しているのが見えた。飛行機と衝突し
そうになった瞬間、円盤は上方に避け
て重井町の方角へ姿を消した。大きき
は飛行機と同じ。円盤は同夜九時頃ま
た出現。帽子型ひさし部分の前後にオ
レンジ色の灯をともし、ほぼ同じコー
スを飛んでいた。(中国新聞より)

●目撃した物体のスケッチを持つ池田庸子さん。物体の両脇の
2個の黒い部分がオレンジ色に光った箇所。



「何かこのあたり一帯に、円盤の出現ブームが一時あったんですね。」

「え、まあ」

「どういう理由か、見当つきませんか。何かこのあたりに特殊な科学工場は別にないわけですか。」

（隣の二人に向かって）「この辺にはあんまりないな」

「ないですか。何か宇宙人が目を付けそうな」。

（二回爆笑する）

「帽子型の円盤は消えるときにはしだいにスーッと、見えなくなったんですか。」

「いえ。僕の見ただけでは、大体に低くこういう感じ（上開きの大きな放物線を右手で描く）。雲に隠れて見えなくなったんです」

「当日は上空に雲がかなりあったんですね。雲がいっぱいに張り詰めた、どんよりした空ですか。」

「ちょっと明るかった。青空も少しはありました」

「今後も、円盤を日撃するチャンスはあると思いますか。」

「やっぱりあるんじゃないかなと思います」

「円盤を目撃したときの動きはどうでしたか。」

「葉巻型の方は直線みたいな感じ。帽子型の方は少しこんな感じで」（右手でゆっくりと左右にひねって見せる）

「では、下から見る円盤の角度が少し変わったわけですね。」

「砂田さんと向井さんのごらんになったときも、やっぱりそうなっていましたか。」

向井君「早かった」

砂田君「こうなってる」（右手で、左右に振って見せる）

「振り運動ですか。」

砂田君「はい。とたんに遠くに行ったり近くに来たり」。そしてパーッと消えていった。雲の中に吸いこまれた」

「その日撃された円盤はどこから来たと思いますか。」

（ちょっと考えてから）「金星か、木星か？」

「そうすると、他の惑星にも人類がいるような気がしますか？」

「え、まあ」

「砂田さんと向井さんは円盤を日撃する前は興味があったんでしょうか。」

向井君「見る前はなんとも」

砂田君「円盤なんか思ってたし興味なかった」

「お父さん、お母さんはごらんにならなかったんですか。」

「はい。寝とったから」

「お父さん、お母さんは藤松君の話を通じていますか？」

「最初はやっぱり、キツネにつままれたような様子だった」

「ここは山ですか？ 丘ですか？」

「山です。向山むかいやまといって、峠みたいな所です」

「藤松さんの学校での円盤騒ぎはどうでしょう？」

「やっぱり、クラスでもだいたい評判になりました」

「クラスの人はみんな信じてくれていてでしょう？」

「まあ、そうです。中には信じない人もいます」

「藤松さんの趣味はなんですか。」

（ちょっと考えてから）「レコード鑑賞とか、友達とオートバイの話をするとかです」

「スポーツはやりませんか。」

「前にちょっとサッカーを」

「今年に入っては日撃していませんのですね。」

「はい。まだ。砂田君が見ました」

砂田君「一昨日見ました」

「昨日！ それはどこで、どのようにして？」

砂田君「学校の帰り、尾道市で」

「やっぱり帽子型ですか。」

砂田君「いえ。オレンジ色に光っていたんです。三回ぐらい見ました。同じ場所、同じ方向に」

「いつも同じ方向に現れるんですか。」

向井君「はい」

砂田君「一度、カメラを向けたんです

が、フィルムが入ってなかった。ちょうど友達の前で、友達を呼んでそのお母さんと一緒に見ました」

「飛行機のようなものではなかったですか。」

向井君「機体ですか？ いったん止まって、パーッと光った」

砂田君「すぐに光ったな」

向井君「直角に曲がって、パーッと光ったんです」

「藤松さんは昨年は何回見たんですか。」

「四回以上見ました」

「一〇月一日と一九日、それから何日ですか？」

「二三日と、一一月の九日頃」

「それはどのような？」

「僕の家から見ただけですけど、それは少しオレンジがかかった」

「そうですね。胸騒ぎがするというのは、どういう状態ですか。」

「頭も痛くなるし、何かが起こりそうな気持」

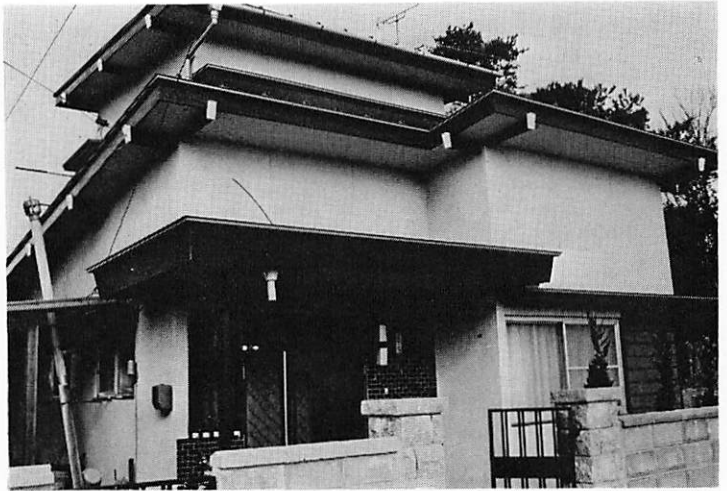
「いらいらするような、いてもたってもいられないような？」

「大体、ドキドキする感じ？」

「ドキドキと実際に心臓が早くなってきましたか。」

「はい」

「去年一〇月に円盤を見るまでは、そのようなことはかつてなかったんでしょうか？」



●藤松君宅。この二階の窓から撮影した。

えて玄関を出るとき、藤松君のお父さんがドテラ姿で奥から出てこられて、ていねいに挨拶をされた。親しみのもてる柔和な感じの人である。丘をくだってバス通りまで見送って下さった。

そのあと尾道市一帯の円盤出現事件を担当された中国新聞尾道支局の真田恭司氏にお会いした。真田氏はこれら尾道市の一連のUFO出現事件に関するかなりの情報を集めておられるとのことである。以下はそのお話。

「今日の話聞いてウソをついているとは思えなかったですね。」

「非常に口の重い子でね。いらんことは言わないです」

「ウソの言えるような子ではないですよね」

「そう思いました。」

「ウソを言ったら、あれだけ取材されて、どこかで話が食い違ってくるはずだと私は思うのですがね。四人の言うことも一貫しておりますね。だからウソを言ってるんじゃないという気がします」

「だから、私もまったくの真実だと思っただけです。このあたりでも、ずいぶん見ておられる方もあられるんですけど、新聞に出たいやだというんで言わなくて」。やっぱり一〇月の一日から二〇日までの一〇日間ぐらいが一番見られた人数が多かったですね」

「一〇月の中旬頃ですね。」

「一度私も見ようと藤松君の所などへ行ったんですが、だめですなあ」

「相当な現象が起こったんですねえ、此の地方一帯に」。

「そうですね。不思議とまあ私の所は地元紙ですから良く（報告が）出ますね、一応。それで聞いてから全部目を通して整理してみると、やっぱり見た時間が完全に符合することはないですな。やっぱり人間のあれでしょうな。時間が少しずれるのですが、話を聞いていると統一性があるんです。色がオレンジ色ということと、ジェット機の二倍ぐらいの速さでスーッと走ってパッと消えると、Uターンして帰ってくる。こういうのが夜の場合、非常に多いのですね。それで昼間の場合は消えるときに、たとえば飛行機だったら山の影に隠れるとか、家に隠れるとかいいますね。それが、雲の中へ溶けたように吸い込まれたりするのでね。そ

して、たいがい四五度ぐらいの角度で飛んでいるんです。このように（鉛筆を斜めにしてみせてくれた）。水平に飛んでいたという目撃談はなかったです。」

飛行機がそのとき飛んでいたという人がおったんです。それで広島空港に聞いてみたくんですが、むこうは頭からわからんと言ったです」

結局、昨年一〇月中旬に備後一帯にUFO出現ブームがあったこと、多数の目撃者がいたにもかかわらず新聞社へ通報しないためにそれらは表面に出なかったらしいことが判明したが、これらの状況からみて藤松君撮影のアダムスキー型円盤と母船の写真はきわめて信憑性が高いということになるようである。

なお藤松君の人物については担任の池田先生が次のように述べられた。

「本人は非常にまじめな、素直な、明るい性格で、信頼のおける人物です」

付記

藤松君とのインタビュー中には話が出なかったが、同君は目撃してから何日か後に、急に無意識に手が動いて紙に奇妙な文字を書くというハプニングを経験したらしいことを別方面から聞いた。この件は面会時に本誌側は知らなかったし、同君も語らなかつたのでテープには録音されていない。UFOとの関連性については不明である。

「そうです」

「そのような例はよくあるんですがね。円盤を見る前に胸騒ぎがするといふことは」。まあ、特別に上空の円盤から何かの放射線を送って、感受性の強い人に何かの合図をしているのかもしれないがね？ よくわかりませんですね。」

「大体よくわかりました。どうもありがとうございました。」

一時間半にわたるインタビューを終

昨年11月9日に英国の科学者が発表したところによると、エンドウ豆程度の大きさの核燃料を使用して他の惑星へ飛行できる有人宇宙船用の反重力モーターを本人は発明しかけているという。

ロンドンの王立工大の電気工学教授エリック・レースウェート氏は、このモーターはジャイロスコープの原理を応用したもので、頂上部が高速で回転して、これが引力に反発すると言っている。ジャイロスコープはすでに宇宙船のガイド用に用いられている。

「このモーターを説明するのは容易ではない。説明できれば他人が開発を試みていたことだろう」と教授は述べた。

レースウェートは、6カ月前、電気会社で働いているエドウィン・リックマン氏が彼のところへそのアイデアを持って来たあと、このモーターの研究を始めた。リックマン氏はその着想が浮かんだあと特許を取った。レースウェート氏はそのアイデアを別な発明家のアレックス・ジョーンズ氏のアイデアと組み合わせた。

まだレースウェート氏の発明は反重力モーターの実用化に至っていないが、53歳のこの教授は11月9日にロンドンの英国王立科学研究所でその原理を発表した。

電気駆動する2個のジャイロスコープが箱の中に入り、そのいずれも中心の軸にとりつけられたチョウツガイ

のついた1本のメタル・アームに固定されている。2個のジャイロスコープを高速で回転させるとアームと共に上方へ浮き上がり、やがて曲がったレールに接触する。するとレールがジャイロスコープを押し下げる。この行程がくり返される。

2個のジャイロスコープが静止しているとき、箱は普通の計量器で9キログラムあるが、回転しているときは6.7キロに減少する。レースウェートによれば、この重量の軽減は回転するジャイロスコープによって生じた重力の減少に相当するのだという。理論的にはこの装置は無重力状態

を生じさせることが可能であると述べた。

この装置をとり

つけた宇宙船は従来のロケット燃料により地球の引力圏から打ち出される。次に反重力モーターを摩擦で痛めることなくし、核エネルギーか太陽エネルギーがジャイロスコープを操作し始めて、宇宙空間を進行するというわけである。

電気的なリニアモーターの発明者でもあるレースウェートは、この反重力モーターも宇宙船にとりつけて、それを静かに着陸させることができると述べている。「人間は水平に進行することに興味はない。常に上昇しがっているのだ」と語っている。(A P=ジャバントイムズより転載権取得済)

反重力モーターで宇宙飛行が可能

ソ連の宇宙飛行士、アレクセイ・レオノフ氏とバレリー・クバゾフ氏は2月10日、米国の宇宙船を発射させるサターン・ロケットを見学した際、7月の米ソ共同宇宙計画は成功するだろうと確信した。

レオノフ飛行士は、「われわれは2年間一緒に働いている。私はアポロ宇宙船もソユーズ宇宙船も飛行の準備が完了していると思う。ケネディ宇宙センターそしてバイコヌール宇宙センターにも非常に優秀な技術者がいるので、私は我々の合同飛行が切実に完了すると確信している。我々は最善を尽くすつもりである」と述べた。

ソ連の飛行士らは飛行における過去の問題点は解決されたと自信を持っている。

来たるべき合同飛行のパイロットであるクバゾフ氏は1971年、ソ連の宇宙飛行士3名が死亡したソユーズ11号の悲劇に関して次のように述べている。

「ソユーズ11号以来、我々は数度の飛行を行っており、ソユーズ11号の問題点すべてはすでに我々が完全に満足のい

くまで解決されたことが明らかである。

ソ連の宇宙飛行士がケープ・ケネディ宇宙センターを訪問し、米国のロケットを調査したのは今回が初めてである。

合同飛行に参加する米国のトマス・スタフォード氏、ドナルド・スレイトン氏、そしてヴァンス・ブランド飛行士らがソ連の宇宙飛行士のサターン・ロケット調査に当たって、彼らを案内した。

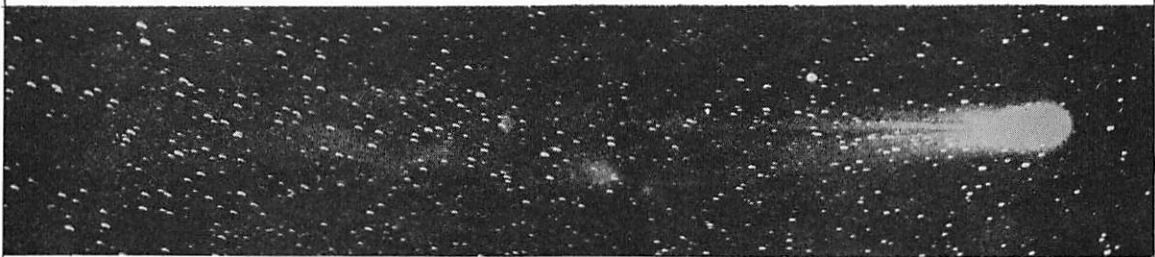
米国の宇宙飛行士は5月にソ連のロケット打ち上げ基地であるバイコ

ヌールを訪れ、ソ連のロケットと宇宙船を見学する。

この米国飛行士らによるバイコヌール訪問はソ連のロケット発射基地を調査することを許可された最初のアメリカ人の訪問となるだろう。しかしソ連政府は発射の際には部外者を入れることを禁じていることから、彼らは発射に立ち合うことはないだろうと思われる。

ソ連の宇宙飛行士らはケネディ・センターの発射設備に非常に感銘を受けたと述べている。

ソ連の宇宙飛行士、米ソ共同計画の成功を確信



東京を騒がせたUFO誤認事件

怪しい物体は手製気球だった

夜空に白く光る物体が——ことし二月一日の夜東京品川区西中延付近に突然、「UFO」(未確認飛行物体)が現れた。警察には一一〇番が、中学生は後を追いかけるなど、一時大騒ぎだったがこの「UFO」を捕えてみたところ、銀紙の中にヘリウムガスを詰め込んだだれかの劣作。テレビでUFOの特別番組が放映された直後の出来事で「いたずらなのか、趣味が高じた研究なのか」——付近住宅はこの話でもち切り。

事の起りは午後八時半頃、荏原署に舞い込んだ一一〇番。品川区中延三、サンポールマンション四階に住む住民から「白く光る変な物体が……」。

荏原署員が空を眺めると、ちょうど羽田に向けて低空を飛ぶ飛行機があったため「多分それだろう」と一件落着いたかにみえた。

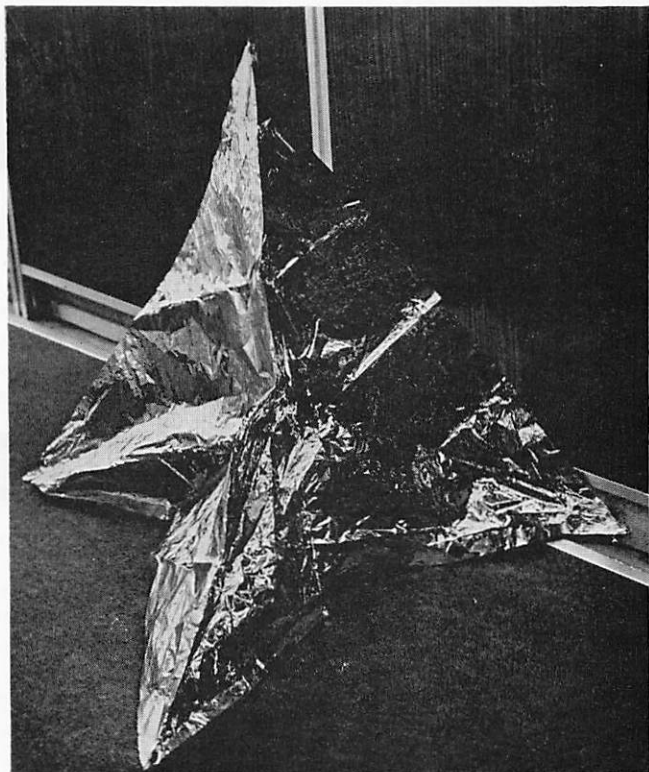
ところが間もなく平塚橋交番から約五〇メートルの所を歩いていた品川区立平塚中学三年、石橋基司君(15)が白く光る物体に後をつけれられ、飛び上がるほど驚いた。フワフワ地上に舞い下りたのでおっかなびっくり手にして交番に持ち込んだ。

銀紙を合わせて作った高さ八〇センチ、横八〇センチの三角錐。三角錐のとがった部分に長さ三センチの実験用小型電池がガムテープで張りつけられ三ボルトの豆電球がビカビカ光る仕組みになっていた。とがった部分には黒い砂状の物がビニール袋に入れてくりつけられてオモリのようになり、タコ足にみせかけた長さ一メートルのつり糸も。

それにしても手の込んだ変な物体。同夜は午後七時半から九時まで日本テレビで「UFO追跡レポート」が放映されたこともあり、同署は「中学二、三年から高校生で近くに住むものものしわざではないか」とみている。(一九七五年二月十四日付、毎日新聞)

* * *

UFOの「正体」は観測気球だった——。一日夜、正体不明の銀紙の風船のような物が東京品川の上空を飛び「UFO」(未確認飛行物体)ではないかと騒ぎになっていたが、一日、都清掃工場建設推進本部(見玉工本部長)の職員が荏原署を訪れ「大気調査のために放った、ノンリフトバルーン(無浮力気球)です」と「自供」し



た。この気球、四二年頃から全国で一〇〇〇個以上を放たれており、各地で起きたUFO騒ぎに関係がありそう。

同本部長は一日夕刊の記事を見てノンリフトバルーンがUFO騒ぎを起しているのに気づき一日朝、職員が荏原署へ。実物を見て「やっぱり」

このノンリフトバルーンは来年着工予定の目黒清掃工場(目黒区三田二丁目、現在、東京工場試験所第六部)が完成した時に、工場の煙突から排出される汚染物質がどのように拡散されるかを事前調査するため、株式会社「公

害気象研究所」(港区北青山一の一の三金清勝応社長)に委託、南隣の都用地から一〇日以来合計九個が放たれていた。一辺一メートルの三角錐でアルミ箔製。一個約一万円。中にヘリウムを入れ、一七〇—二〇〇メートル上空へ別の気球でつりあげて放つ。

騒ぎを起こしたのは一日夜六時一〇分、七時一〇分、八時一〇分の三回放ったものの一つ。

(一九七五年二月十六日付、毎日新聞)
(写真は、地上に降りてしぼんだ姿のノンリフトバルーン)

●連載科学記事

宇宙・引力・空飛ぶ円盤

イギリス工業デザイン協会会員

レナード・クランプ (完)

┌ 空飛ぶ円盤は着陸した!



「空飛ぶ円盤は着陸した！」

この記事を書いているあいだにデズモンド・レスリーとジョージ・アダムスキー共著の「Flying Saucers Have Landed」(邦訳「空飛ぶ円盤実見記」高文社刊)が刊行された。当然のことながら、UFO問題に関する最も驚くべき書物の一つであるこの書について言及するのはこれが最初である。レスリー氏は円盤に関する情報の蒐集に多大の時間をかけたいらしい。彼による円盤の背後にひそむ真実の究明や、サンズクリット古文書の抜粋などは一つの啓示となっている。過去を追求し模索して、そのままにしてしまう人は多いが、レスリー氏はそれ以上の事をやってのけた。氏は測り知れぬ大昔にこの惑星地球の人々によって応用されていたある「力」の存在したことを実際につきとめたのである。しかもそのエネルギーは大昔の人間たちに「ビマーナ(空艇)」と呼ばれる銀色の円形の船で天空を飛ぶことを可能ならしめたという。これはおそらく空飛ぶ円盤だったのだろう。少なくともこの可能性は信じがたいことに聞こえるだろうが、真実というものはときとして信じがたいものである。レスリー氏はメンゼ

ル博士さえも納得させるかもしれないような真実の円盤事件を豊富に引用している(注「メンゼル博士は米国の天文学者。円盤否定論者として名高い」。その書物を読むならば、この太陽系が他の生命体でもって活気を呈していると感じないわけにはゆかない。たしかに知恵の遅れた子供なのは我々地球人である。考えさせられるのは、もし人間がロケットで宇宙空間へ飛び出せるほどのすぐれた燃料を発見するならば、少なからぬ衝撃的な事実が展開するかもしれない。その日が来るならば、人間は自分よりもはるかに進歩した人類の存在を知ることになるだろう。科学的にばかりか神のような精神的進化をとげた人類を——。それはいつの日か我々自身の天性ともなるであろう。

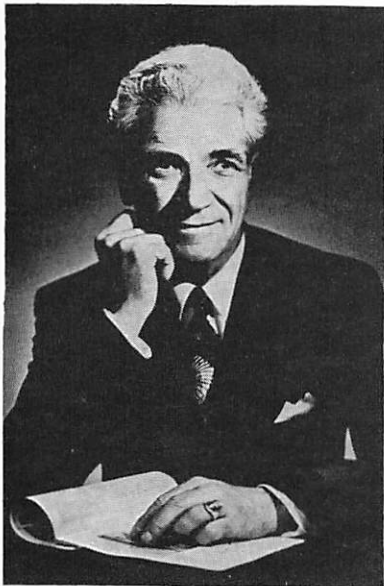
レスリー氏の物体浮揚及び、音響と円盤の動力との関係に関する記事は、筆者がすでに本稿で裏付けした。

考え深い人でジョージ・アダムスキー氏の体験を羨望しない人はほとんどいないが、この体験を否定する人が多数いるにもかかわらず、ア氏が特権を与えられた人で、単なる偶然による

ものではないことを認める人も多くいる。金星人との会見は偶然ではなかったように思われる。地球の上空から下界を観察しているあの「人々」は、カリフォルニア州パロマー山腹の孤独な忍耐強い男が、いかなる天候をもととせずに夜ごと六インチ望遠鏡を駆使して空を凝視し、円盤と呼ばれる物体を撮影しようと束の間のチャンスをつねらっている姿を、観察していたのだ。このような耐力とまじめな目的を持つ人は、その信念が報われるべきだと、上空の「人々」は考えたであろう。そして哲学者で天体観測家であったジョージ・アダムスキーは金星から来た「人間」と会見して語り合ったのである。人間ではあるが我々からみれば神に近い人である。アダムスキー氏はそのときの模様を次のように述べている。

「我々の寸法に従って言えば身長は約五フィート六インチ(約一六五センチメートル)、体重は約一三五ポンド(約六一キログラム)ほどある。私は相手を二八歳くらいと推定したが、もっと年をとっているのかもしれない。

相手は丸い顔をして、非常に広い額をしてい



●故ジョージ・アダムスキー

る。灰緑色の眼は大きくておだやかで、両方の目尻がわずかに上につり上がっている。西洋人よりも頬骨が少し出ているが、インディアンや東洋人ほどではない。鼻もさほど大きくはないが、見事な形である。普通の大きさの口には美しい白い歯が並び、微笑したり話したりすると輝いて見える……顔を剃る必要はないように見えた。子供の顔のように相手の顔にも毛がないからだ。

相手は握手をするような態度で片手を差し出した。私は我々の習慣に従って手を出したが、相手はにっこり笑って拒絶し、頭を少し振った。我々が地球でやるような握手のかわりに、先方は片手の掌を私の掌にぴったりとくっつけた。ただ触れるだけで、固くくっつけたのではない。これは友情のシルシだと私は思った。私の手に触れた先方の手の感触は赤ん坊の手のそれに似ていた。非常にキメがこまやかで、

しかもがっちりして温い。両手はすらっとして長い先細の指がついている。優雅な女性の美しい手のようだ。たしかに、違う衣服を着ていれば、この人は並はずれた美女と間違えられるだろう。だが、たしかに男であった」

更にアダムスキー氏は、偉大な知恵と愛とを持つ人の面前で自分が小さな子供であるかのよう感じたこと、金星人は友好的で彼らが地球へ来るのは核爆発の結果、放射能を帯びた雲が大気圏外に影響を与えることに関心があるためだということも知った、と述べている。

多くの人は（著者も含めて）、核爆発の放射能こそこの宇宙からの訪問者たちが地球で示す新たな関心の主な理由であると信じている。我々の太陽は微妙にバランスのとれた破壊力の集中体であることはよく知られた事実である。いつか爆発して太陽系全体を呑み込んでしまいうようなタイプの星である。

わが物理学者たちは核分裂についてよく知っているが、核エネルギーと電磁気的な太陽黒点の活動との関連については知っていない。

今、本稿が印刷に付せられているあいだも、太陽系の崩壊は刻々とせまりつつある。水爆が「わずかに邪道に入る」ことによって憂うつな警告を与えているのだ。原爆製造にたずさわっている物理学者たちは、警告の理由はほとんどないと信じているが、それは空間と物質の構造に関してもっと多くの事が知られるようになってきた話である。我々がカタストロフィー

●1952年11月20日、カリフォルニア州モハービ砂漠で劇的なコンタクトの発生する直前のアダムスキー（右）と目撃証人の一人、アリス・ウェルズ（左）。



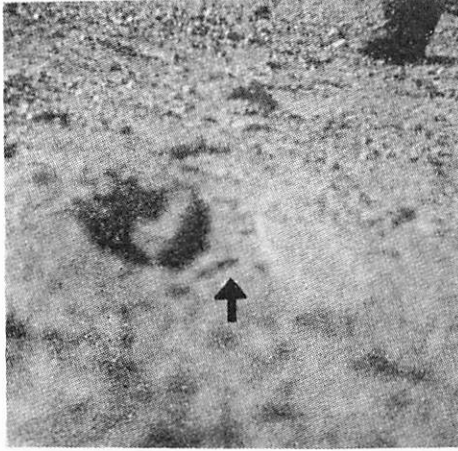
（大破壊）にいかにも近づいたかを知ったとき、心臓がとまる思いをする人が沢山いるだろう。このような意見を述べるに躊躇する（ちゆうちゆう）必要はない。これは名声ある多くの科学者にも聞かせるべきことだ。核エネルギーへの道を開いたアルバート・アインシュタイン博士ですら、核実験について学者に警告している。しかし例のエネルギー的創造放射線の基本的理論を考えてみると、物理学者が「一般人に警告するほどのことはない。地球の質量に比較すれば核爆発などはピンでつづいたぐらいのことだ」と言うとき、その学者を疑うのに有利な立場にある。一体、その物理学者は地球と太陽間に連結媒体が全然ないと確信できるのだろうか？

「友好的になろう」とアダムスキー氏はうなが

す。「他の世界から来る人々を認めて歓迎しよう。彼らは地球人のあいだにいるのだ。我々に多くの事を教えてくれ、我々が受け入れるならば友人になってくれるこの人々から学べるほどに賢明になろうではないか」

会見の終わり頃についてジョージ・アダムスキは言っている。

「私はカメラを取り出して相手の写真を撮ってよいかと尋ねた……相手はことわったので、私はそれ以上言わなかった。別な世界（複数）から来た人々が地球の街路を歩いているということを私は何度も聞いたことがある。これが真実だとすれば、写真に撮られたくないという相手の気持はよくわかる。相手の顔つきには多くの特徴があるからだ……写真に撮ればそれらの特徴は地球へ来る他の兄弟たちを見分けるための



●金星人の足跡

ポイントとして役立つだろう。

地球人が宇宙船で大気圏外へ連れて行かれたことがあるかと相手に尋ねてみた。相手は大きく微笑して、はっきりしない態度で肯定するようにならずいたが、あまりその情報は洩らしたくないようだった」

金星から来た人はそれから円盤に乗り、飛び去って行った。あとにはアダムスキ氏が呆然として残ったが、心から愛する人が去って行って、しかも哀切の念がいつまでも相手のイメージと共に残るような気持に似ていた。

このような証言はたしかに読んだ人に対してさまざまのショックを与えるだろう。多くの考えや既成の学説などが激しく騒ぎ立てるだろう。しかし根本的にはこの体験記は有益である。なぜならそれは多くの狭量な精神の持主を刺激して、生命や宇宙に対するより深い探究心を起こさせるであろうからだ。

もちろんこの途方もない書（アダムスキの体験記）を数頁ひっくり返してナンセンスだと言って放り出す「知識人」もいるだろう。天文学者や宇宙科学ファンのあいだでやかましい議論が起ころう。他の惑星の生命の可能性について多くの論議が集中するだろう。そしてこの太陽系内の生命の存在など到底考えられないと言っただろう。地球以外の惑星に人間は存在できないのだと言っただろう。しかし他の惑星やこの太陽系に対する我々の測定法は完全に正確ではないという考え方に慣れる必要がある。なぜ

●金星人の足跡を石膏にとる一行



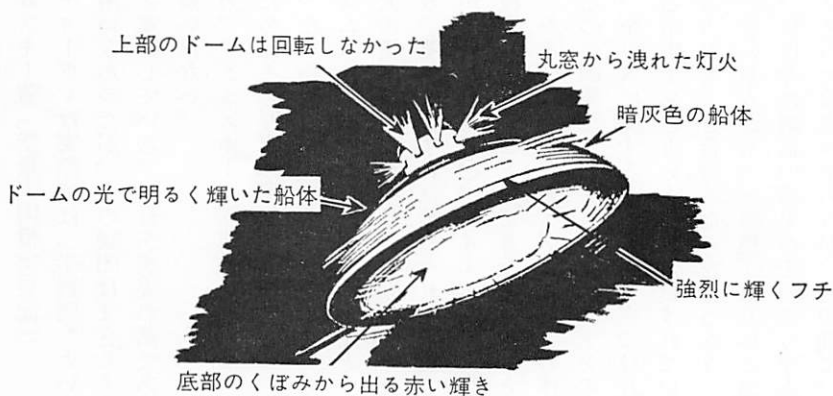
なら我々は二百マイルの厚みを持つ大気圏を通じてそれらを観測しているからだ。その厚いガス帯を突き抜けるときこそ正確な読みがなされるだろう。我々自身の小さな衛星を建造したときこそ他の惑星の真相や状態が確かなるだろう。現在、我々は黒ずんだガラスを通して見ているのだ（注Ⅱこのクランプの原稿は一九五三年頃に書かれたもの）。たとえば我々は他の惑星表面の温度を確実に読みとることはできない。せいぜいその輻射熱を推定できるにすぎない。そして今や空間と物質の理論を研究したかには、存在するかもしれない干渉とそれによる変動、その結果ひき起こされるこの惑星上の観測記録のゆがみ、などは容易に考えられることである。こうしたことを心に留めるならば、他の惑星に我々の知っているような生命はあり得ないなどと言う前に、考えてみる方が賢明だ

ろう。結局、真相は、我々は実際には確かな事を知っていないということなのだ。

話は元へもどるが、ジョージ・アダムスキーの体験記を認めたくない人は次のような理由でそれを拒否するのである。すなわち、この人々（宇宙人）が存在するとすれば、彼らは大昔に大挙して地球へ来ていることだろう。このような（アダムスキーの場合のような）人目のつかぬ個人的会見を行う理由がないと。しかしこの問題を仔細に調べるとわかるように、それは正しくない。もし超現世的な発達をとげた科学に精通した指導者たちがやって来たとすれば、我々の生活の基盤となっている人間の社会という不細工な巨大な歯車はどうなるだろうか？ 彼らはコンタクトの最初の段階においては、きわめて緩慢に地球人に会うように仕向けられているのではないだろうか——現在そうしているのかもしれないように——。これは地球人が彼らの知識を誤用することによって彼らの来訪が地球の社会的経済的な崩壊をもたらさないようにするためであろう。我々が今世紀に与えられているこのファンタスティックな特権が事実であるという証拠が他にもあるだろうか？ ある。証拠は沢山あるのだ。こうなると惑星間を飛ぶ空飛ぶ円盤なるものをまだ認め得ない人が存在することを理解することさえむづかしくなってくる。

ここでもう一度ノーリッジ天文協会（イングランド、ノーフォーク県）のポター氏と他の数

第15図 ポター氏とその仲間が目撃した円盤



名の目撃者によって一九五三年一〇月六日の夜に目撃された物体のスケッチ（第15図）を調べてみよう（注||このスケッチと解説記事は原書の第二章に出てくるが都合により省略したので、あらためて掲げることにする）

「一〇月六日の午後七時一五分にノーリッジで

空を観測中、一個の輝く大きな物体が南西から出現するのに気づいた。大きな黄色の星のようだった。続いて水平飛行をしたが、肉眼で見ると小さな星々のかたまった卵型に見えた。私はチャンスをとらえて、自分の三・五インチの屈折望遠鏡の視野内に物体の焦点を合わせた。

焦点を合わせると、星々のかたまりのような外観は大きな平たい円盤の上にくっついているドームであることがわかった。このドームの周囲には一定の間隔をおいて丸窓が並んでいたがその四つが私の視野に入った。この丸窓群から洩れる灯火によって円盤の状態が見えたのである。上部のドームは回転していなかった。私が観測していた場所からは音が聞こえなかったし、物体は一定の高度を保っていた。円盤の下部にはくぼみが見られ、これがにぶい赤色に輝いている。ガスまたは炎のようなものはない。物体は南西から北東へ進行したが、三分半ほど視界に見えていた。空は一点の雲もない快晴である。あらゆる星座が見えた。この物体は少なくともノーリッジの七名の他の人によって個々に目撃されている。ノーリッジ天文協会と英国天文協会の会員たちである。

ノーリッジにて F・W・ポター

このポター氏のスケッチとアダムスキー氏の円盤写真とを比較してみよう。すると次の結論に達する。ポター氏の報告が正確であるとすれば大衆をごまかすための陰謀が企てられたか、

それともアダムスキー氏の写真類が本物かのいずれかだということになる。両方の物体の形が同じなのだ。

更に言えば、ポター氏は重力場推進方式についてよく知っているのだろうか？ なぜなら、円盤が逆さになって「飛ぶ」可能性は、この推進方式で考えられる現象の一面にすぎないからである。このような飛行物体においては中に乗っている乗員に関連して常にただ一つの「上」または「下」が存在するのである。

これだけでも十分な証拠となるが、アダムスキー氏の体験記を疑う人が早急な結論を出す前に考えるべき事件が他にもあるのだ。

一九五四年二月一五日の午前一一時に、英国コニストンのオールドマン山の頂上で、医師の息子である一三歳のステイヴン・ダービシャーが八歳の従弟のエイドリアンと共に二機の円盤を撮影した。その様子は次のとおりである。
(注||この詳細は本誌〈旧題号「コスモ」〉第6号64頁に掲載済なので省略する)

写真類を比較する前に、右のステイヴンの説明とアダムスキーの説明を比較すると有益である。

「それは美しい小型機だった。台皿型というよりも重いガラス製の鐘のような形である。だが私は機体の壁をすかして中を見ることはできなかった。これは近頃のビルや家屋で用いられるようになったガラス・ブロックをすかして中を見ることができないのと同様である。それは半

透明で、絶妙な色合を帯びていた(ジョージ・アダムスキー著「空飛ぶ円盤実見記」)

ステイヴンは実際には「半透明」という言葉を用いなかったが、その説明はまさしくそのことを意味している。これが真実の話であることに疑いはない。

一方、アダムスキーの写真類についても、専門家たちはその写真が直径約九メートルの物体を撮った本物の写真であると確信している。もしアダムスキーがその写真を捏造したとすれば、実物大の模型を空中に飛ばす必要があったらろうという。そうだとすれば彼はそれに成功したばかりか大西洋を三〇〇マイルも越えた彼方へその模型を飛ばすこともできたということになる。あるいは、たとえアダムスキーの体験を認めるのが困難だとしても、コニストンの写真には、金星人に関する話がインチキではなく、然たる事実であるという確証が含まれていると考える方がもっと合理的なのだろうか？

疑っている人がもっと証拠が欲しいと言うのなら、私自身の調査の結果がそのような人を納得させるのに役立つだろうが、その前に、全貌をご存知ない方のために少しばかり説明をする必要がある。

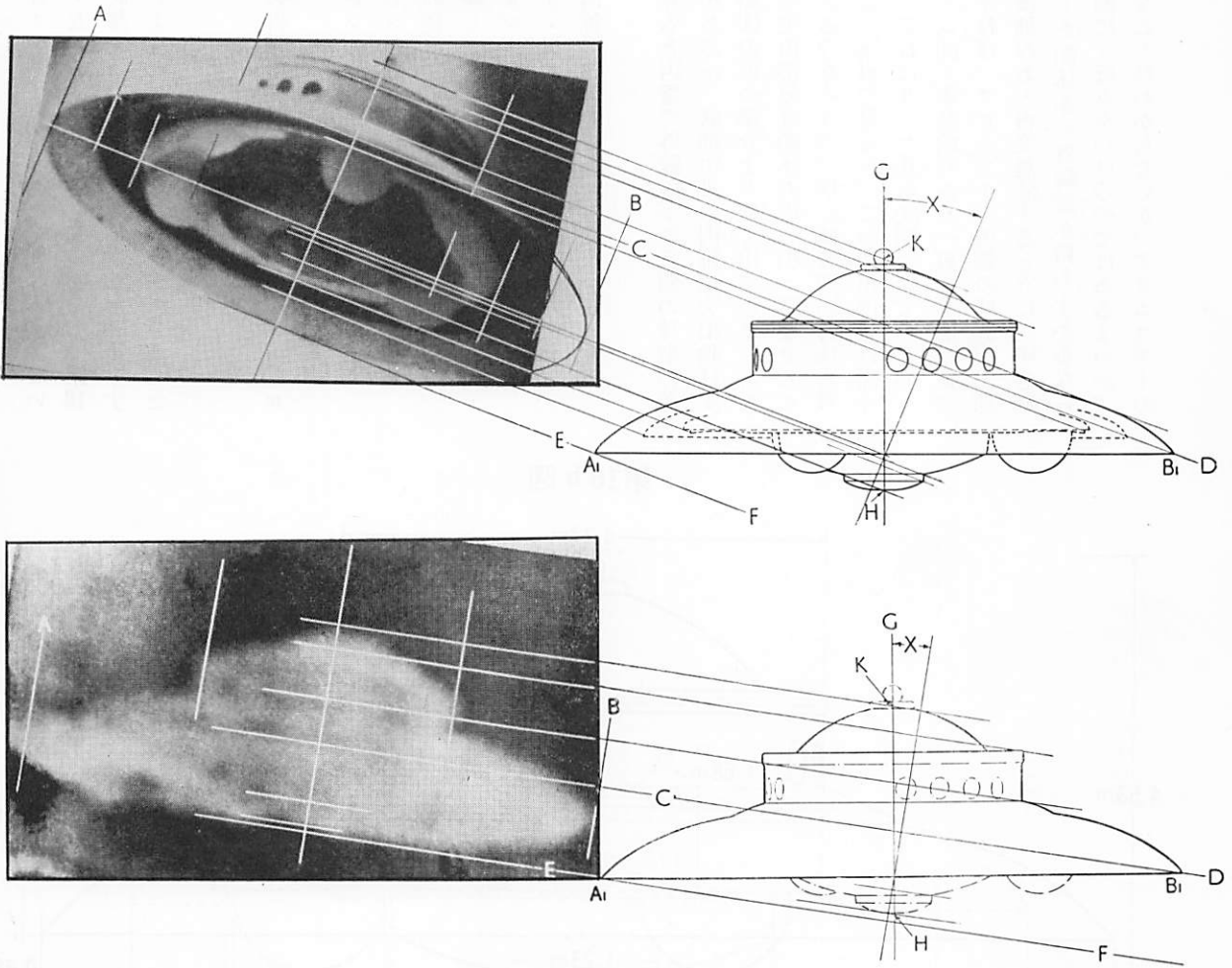
簡単に言うと、一物体の図面からその物体の復元図または模型応用の写真が作れるのと同様に、その手順を逆にすれば写真から正投影図を作ることができる。特に空飛ぶ円盤のような真円形の物体の写真なら容易である。

今アダムスキーの写真とコニストン写真から個々に正投影図を同じスケールで作るとすれば、両方に類似性があることがはっきりわかる。更に両方を重ね合わせると全く同型であることもわかるのである。これが偶然の一致だと言えるだろうか？

もう少し調べてみよう。かりにアダムスキーが模型を作って写真に撮ったとする。その模型は一定の寸法を持ち、ある部分は写真中で遠近法に従うし(垂直の部分がそうである)、従わない部分もある(水平や円形の部分)。この理由は、眼またはカメラに対して物体がどの角度に傾いても、真円は常に観測者に対して最大限または遠近法に従わない直径を呈するからである。たとえばコーヒー茶碗と台皿はそれぞれ直径五センチメートルと一〇センチメートルである。これを撮影した写真で見ると限りでは二つの物体がどれほどの寸法があるかはわからないが、直径の比が二対一であることはわかる。

まず私はアダムスキー撮影の円盤写真をとりあげて、下方の円盤部と上方のキャビン部の直径を測定した。するとこの比は二・二二四対一であることがわかった。次にコニストンの円盤の写真(かなり小さい)を調べると上下の比は二・二三〇対一を示した。私が写真から測定したことを考えると、これはかなり重要な数字である。だが直径の比を調べたにしても、まだ高さが不明である。遠近法に従っているのでこれは少しむずかしい。

第16 a 図 アダムスキー円盤（上）とダービシャー円盤（下）とを比較したクランプによる正投影図



これを調べる方法は図面を研究することによって容易に理解できる。複雑な輪郭を避けるために二点の写真は同じ大きさにしてある。またコニストン写真の構造輪郭はわざと描き込んで修正したように見えるかもしれないが、そういうことはしていない。写真に見える影の部分のディテールはネガの複製の際にとんでしまったのだが、これはアダムスキー円盤の特徴と一致するものである。方法を簡単に説明しよう。

まず 16 a 図を見る。

A — B 遠近法に関係のない直径

C — E 遠近法に関係のある直径

今、紙の端にある距離を置いて A 及び B の二点をとって、その紙を折り返し、二点が二本の線分 CD と EF の各線上の A_1 及び B_1 の所に来るようにすると、これは撮影された角度での円盤をあらわすが、一方から見た長さにすぎない。すなわち直線として示されるのである。これを二等分して直角になるように線 GH を引くと船体の垂直軸となり、これにより真の高さ HK が投影される。角度 X は容易にきまるが、これは撮影時に船体が傾いた角度である。

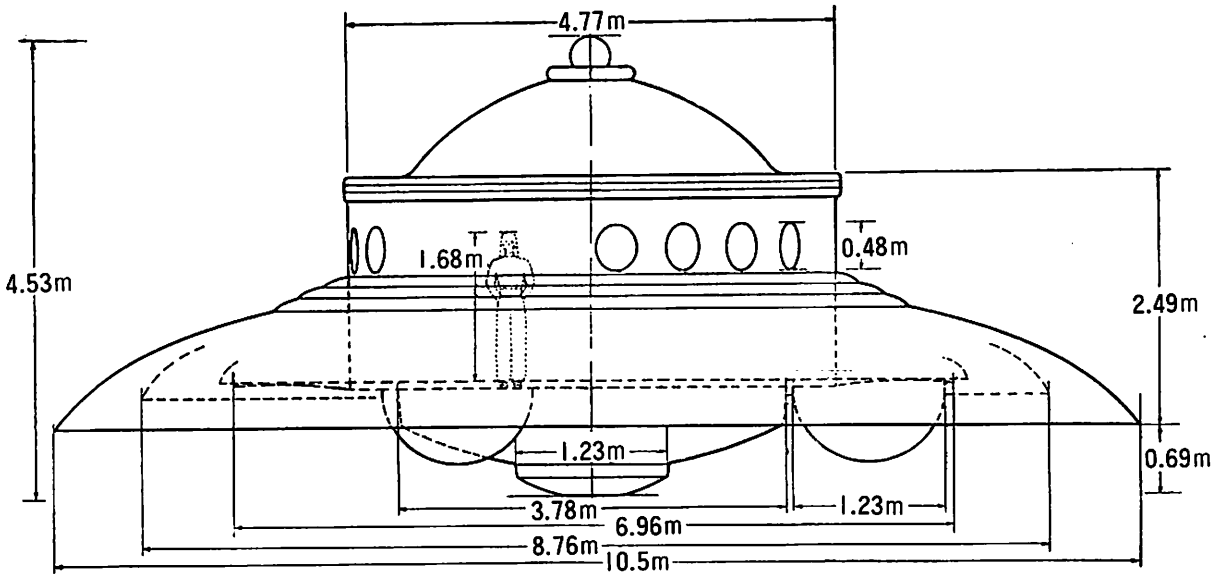
このことから、あとは右の手順の反復でまることがわかる。とにかく、まず写真中に垂直軸と一、二本の水平軸を引くことが必要である。図中で示されるように各位置が確立したら、実物の円盤のかなり正確な投影図ができるのである。作図が終わると各種の興味ある点が明らかになる。

アダムスキーは船体の直径を九メートルないし一〇・五メートルと推定しているので、第16b図の底部を一〇・五メートルとした。そうすると次のような重要な部分の測定ができることになる。

円盤の外縁の径	一〇・五〇m
全高	四・五二
キャビンの径	四・七二
キャビンの高さ	三・一五
丸窓の径	〇・四五
球の径	一・四五
外側リングの径(下部の点線)	八・七五
内側リングの径(下部の点線)	六・九五
底部円錐形物体の径	三・七五

図を見ると円盤の外縁の下に三個の球型の着陸装置があるが、底部中央の円錐型突出物は実際に船体の他の部分より低く出ている。もちろんこの突出部分は船体の中へ引込ませることができるのだから、別な興味深い方法も考えられる。写真で見ると、この突出部分は黒く見える。これはリンケ氏の説明に似ていないだろうか？(注：本誌前号の八一頁を参照)似ているとすれば、アダムスキー円盤の底部突出部分も、接地のあと再度離陸するときに、中心部を底とした船体から外縁部が持ち上がるならば、地面にくぼみをつけるのではあるまいか。たしかなこととはわからないが、アダムスキーの

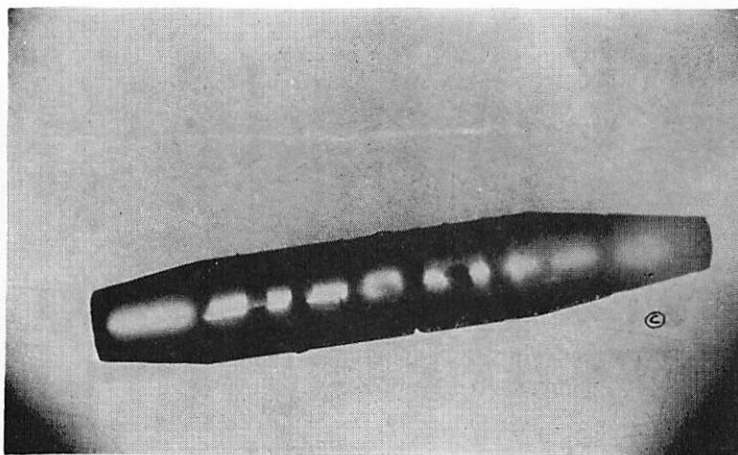
第16b図



説明を検討すると、疑問の余地のない類似性があるのである。

またアダムスキーは金星人の身長を約五フィート六インチ(約一六五センチメートル)と言っている。そこで私は丸窓の上部は眼の高さより上にあると考えた。そうすると内部の床面は写真で見える外縁部のすぐ上になる。そこで次のようになる。もしアダムスキーが模型を撮影したとすれば、前もってスケールをきめておかねばならなかったはずだし、外からしか見えないキャビンの高さを見積もる必要もあつたはずである。彼は一体こんな面倒なことをやったのだろうか？もし模型を写真に撮れば、私がやったようにだれかが正投影法による検査をするだろうと彼は考えたはずなのだ。それとももっと感覚を高めて、コンiston写真と全く同じ写真である点が真実の確証であることを認めるべきか？疑う人のすべてが、二人の子供が円盤を見たところをつき、アダムスキー撮影の円盤の正確な複写を作ったと考えるだろうか？

アダムスキー写真とコンiston写真に関する最後のポイントは次のとおりである。



●1952年5月1日午前7時58分に、バロマー・ガーデンズからジョージ・アダムスキーが6インチ反射望遠鏡を用いて撮影した金星の mothership。四隅の黒い影は望遠鏡の筒によるケラレ。

船体の構造から言える限りでは、船体のある部分は完全なパラボラになっていると付言しておくのは重要であると思う。このことはアダムスキーが電灯の反射笠を撮影したのだといって非難する人々に有利になるといけないので、このパラボラの焦点は船体からかなりの距離に位置することになるとつけ加えておきたい。

以上の事実からみると、もはや疑いの余地はないように思われる。コニストンの目撃やその他の目撃例などからみると、アダムスキーが他の世界から来た宇宙船を撮影したと言うのを真実とする十分な傍証が存在する、ということを確認できるを得ない。

金星人が彼に語った内容は別として、アダムスキーの体験は円盤の推進法に関するより多くの手がかりを提供するのではあるまいか？ たくさん提供するだろう。彼は円盤に接近したときの様子を次のように述べている。

「宇宙から来た友はそれに（円盤に）あまり近寄るなど私に注意した。そして彼自身は機体から三〇センチメートルほど離れて立っていた。しかし私は彼よりももっとと接近して立っていたにちがいない。というのは、振り向いて彼の方へ話しかけようとしたとき、私の右肩が円盤の外縁の端の下に少し入っていて、ただちに右腕が急に上へ引っ張り上げられ、ほとんど同時に下へおいて体にあたったからである。フォースがあまりに強すぎたため、右腕はまだ使用できる状態にあったが、機体から離れても腕に感覚はなかった。

友はこの事故に全く当惑したが、彼は私に注意していたのだから、悪いのは私である。しかし彼はやがてよくなりますますよと言って私を安心させた。三カ月後に彼の言葉が正しかったことがわかった。腕の感覚がよみがえってきたからだ。ただ時々骨にひびが入ったような突き刺すような痛みが起こって、あの事故のことを思い出させた」

このことは静電気の法則によく似ていないだろうか。正電気と負電気は互いに引き合い、正と正、負と負は互いに反発し合うという法則である。

この体験は実際にこのような法則のあらわれだと言うことはできないが、その徴候はある。また、円盤は実際には地面に接触していたのではなく、空間に浮かんでいたという重要な事実もある。荒地は着陸に適していないというのだろうか？ もし着陸していたとすれば、円盤の外縁部が接地して恐ろしい結果になっていたのかもしれない。

再度言うと、円盤の推進法をアダムスキーに教えるとき、金星人は小石をいくつか拾い上げて地面に落とした。これは重力場による運動を意味していないだろうか。

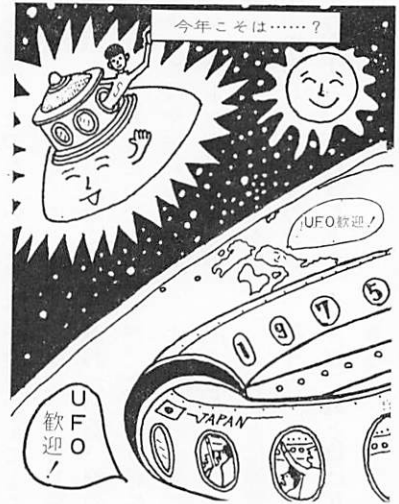
次のようになるだろう。宇宙空間を飛行するにはただ一つのうまい方法があるということ、宇宙船には普遍的なデザインがあること——それは我々が一般に空飛ぶ円盤と呼んでいる乗物であると！

したがってこれは我々が望むならば我々の栄光ある遺産となるのである。現代の科学でもって生命の神秘を探究すればするほど、多くの驚異を解き明かすことになる。我々は空間と物質の構造を理解するフチに立っている。それを理解すれば創造の神秘も解明できるのだ。この問題の探究は究極の結論に向かって進むだろう。あるいはいつの日か我々は大宇宙というハイウェイを飛んでいるあの輝かしい人々から援助という特権を与えられるであろう。（完）本文中の〈注〉は訳者による

声

OPINIONS

投稿歓迎！編集部「声」係宛



●山崎俊一郎(画)
〒631 奈良県奈良市鳥見町3-26-10 D-503

「UFOと宇宙」10号を以前の Cosmos と比較してま
ず感じたことは充実しているということです。これ
だけの内容の雑誌はそうありません。そして全号を
通して言えることは精力的に活動しているというこ
とです。「UFOと宇宙」を読むとき、実にすがすが
しく感じられるのです。企画も興味本位なものだ
けにとられず、貴社の方針のようなものが感じら
れます。今日、ありとあらゆる分野の雑誌が発行さ
れていますが、その趣味用品のカタログで終わっ
てしまっている雑誌も少なからずあります。そんな中
で「UFOと宇宙」のような雑誌があることは心強
いことです。これからは編集者、その他の皆さんも
頑張ってください。

匿名氏
(〒41 静岡県御殿場市)

Cosmos No.9 では読者の声のページが埋まるほどに
「創刊号を讀んでください」と訴えている人がいる
のだから、再版の発行を一部1000円位で行い
た方がいいのではないのでしょうか。限定版でもい
いから。もしなければ一部3000円だっただ本が
2000円にも、3000円にもハネ上がり、これは
石油危機なんて問題ではないほど大問題になりま
すよ。

(〒21 神奈川県川崎市高津区久末一八五〇)

Cosmos 6号の私の記事(読者の声に掲載)、八東

照神社の巨人の骨のことで、各方面から問い合わせが
あったので誌上を借りてお答えしたいと思います。
寛文七年(一六七七)正月突如鎌倉と共に赤城山
上空に現れたUFOは当神社のある石尊宮附近に到
着し、この洞窟を訪問したか見えたが、しばらく
して西方に飛行したという記録がいくつかの史書に
見えます。このことが沼田城主真田信直に通じたもの
か、洞窟にある遺骨を鄭重に納め、これを御神
体にして神社を造営し権現の称号をおくられたと
する。神社は松井三左衛門が奉行で寛文八年に完成
しているが、その後大正正間に火災で焼失した。地
元後閑村の人々は霊骨の散逸することを憂いて、こ
れをコンクリートの櫃に納めて厳封した。何しろ一
丈(三メートル)余りもあつた霊骨はともこの世
界の者とも思われないので、昔から史書の中の実在
の人を当てはめては見たが、解答にはならなかつ
た。昭和四十七年町の教育委員会、文化財委員がこ
の洞窟の調査をし、霊骨を拝見しようとして議論も
あつたが、地元の反対もあつて取り止めになつた。
そんな訳でこれを見学することは出来なくなつた
が、今でも霊骨を目で見た人は何人も居る。
今八東照神骨部類箱上書によると、
寛文七歳商音吉辰記す
齒骨 二 二十五枚
願骨 七 七枚
股全骨 三 三具半
骨 三 三具半
碎骨 十七 十七枚
體格不具骨 七 三十枚
その他土器のこまき大頭骨もあつたと記されて
いるが、数から見て数人の遺骨のよつてである。

八東懸伝説は十指に余るものがあるが、その中に
八東懸こそ寶を持った鳥人であつたと言ふのが二つ
ある。鳥人は天空を走ることを意味するものだと思
うが、Cosmosの読者から宇宙の巨人の骨ではないだ
ろうか、現地を見たことの手紙も受けていた。
鳥人と言へばこの石尊山の八東懸神社から程遠
からぬ加葉山に天空人が出現している記録がある。加
葉山彌勒寺とは関東屈指の霊場だが、昔、この寺に
集まる修業僧の中の家と云ふお小僧は世にも不
思議な人間であつた。まだ子供なのに部屋が狭くて
困ると言うので、師の禪師は彼のために八畳の間を
与えたが、まだまだ狭いと言ふ。不思議に思つて夜
中にのぞいて見ると驚いた。彼は八畳の坐敷に羽根
を掛け、室一杯の奥の裏にある和尙台と言ふ高い岩
の頂上から天空指し昇天し、「物も残さなかつ
た。このときの姿が天狗であつたので、後に中家尊
として祈られたが、これが有名な加葉山の天狗であ
る。

加葉山は沼田市、上越線沼田駅より12キロメー
トル、八東懸神社は月夜野町、上越線後閑駅より3
キロメートル。
小野 隆

(〒91 13 群馬県利根郡月夜野町石倉一三三二)

始めて、ぼくが小学校2年生のときに円盤を
目撃して以来、宇宙のことに興味を持ち、そして本
誌をたひん菜し讀ませてもらっています。
そのためでしょうか、広い知識も得られ、同時に
今の地球の状態に疑問を持ち始めました。今の地球
の状態は狂っています。これは地球人が一番よく知
っていることなのです。核爆弾など、みづから滅
ぼす物を競争して作っているのです。それも国々を
動かしている偉い人たちが中心となつて。そして、
公害、病気が原因が増す一方です。これらに関
題はみな政治家、国家が悪いから自分たちには関係
ないと思ふ人がいるのですが、決してそれだけで
はなく、皆一人一人の責任でもあるのです。ジョー
ージ・アダムスキーの「空飛ぶ円盤同乗記」の本を
讀ましたので、たぶん、この本の内容に今の狂つた地
球を直す、たぶん、この絶対の方法が記されていま
す。No.7で吉田さんが書かれた内容をマネさせていま
す。

宇宙人と会つてUFOに乗せてもらい船内の長老
と会見する。船内の長老の話では、地球は緑のオア
シスどころかこの太陽系内で最も未開の野蛮な惑星
であつて、地球人は創造主(神)の意思、宇宙の法
則に従わず互いに殺し合い、にらみ合い公害問題を
かかへ不幸な生活を送つていて。だから文化が進歩
の一途をたどらず太古から破滅を繰り返している。

他の惑星では宇宙の法則に従つてみんなが生きてい
るため、貧困はなく幸福で愛に満ちた幸福な生活を
送り、従つて苦痛、悲しみなど存在しない。文明は
進歩の一途をたどり地球をはるかに超越した水
準で大規模な宇宙旅行を行っている。多くの文明の
破滅をどうして黙つて見ていたかということにつ
いては、宇宙人は多くの宇宙人を地球に送り
地球人が宇宙の法則に従うよう勧めてきたが、心
ない人たちがよつて、いつも迫害を受けてきた。そ
れだからと言って宇宙人たちは地球の兄弟に何ら
かの手をくだす権利はなく地球の進歩も破滅も地球
人の選択によらねばならない。地球人の成長をいつ
も陰ながら祈り応援し、見守つているのである、と
いうことが書かれています。
このまま誤つた状態を進めば、ノストラダムスの
予言の通り必ず地球はまた破滅するでしょう。では
もう地球は救われぬのかと思つておられるが、言わ
れるのです。難しいことではなく船内の長老の教
通り、地球人一人一人が創造主の意思、宇宙の法則に
従えば良いのです。No.8で川谷君が書かれたように
創造主と一体化すれば良いのです。
郷内秀夫(18)

(〒10 東京都調布市国領町五十九五)

先日、母の知人が北海道へ旅行して、千歳航空か
ら太平洋洋をタクシーで行つたとき、タクシーの運
転手さんが「これは円盤の基地でだれか近づいてま
せん。焼津にもあるそうです」と言つたそうです。
そして、焼津の地元の方は基地のことを存知ないそ
うですが、北海道の地元の方は存知なそうです。
よく考えてみますと、静岡県と北海道南部で円盤が
多く見られるように、運転手さんの言われたことを
頭から否定することは出来ないと思います。
間接的に聞いたことですので、詳しくわかりませ
ん。もし、このことについて存知の方は、声の欄
に投稿してください。

安慶堂子
(〒91 43 栃木県下都賀郡岩舟町豊岡七五七一)

ヤッタア! 聞いてください。ぼくはついにCosmos
モ別冊UFO写真①を買つたのです。うれしくつ
て、うれしくつて、なんせ一ヵ月2000円の小
使いから1300円も出して買つたんですからネ
ま、まじまじとカバーを見て、感動の一頁を
めくる。さすがに1300円ですね。すばらしいでき
でありました。イッチャマエに英文まで書きやが
つて……失礼!
さて感激するのはこれくらいにいたしまして、
「UFO」つまり「未確認飛行物体」の「未確認」

という言葉に小生、頭を痛めているのであります。「UFO」とは、「IFO」つまり「確認飛行物体」ではないという呼び名ですが、目撃者の大部分はUFOを認識していません。それでは、本当なら「IFO」か「UFO」かわからない場合に「未確認」という言葉が適用されるのではないのでしょうか。UFOと認識した場合はIFOと書いてもよいのではないのでしょうか。

随分混乱しましたが、今日ではこんな話をする必要はありません。最後に、本誌でも友の会のようなものを作ってやらうでしょうか。

本田邦彦(中二)

(十四) 東京都江戸川区北小岩五十一六一七

私たちはたまたまお互いの血がつながっていかなくとも兄弟である。善良な人とは法を守り地道に己の仕事を遂行し、家庭の幸福を考える人を指して、それが、社会人としての仕事の他に私たちは人間としての仕事を意識的に実践しなければならぬ。それは宇宙に目を向けるとのことである。宇宙意識は空を見つめることと自己を見つめることの中から生まれるものである。しかしこの意識の所有および実践をすべての人に頭から強制することはできない。それはあくまでも個々人に対する一つの働きかけであり、目ざめだからである。地球外飛行船およびその住人について考えなくては同時に自分の生き方を問うこともない。これはなんとも神秘的な予感を持ちてゆたたりと行えばよい。もし外見的にひたすら美しい人がいたならば、私たちはその美しさと同等、またそれ以上に人の心も美しくしてやらなければならぬのであろう。お互いが問答によって、互も心もある人間に少しずつ到達していくことが大切なのである。職業、生活意識の中にもう一つの宇宙意識を開花させ、広い主観的客観的視野をもって自然界に望めば、自然のままの存在意義と感動が内蔵されている。人間は動物の義務、つまり生産社会の一部である自己がその社会に奉仕する義務と自己自身そのものの義務をいつても人間相互の中に体現しなければならない。それは人間の最も基本的な姿である。地球では連日のようにどこかで犯罪が起こっている。他の身体や財産を傷つけることは誰かに罪であるが、自己自身、自然界に対する無知または大きな罪はない。地球の大気の汚染だけにとどまらず人間的心灵も汚染してしまつた。この私たちの罪の責任は大きい。親が子に望む最大のことは立派な人間に成長してくれよとあるが、その立派な人間の意味をはき違えている節がある。既成概念では立派な社会人の意味を、文部省の教科書の飾り知識をつめ込むだけよ、子供のような既成の事実にとらわ

れない宇宙に対する心の眼の開花を实践させたいものである。人間でありながら人間のことを知らず、地球人でありながら地球のことを知らないものは年齢、性別を超えて意外に多い。「人間は万物の霊長である」の証言は現代の人間の前では決して当てはまることのない過大評価である。私たちは時間がある限り空を見つめ、円盤人について考えなくてはならない。精神的苦悩はその人を成長させる。真の力、真の美とは財産でもファッションモデルでもない。宇宙に目ざめたい人々の中にいる。私たちの周りにいる小さな子供たちが俗物に成長するのでも、立派な人間(宇宙人)に成長するのでも私たちが望んである。人工的な生活物資に囲まれ喜怒哀楽を人安亮りしている人間は愚かである。これからは個々の人間の発展が私たちの大きな課題である。だから「地球」と大きな声で叫びたいのだ。宇宙意識は人間最高のものであり、普遍的な力である。そして、それは人間を考えると、また人間以外のことを考えるときの大きな基盤となるものであります。

正行(24) 宇都宮気象台勤務
 (十五) 栃木県宇都宮市西原町五三二一三

「UFOと宇宙」愛読者の皆さん、毎号たのしく読んでいます。ところで何号だ、たか忘れましたが、読者の欄で重力場推進機関(反重力)のことをバカにしたようなことを書いてありましたが、その人こそ考え直すべきではないでしょうか。なぜなら向も知らない地球人(宇宙人)から見た場合、S/Fのように一足跳びに超空間移動、四次元、五次元の利用などと無理な話ではないでしょうか。でも重力場推進機関は今、地球で研究されているエンジンではないでしょうか。重力場推進機関は光速までしか出ないとしても決してバカには比べないはずですよ。現在のNASA、ソ連の宇宙船に比べれば、はるかに飛躍しています。超空間移動、四次元、五次元の利用などというのはS/Fだけにしておくべきです。もし宇宙人の援助でもない限りは、また、重力場推進機関をもバカにする人がいるかもしれないまでも書いたらうよ、これは地球上で宇宙へ飛び出す唯一の可能性を秘めたものです。そこで話は変わりますが、「UFOと宇宙」起上をお借りして宣伝したいと思えます。このたびは日本宇宙船研究協会をつりました。まだつくりだしての宇宙船研究会も少ないです。そこで全国のUFOキチガイの皆さん、UFOの到来を待ち続けるよりも、独自の力によって重力場推進機関を完成させ宇宙へ飛び出ませんか。宇宙の方がUFOに

出会う可能性もずつと高いでしよう。会員になりた

(十六) 徳島県東牟婁郡中田町字出口三七一〇

すべての本誌愛読者の皆さん。現在、着々と布石が打たれつつあり、また刑法改正、宇宙が実現されたあかつきは「たにUFO改」宇宙人だ、などというところを、たが最後、合法的にキチガイ(愛造)病院に強制入院させられてしまふ、ということも有りかねません。そんなことは考えられないと思う方がおられるかも知れませんが、最近のスペイン曲行における「部」マスコミの反オカルト・キヤベーンをみてみればわかるかとおり、まるで超能力者を精神異常者であるかのごとく錯覚を与える文章が目受けられるとあります。また現在でも現行法の精神衛生法の根拠として正常な人がキチガイ(に)する。病院に放り込まれている始末なので、

UFO写真集さつ、特に買いました。スバラシイ。この一言に賛じます。それに英訳文が付いているところが、貴社の意図が読み取れるような気がしています。これからも第2集、第3集と発行する予定でしょうか、未公開写真なども出し惜しみなぞせず、に、どんでん載せてください。

さて、ここで一つ貴社および読者諸君にお尋ねしたいのだが、円盤を呼ぶ呪文のようなもの、あれは確実性があるのだろうか。確か「ベントラ、ベントラ、スペース、ビーブル」から地球(日本)、応答願います」と言うのですが、どうも呪のような気がします。実際、僕も随分やりましたが、一度もUFOが現れたことはありません。この点につき専門家および読者の意見を聞きたいと思えます。また、UFOに興味のある女の子、僕と文通しましう。

九 敏行(18)
 (十七) 千葉県千葉市祐光四二六一一五

UFO写真集の63ページに載せている小見出しに左記のように書かれてあります。宮崎県石巻市の中学生、この宮崎県は宮崎県の間違いではありませんか。

叶 健二
 (十八) 京都府舞鶴市長浜 長浜宿舎(一五)

(十九) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(二十) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(二十一) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(二十二) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(二十三) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(二十四) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(二十五) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(二十六) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(二十七) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(二十八) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(二十九) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(三十) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(三十一) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(三十二) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(三十三) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(三十四) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(三十五) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(三十六) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(三十七) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(三十八) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(三十九) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(四十) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(四十一) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(四十二) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(四十三) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(四十四) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(四十五) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(四十六) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(四十七) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(四十八) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(四十九) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(五十) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(五十一) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(五十二) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(五十三) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(五十四) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(五十五) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(五十六) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(五十七) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(五十八) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(五十九) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(六十) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(六十一) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(六十二) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(六十三) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(六十四) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(六十五) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(六十六) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(六十七) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(六十八) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(六十九) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(七十) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(七十一) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(七十二) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(七十三) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(七十四) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(七十五) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(七十六) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(七十七) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(七十八) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(七十九) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(八十) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(八十一) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(八十二) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(八十三) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(八十四) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(八十五) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(八十六) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(八十七) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(八十八) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(八十九) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(九十) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(九十一) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(九十二) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(九十三) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(九十四) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(九十五) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(九十六) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(九十七) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(九十八) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(九十九) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

(百) 東京都府中市長浜 長浜宿舎(一五)

の親しみを深めるのにも効果があるからです。
私は愛用しますが、本誌交換を続らんと非常
に高値で売ってくれ、譲るからと出ているようです
が、これはどのようなわけでしょう。私は定価ま
はそれ以下で譲るのが当然だと思っております。定価以
上の取り引きの糸口となつたのはNo5の某氏です
が、なぜこのような考えを思いついたのか。交換は
ゼットに定価以下にすべきです。文句ばかりに
なりましたが、最後に本誌のご発展を願つてペンを
置く次第です。

（宇野） 東京都荒川区西尾久四一四一八）

私は最近「UFO研究会」を結成した者ですが、
選書、会報発行法、資料確保など、いろいろと迷っ
ています。どなたか私の会に協力をお願いします。
また、当研究会にぜひ参加をお願いします。某人の
参加を希望します。

（宇野） 岡山県倉敷市玉島柏島七〇三〇 UFO研
究会事務所

UFOや宇宙に興味のある方は、僕たちの会に入
りませんか。僕たちも、僕たちも2/3人ばかりで、ぜ
ひ会に入ってください。詳しくは往復ハガキでおた
よりください。会の内容を教えます。栃木県外の人
にお願します。なぜなら、もっと遠く79資料が欲
しからです。おたよりお待ちしています。

（宇野） 栃木県矢板市山田二一〇四）

コスモNo9に掲載しました私の目撃報告に補説と
訂正の所がありましたのでお知らせします。
90ページのUFOの編隊飛行の図は上、または下
から見図です。それから飛行継続時間は20秒では
なく40秒です。
（宇野） 埼玉県熊谷市北町四一〇一三三）

★譲ります

●コスモUFO写真集をコスモ創刊号とNo2の2冊
と交換いたします。
佐藤謙次（宇野） 千葉県松戸市大谷口六三二 電0
4731-1420（216603）

●コスモ創刊号を2000円で購入します。
水谷宗弘（宇野） 大阪府柏原市旭ヶ丘二一三三
●コスモ創刊号、No2、No4を各2000円です。ま
たNo5、No6、No8を適価で。ほかに潮文社「私は
宇宙人を見た」1統、私は宇宙人を見た」高文社

「空飛ぶ円盤のすべて」を各600円。以上のもの
は全部美本です。連絡は20日切手同封の封書で。
富樫和憲（宇野） 東京都中野区弥生町三三三三三
九 西沢塚方）

●コスモ別冊「UFO写真集」を1000円前後で
は。潮文社「統」私は宇宙人を見た」を3000円、
4000円でどうでしょうか。

●コスモ別冊「UFO写真集」を1000円前後の本、そ
の他13冊、二眼レフ（オリンパス・クイックマチック
ク）など価格交渉、詳しくは往復ハガキでお願いま
す。それから、一眼レフカメラをお持ちの方、譲っ
てくださいます。（ごまかさないでください）

●コスモ別冊UFO写真集①（新品同様）を送料共
に1000円で購入します。ご連絡ください。
高橋賢樹（宇野） 北海道斜里郡斜里町本町四
〇〇九）

●コスモ別冊No4とコスモの別冊「UFO写真
集①」、それに「空飛ぶ円盤見聞記」付けて送料共
に6000円で購入します。ハガキで連絡ください。
小玉謙二（宇野） 東京都八王子市中野町一五三四部
44405）

●コスモNo2、No5まで四冊まとめて送料共に80
00円以上で購入します。（表紙に多少汚れあり）連
絡は往復ハガキをお願いします。

●母 семействаの中学生の方、アルバイトで家計を助け
ている中学生の方々に無料で差し上げます。コスモ
No1、No9、大陣書房全シリーズ既刊金巻、高文社
文久書林などのUFO、異次元物既刊金巻が有りま
す。氏名、学年、生年月日、家庭のことを明記して
お申し込みください。お申し込み多数の折は当方で
任意に配分致します。また春、夏の休みにUFO調
査の手伝いをしてくださる方（アルバイト可）を数
名とめます。場所は紀伊山脈系の安全な山です。

●コスモNo1、No2を送料共に3000円/350
0円位で。連絡は往復ハガキをお願いします。
峯村均（宇野） 04 長野県小県郡丸子町三友田一
四六〇）

●コスモ創刊号、No8を3500円です（送料共）連
絡は往復ハガキにてお願いします

●コスモ創刊号、No8まで一括して譲ります。ご希
望の値段を書いて連絡してください。

●コスモ創刊号、No6を全部まとめて（送料当方負
担）ご希望の価格を連絡してください。

●コスモ創刊号、No5まであり。欲しい人はハガキ
に値段を書いて送ってください。（なるべくまとめて
買ってくださる人）高優先します。発送は代金引
換郵便でします。

●コスモNo2、No9を8冊で送料共に4500円以
上で購入します。早い人を優先します。連絡は往復ハ
ガキで。

●コスモNo4、No7をまとめて10000円（送料
共）でお譲りします。

●コスモ創刊号、最新号までを野口五郎、フォーリ
ー、麻丘ぐみ君のボスター、切り抜きなどど
交換します。会って手渡しできる人に優先して譲り
ます。詳細は往復ハガキにて。

●コスモNo5、No9を各冊3000円（送料をこちら負
担）。一括の場合は13000円。詳しいことはハガ
キで。

●コスモ創刊号、No8まで（バラ売り不可）500
0円。汚れ、破損、赤鉛筆アンダーライン、書き
込み若干あり。

●コスモ創刊号、No3、No4あり。当方も所持して
いたが、只今赤鉛筆、阿々大不況！ あなただの蔵
書にしたいならば、大至急連絡を。

●コスモ創刊号、No3、No4あり。当方も所持して
いたが、只今赤鉛筆、阿々大不況！ あなただの蔵
書にしたいならば、大至急連絡を。

●コスモ創刊号、No8まで全部まとめて送料込みにて120
00円以内で送ってくださる方、左記まで連絡してくだ
さい。（希望の料金支払い方法を明記してください）
本多俊千子（宇野） 東京都千代田区船町三三三
●高文社の空飛ぶ円盤シリーズが円盤に関する本な
らぬので適価でお願いします。
岸田慶朗（宇野） 21 岐阜県不破郡垂井町二八一

●コスモ創刊号、No8まで一括して譲ります。ご希
望の値段を書いて連絡してください。

●コスモ創刊号、No6を全部まとめて（送料当方負
担）ご希望の価格を連絡してください。

●コスモ創刊号、No5まであり。欲しい人はハガキ
に値段を書いて送ってください。（なるべくまとめて
買ってくださる人）高優先します。発送は代金引
換郵便でします。

●コスモNo2、No9を8冊で送料共に4500円以
上で購入します。早い人を優先します。連絡は往復ハ
ガキで。

●コスモNo4、No7をまとめて10000円（送料
共）でお譲りします。

●コスモ創刊号、最新号までを野口五郎、フォーリ
ー、麻丘ぐみ君のボスター、切り抜きなどど
交換します。会って手渡しできる人に優先して譲り
ます。詳細は往復ハガキにて。

●コスモNo5、No9を各冊3000円（送料をこちら負
担）。一括の場合は13000円。詳しいことはハガ
キで。

●コスモ創刊号、No8まで（バラ売り不可）500
0円。汚れ、破損、赤鉛筆アンダーライン、書き
込み若干あり。

●コスモ創刊号、No3、No4あり。当方も所持して
いたが、只今赤鉛筆、阿々大不況！ あなただの蔵
書にしたいならば、大至急連絡を。

●コスモ創刊号、No3、No4あり。当方も所持して
いたが、只今赤鉛筆、阿々大不況！ あなただの蔵
書にしたいならば、大至急連絡を。

●コスモ創刊号、No8まで全部まとめて送料込みにて120
00円以内で送ってくださる方、左記まで連絡してくだ
さい。（希望の料金支払い方法を明記してください）
本多俊千子（宇野） 東京都千代田区船町三三三
●高文社の空飛ぶ円盤シリーズが円盤に関する本な
らぬので適価でお願いします。
岸田慶朗（宇野） 21 岐阜県不破郡垂井町二八一

●コスモ創刊号、No8まで一括して譲ります。ご希
望の値段を書いて連絡してください。

●コスモ創刊号、No6を全部まとめて（送料当方負
担）ご希望の価格を連絡してください。

●コスモ創刊号、No5まであり。欲しい人はハガキ
に値段を書いて送ってください。（なるべくまとめて
買ってくださる人）高優先します。発送は代金引
換郵便でします。

●コスモNo2、No9を8冊で送料共に4500円以
上で購入します。早い人を優先します。連絡は往復ハ
ガキで。

●コスモNo4、No7をまとめて10000円（送料
共）でお譲りします。

●コスモ創刊号、最新号までを野口五郎、フォーリ
ー、麻丘ぐみ君のボスター、切り抜きなどど
交換します。会って手渡しできる人に優先して譲り
ます。詳細は往復ハガキにて。

●コスモNo5、No9を各冊3000円（送料をこちら負
担）。一括の場合は13000円。詳しいことはハガ
キで。

●コスモ創刊号、No8まで（バラ売り不可）500
0円。汚れ、破損、赤鉛筆アンダーライン、書き
込み若干あり。

●コスモ創刊号、No3、No4あり。当方も所持して
いたが、只今赤鉛筆、阿々大不況！ あなただの蔵
書にしたいならば、大至急連絡を。

とアダムスキー」星を射る人」を適価で。まずは
ハガキで連絡を。
熊田俊一（宇野） 神奈川県横浜市宮東海岸二一
三三三〇）

●コスモ創刊号、No9まで9冊まとめて譲り渡し
希望者のみ、希望値段を書いて連絡してください。

●「超心理学入門」（定価6800円）「テレビシ
ン」（定価3500円）「占ひ百科」（定価6800円）
「神秘演進術講座全3冊」（定価50000円）「タ
ロットカード運命占ひ」（定価30000円）以上5
冊を適価で。

●アストロロジー5（6冊組）を（取納ケース、
付品、カメラアダプター付）20000円以上に
てなるべく直接引き渡しのできる方を望みます。

●コスモNo2、No3を各冊15000円以上で購入し
ます。またはこの2冊をコスモ創刊号かコピーと交換
してください。

●だれかコスモNo9を買いそびれた人はいませんか。
新品同様です。送料共4500円です。
渡部祐志（宇野） 84 山形県酒田市中野曾根前田
三）

●コスモ創刊号、No4を2000円前後で。是非お
譲りください。

●コスモNo2、No4まで15000円で売ってください。
連絡を持ってください。

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1、No3を各5000円くらいで。何とぞ
よろしくお願致します。No1、No3は一統ではな
く27号室）

●コスモNo1/No4を譲ってくださる方、希望額はNo1を2500円以内、No2/No4を2000円以内で(みな送料共)譲ってください。ご希望の方、ご連絡は、往復ハガキで連絡してください。

森崎彦(千羽) 大阪府豊中市内東町六一七一(一三)

●コスモ創刊号/No5の各冊2000円以内で譲ってください。

山本正彦(千羽) 大阪府摂津市一津屋五二八一(一)

●コスモNo1/No4を適価で譲ってください。ハガキに直感を書いて送ってね!一冊でも結構です。

青江綺義(千羽)12 岡山県小田郡矢掛町植谷

●コスモNo8から読み始めたばかりです。No5/No7は入手できました。どなたか創刊号/No4までをお譲りくださいませんか。ハガキでご連絡を……。

成田鈴子(千羽) 東京都足立区西新井本町四一四(一四)

●田舎遠い本誌ファンである僕を助けると思っ、どなたか適価でコスモNo1を譲ってください。まずは返信用ハガキで連絡を!

上岡 齊(千羽) 広島県庄原市本町一六〇(九)

●UF Oに關する本を譲ってください。希望の値段を連絡してください。

守屋和美(千羽) 静岡県浜松市吉野町一三四(一)

●UF Oに關する本を譲ってください。価格は手紙で話し合います。早めにご連絡を!価格は手紙で話し合います。早めにご連絡を!

石川 努(千羽)06 群馬県邑楽郡邑楽町篠塚西の根三三九(八)

●コスモ創刊号を3000円(送料共)で、汚れていてもかまいません是非譲ってください。

辻野裕一(千羽) 大阪府堺市東区東町五三〇(八)

●コスモNo2を2000円以内で是非譲ってください。

西田 潤(千羽) 神奈川県横浜市金沢区釜利谷町一七八(一)

●コスモNo2を譲ってほしい。送料は当方負担。少々汚れ、シワは可。

緒方 満(千羽) 神奈川県藤沢市辻堂西海岸二二一(七)

●どなたか高知市内に住んでいらっしゃる方で、コスモ創刊号/No4を数日間借して欲しい。お礼はいたします。是非お願いします。

川村佐登江(千羽) 高知市棧橋通二二七(五)

●コスモNo1/No9までお持ちの方、送料共で4000円以内で譲ってください。なるべくなら汚れ、キズ、破損、落書きの無い物を。まずはハガキで

連絡をください。八木沢加代子(千羽)21 栃木県矢板市末広町五一(六)

●コスモ創刊号を5000円以内で、No2/No4を各1000円以内で譲ってください。まず連絡を待っています。

室谷 隆(千羽) 東京都八王子市野田町一三〇(一)

●東京高専くぬぎだ寮 電042616113067(呼び出し)

●コスモ創刊号/No3をまとめてなら5000円/10000円。各一冊なら創刊号/3000円/No2/15000円/No3/15000円、いずれも追加金可能! 詳細は電話でネ。

中城雄雄(千羽) 神奈川県横浜市鶴見区等谷二一九(一)

●コスモNo2/No3を適価でお譲りください。なるべく5000円以内でお願いします。

古藤浩美(千羽) 鳥根県松江市大海町一四七(七)

●新聞募集! 1974年1月19日付の読売、同年8月14日付読売の大阪版、同年6月25日付サンケイ、同年9月10日付朝日の宮城版などの新聞を1部3000円(送料込み)で譲ってください。その他、UF Oの関係記事の載っている新聞も歓迎します。よろしくお願ひします。

また、高文社の「空飛ぶ円盤同乗記」とLPレコード1枚を差し上げます。どなたか創刊号/No3を全ページ、コピーして送ってください。なお、コピーの実費と送料は当方で負担します。手紙でご連絡ください。お願いします。

佐藤和男(千羽)53 岩手県二戸郡一戸町関屋一五三(一)

●コスモNo2/No4だけがまだありません。どなたか各8000円(送料共)で譲ってください。なるべく新品同様の物をお願いします。連絡は左記へ。

清水和久(千羽)03 栃木県安蘇郡田沼町大字栃木下町二七六(六)

●コスモ創刊号/No2を譲っていただきたい。値段はハガキで交渉。まずは連絡を。本当によろしくお願ひします。

吉村慎一(千羽) 福岡県嘉穂郡穂波町平恒二七(八)

●コスモ創刊号/No4を持っていませんので、持っている方は一冊10000円以内(送料共)で譲ってください。まずはハガキで連絡を。

須田洋一(千羽) 神奈川県横須賀市久村二四〇(三〇八)

●コスモNo1/No4までどなたか譲ってください。できるだけ近い人がよいのですが遠くてもかまいません。値段は往復ハガキにてご連絡ください。こちらの希望としては20000/25000円ですが、それ以上でも。ご連絡ください。

萩原一郎(千羽) 埼玉県大宮市東大宮一(一一)

●電048618315510

●コスモ創刊号をコスモ冊目UF O写真集①と交換してください。または15000円以下(送料共)で譲ってください。連絡は往復ハガキで電話で!

深山 治(千羽)14 千葉県東葛飾郡南町布瀬二七四八(電0471919337)

●コスモNo1/No4がありません。No1を12000円(送料共)以内、No2/No4なら4000円(送料共)以内でお譲りください。

角田正美(千羽) 神奈川県横須賀市野比二九八(六)

●コスモ創刊号/No4が欲しいです。一冊でも結構です。1冊5000円ぐらいでどうでしょう。美本希望。(送料当方負担)

小林文入(千羽)06 鳥取県八頭郡八東町日田

●コスモ創刊号を13000円ぐらいでお譲りください。

伊藤正義(千羽) 宮城県仙台市岩切三所南一三(一四)

●コスモ創刊号を適価でお譲りください。No2との交換でも結構です。

品田芳行(千羽) 神奈川県茅ヶ崎市南湖五一(一八)

●コスモNo2/No4まで各10000円以内で譲ってください。

田原 満(千羽) 川崎市幸区小向三九(昭和荘)

●コスモNo1/No4を譲ってください。値段は相談の上。希望額を書きつけてご連絡してください。

紺野市四郎(千羽) 仙台市荒巻字青葉 宮城教育大学男子寮

●コスモ創刊号/No4までを57000円以内で譲ってください。まずはハガキで電話で連絡を(なるべくキズの無い物)

土屋正彦(千羽) 山梨県甲府市塩部二六一(九電0552152626)

●コスモ創刊号/No7がありません。どなたか3500円前後で譲ってください。一冊でもかまいません。是非お願いします。(送料当方負担)

小池敏郎(千羽) 東京都八王子市初沢町二七七(一)

●コスモ創刊号/No4までを譲ってください。各号10000円以上で買います。急いでいますので電話連絡してください。

新井孝正(千羽) 長野県長野市戸崎町 田中ビル

●コスモNo1/No4までを高価で譲ってください。

山本正彦(千羽) 大阪府茨木市伏木町一八(一八)

●コスモNo1/No4を譲ってください。価額など詳しくは電話、ハガキにて。

神野孝一(千羽)02 山形県東置賜郡川西町吉島三七(電02384412935)

●コスモ創刊号/No4まで、定価それぞれ以下でお願いします。

成田 勇(千羽)33 青森県東郡平内町小湊二五一(一)

●コスモNo2/No3をどなたか送ってください。値段は6000円/10000円程度ですか。まずはハガキで連絡してください。

小林欣也(千羽) 奈良県奈良市西大寺町赤田二(一一三)

●コスモ創刊号、No2、No4を適価でお譲りください。

山泉幹夫(千羽) 横浜市長南区大崎三二四(一四)

●コスモNo1/No4をお持ちの方、各5000円/10000円ぐらいで譲ってください。

上村正隆(千羽) 熊本県熊本市大江町とろく八九六(二〇)

●コスモ創刊号/No9まで譲ってください。電話かハガキで連絡してください。

平 輝(千羽)04 北海道阿寒郡阿寒湖群緑町 電01546772820)

●コスモNo1/No4を20000円以下で売ってください。キズでも可、あまりボロボロはダメ。

吉村和樹(千羽)15 徳島県阿南市新野町宮の久保(四)

●コスモNo2/No4の3冊を16000円(送料共)で。始めにハガキで連絡を(多少の汚れ折れ可)。

出口 智(千羽)04 三重県度会郡玉城町野藤二五(四)

●コスモ創刊号/No4をまとめて譲ってくださる方お便りお待ちしています。

藤野英樹(千羽)25 新見市井倉五三(一)

●あなたの持っている天体望遠鏡を安価で譲ってください。詳しくは手紙で連絡をください。

藤原真一(千羽) 兵庫県神戸市東灘区本庄町一(一四)

●コスモ創刊号/No3を僕が持っている「世界のUF Oのニュース」(1965年版)5冊と交換しましょう。連絡は往復ハガキでお願いします。

松守守人(千羽)63 長崎県北松浦郡吉井町立石免二七九(一)

●どなたかコスモNo1/No4をミノルタ16PS(値段40000円)と交換してくださいませんか。まずはハガキで。

松崎秀章(千羽) 群馬県藤岡市藤岡三二四(二)

●どなたかコスモNo1/No4を僕が持っている「星座写真集」(星野次郎編)恒星社発行15000円)と交換してください。ただし、少キズがあります。連絡は往復ハガキで。(返品不可)

相原貴久(千羽) 神奈川県川崎市川崎区四谷上町二(九一三)

日本超科学会雑誌

超科学

第4号 特集「超科学実験装置の製作」送料共500円

主要記事「UFO探知機の製作」ほか 橋本 健

● 遂に日本にも学会誕生!

今なら入会金1000円、年会費3000円で
誰でも入会できます。

● 会員は下記の品 1割割引!

超心理学実験用機械器具

- 四次元波受信機(4Dメーター) サボテンの歌が聞け、ウン
定価39,000円 送料1,000円 発見機としても使用できます。
- 超心理学実験機(念力測定器・サイメーター)
定価15,000円 送料1,000円 (小型)9,500円 送料500円
- ESPカード 定価500円 送料55円
- 魔法の振り子 定価400円 送料55円

〒248 鎌倉市小町1-15-17 TEL.0467(25)3035
(橋本電子研究所 所長・橋本 健)

日本超科学会

UFOs & SPACE

No. 11 March-April, 1975

Price ¥360

Published by Universe Publishing Co., Ltd.

© 1975 All rights reserved

[Captions for Photographs P.2-P.7]

UFO APPEARING IN AUSTRIA (2 photographs)

Taken by Rudi Nagora of Ingeniende, München, on May 23, 1971. The UFO appeared over a mountain near the town of Graz Steiermark, Austria. The brown object shown in the top left corner of photo 1 descends in photo 2. P. 2

UFOs OVER MT. ASO P. 3

Masashi Yamada, a high school boy of Nagoya, took this picture on Mt. Aso, Kyushu on the night of May 20, 1974. Many high school students who were there on an excursion also saw the strange objects flying over the mountain at that time. This is one of several pictures Yamada snapped there.

UFO? MYSTERIOUS OBJECT SEEN IN WAKAYAMA PREFECTURE P. 4

In the village of Minabegawa, Wakayama Prefecture, Chuichi Maeyama, 27, a company employee, saw a mysterious luminous object flying over the field, and took a picture of it in front of his friend's house on October 3, 1974, at about 8:00 p.m.

FORMATION OF UFOs OVER YAMAGATA PREFECTURE - DID THEY COME OUT OF A MOTHER SHIP? P. 5

On October 18, 1974, at 6:00 p.m., 7 young boys shouted for joy to find about 20 flying objects over Kawanishi, Yamagata Prefecture. Photo A was taken by Tomio Sato, a high school boy who was among them. The objects were seen intermittently for 2 hours, and several small saucers came out of what was like a mother ship, according to Sato. Photo B was taken by Mitsuo Sada, the younger brother of Sato's friend, next night at the same place (from the roof of Sada's house).

ADAMSKI-TYPE SAUCER AND MOTHER SHIP APPEAR OVER ONOMICHI! P. 6-7

These two wonderful pictures were photographed by Kazuhiko Fujimatsu, a high school boy of Onomichi, Hiroshima Prefecture, from his house on October 11, 1974, at about 6:30 a.m. First, he saw a giant cigar-shaped object flying northwest, then an Adamski-type saucer coming in the opposite direction. He hastily snapped 5 shots in succession with his camera (Kodak Instamatic 20). The photographs shown are two of them.

UFO探知機

超高度

国産唯一の本格的磁気探知機!

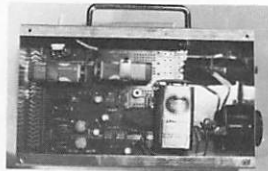
海外の方向磁石機とは異なり、磁気探知コイルを使用。IC 3本、ダイオード 3本、トランジスタ 2本で増巾。直流磁場だけでなく交流磁場の変化もキャッチ。地磁気(0.3ガウス)の1/10の微弱な磁場の変化を確実にマーク!

UFO探索者必携!



日本フィールド・サービスの工藤兼蔵技師と折田至東映監督の共同開発により試作に成功。量産態勢の準備開始!

● 100円切手を同封、下記宛説明書をお申込下さい。



〒213
神奈川県川崎市
高津区長尾1606
折田 至

●No.6 (1974, 5—6月号)

○口絵写真 広島県呉市のU.F.O 長野県郊外のU.F.O 東京・渋谷区の上空の円盤 横浜市ライティング・ライツ 横須賀市のライティング・ライツ 北海道網走のU.F.O 大阪府枚方市上空のU.F.O
日本古来の天空出現説考(完)…科学評論家 齊藤守弘—太平記の“電光”は宇宙船の大激戦?
イベリア半島のU.F.O 着陸事件…ピセンテ・ホアン・パレストル・ホルモス—スペインに発生した100件の実例
円盤の中に連れてこられた男(完)…南山 広一世にも異常なコンタクト事件
エドガー・ケイシーの予言による世界の大変動…常岡理太郎
地球の自転速度が急変! <天空と大地 科学シリーズ4>…東京大学東京天文台 理学博士 飯島重孝—世界的異常気象が原因か
沖縄の「天空人の墓」?
私はライティング・ライツを撮影した…横町 昭
科学トビックス
宇宙・引力・空飛ぶ円盤(1) <連載科学記事>…レナード・クランプ—英国の円盤研究者による謎の推進機関の解明
国内U.F.O目撃報告
読者の声OPINIONS

●No.7 (1974, 7—8月号)

□口絵写真 メナム上空の円盤? 茨城県大宮町上空のU.F.O 福島県喜多方市のU.F.O 星野写真撮影中に出現したU.F.Oの4例 <石巻市・名張市・北九州市・仙台市> 宮崎県のSL上空のU.F.O? 静岡県伊東市に降下した円盤 青森県八戸市のU.F.O 静岡県富士市に出現した円盤
ガルーダの発見…黒沼 健—インドネシアの伝説の謎を探る
大ピラミッドはU.F.O記念碑?…志田真人—大ピラミッド建設の謎とU.F.Oの関係を探る
アルゼンチンの奇怪なU.F.O着陸事件…アルゼンチンU.F.O研究会々長 オスカー・A・ガリンデス—不思議な人影と火焰を噴く円盤
海上に消えた円盤!…ブルジルU.F.O研究会々長 ウォルター・ヒューラー—円盤から手を振る2人の“人間”
○写真 本物のライティング・ライツ?
空飛ぶ円盤はGエンジンか? <天空と大地 科学シリーズ5>…工学博士 橋本 健—2人の学生の反論に対する回答
写真のゴーストはなぜ現われるのか…東京写真助教授 加藤春生
U.F.O=目撃体験・所感・etc (応募記事) U.F.Oのライティング・ライツ?—秋山 陸 私は気象台からU.F.Oを見た—岩崎秀夫 交流電源による点滅光線—藤田孝夫 超光速は可能か—横川秀博 聖書の神は宇宙人だ—天野邦彦 横浜国大にてU.F.O講演会—野中康弘
科学トビックス
宇宙・引力・空飛ぶ円盤(2) <連載科学記事>…レナード・クランプ
国内U.F.O目撃報告
読者の声OPINIONS

●No.8 (1974, 9—10月号)

○口絵写真 大気圏外のU.F.O! 千葉県松戸市のU.F.O 銚子市のU.F.O 阿蘇山のU.F.O群 焼津市の葉巻型? 関門橋上空に出現したU.F.O!
マンテル大尉の悲劇…日本空飛ぶ円盤研究会代表 荒井欣—U.F.O現象史上の大事件の真相を追求
他の天体からの信号、イアン・リドパース
イタリヤの不思議へ小人出現事件…セルジオ・コンティー—不思議な“小型機”と“愛すべき宇宙人(?)”は何の目的でここへ?
千葉県に出現した大型円盤!—本誌特別調査
ネス湖における悪魔ばらいの儀式とU.F.O着陸…F・W・ホリディ—ネス湖の怪物は動物ではない?
またもライティング・ライツ?!—ライティング・ライツ2点の意味するもの

るもの
天体オーラと宇宙電界の謎 <天空と大地 科学シリーズ6>…内田コーポレーション技術研究所長 内田秀男 —万物が放射するオーラと宇宙電界の神秘を探る
科学トビックス
宇宙・引力・空飛ぶ円盤(3) <連載科学記事>…レナード・クランプ—動力のメカニカルなたとえ「創造の一体性理論」
国内U.F.O目撃報告
読者の声OPINIONS

●No.9 (1974, 11—12月号)

○口絵写真 また千葉県に円盤が出現! 横浜市上空のU.F.O? 東京狹江市の卵丸型U.F.O 岡崎市の3機編隊U.F.O U.F.O—清水市で撮影小野川湖上空の細長黒い物体 十和田湖上に円盤が出現?
U.F.Oによる米空軍機追尾事件…翼醇—不思議な光体の出現と3000メガサイクルの受信!
スペインに出現した円盤と乗員…J・アスマス アンヘル・バリゴン—水品のようなドームをつけた“奇妙な物体”と男
ジョージ・アダムスキーはまだ影を投げかけている!…ゴードン・クレイトン—世界中に出現するアダムスキー型円盤の意味するもの
U.F.Oは人類を宇宙へ導いている…中山真理
伝典の中にもあった天空人の地球来訪…志田行賢
大気圏内のU.F.Oの速度…アイリーン・グランチ
狹江市で撮影されたU.F.O
U.F.O情報
東京で「宇宙人特別講演会」開催
地震の謎をにぎるマントル対流! <天空と大地 科学シリーズ7>…東京大学教授 理学博士 竹内均—日本列島はどうなるのか? 地球物理学の楯が警告する
久保田社長、熱海でU.F.O講演
科学トビックス
宇宙・引力・空飛ぶ円盤(4) <連載科学記事>…レナード・クランプ—慣性と遠心力 空中浮揚現象の謎
富山湾上空に謎の白線が出現!
国内U.F.O目撃報告
読者の声OPINIONS
Supplement—追記
編集部より

●No.10 (1975, 1—2月号)

○口絵写真 ワシントン市上空のU.F.O大編隊 霧ヶ峰で写った奇妙な棒状物体 北海道岩見沢市のU.F.O 三宅島の性光体
銀色の服を着た宇宙人…高梨純—ユリ・ゲラーが撮ったU.F.O写真
その他の奇怪な宇宙人(?)写真などを考察する
科学を曲げる男、ユリ・ゲラー…ゴードン・クレイトン—U.F.Oと物理現象との重要な接点がついに出現?
月世界の謎を探る…京都大学花山天文台台長 宮本正太郎—自然現象か、他の原因か 不可解な謎を秘めた月面の意外な事実
NASAの活動と、その未来…読売新聞科学部 中村政雄—イルカの言葉の研究、無人の惑星探査計画、スペース・シャトル建設などで湧きあっているNASA(米航空宇宙局)の全貌を紹介
○写真 木星の最近の素顔
科学ニュース
U.F.O情報
U.F.O目撃レポート
バイオニア11号、木星の電波信号を探る
宮崎県のU.F.O現象を分析する…宇宙U.F.O研究会代表 松田三男
鹿児島で撮影されたU.F.O—サツマ半島はU.F.Oの飛行コースか
宇宙・引力・空飛ぶ円盤(5) <連載科学記事>…レナード・クランプ—空飛ぶ円盤の機構
読者の声OPINIONS

本誌既刊号掲載記事目次一覧表

●創刊号 (1973, 7—8月号)

世紀のUFO—空飛ぶ円盤 UFOは世界中に出現する ケネス・アノルドの目撃 戦争中にも目撃された ラボックの光体群 円盤は他の惑星から来る? 学者の論争 ソ連でも目撃されている やはり存在する

UFO対談—珍しい円盤体験 UFO研究のあり方 未来にける夢など 私はUFOを見た—品山久尚 円盤は夢をもたせてくれる—大辻清司 不思議な現象に関心を持って—小松左京 円盤は実在する。私は何度も見た—横尾忠則

浅間山頂に円盤が出現—2月24日浅間山の山すそに消えたナゾの物体 多条光線を放つ円盤…ゴードン・クレイトン—ミナスセラエス事件 フランスのロテガロンス事件 ウィンゲメア—湖の事件

フランスの怪奇—火の玉UFO事件…F・ラガルド—フランスのビレネ—地帯の農家付近に連続出現した火の玉群と砲弾型物体!

ある夜の怪しい出来事…バートルド・E・シュワルツ—広がっては、引っこんだ光線。空中で止まる光線

科学トビックス
神々の戦車(1)〈連載ノンフィクション〉…エーリッヒ・フォン・デニケーン—スイスの考古学者が次々に明かしてゆく南米のナスカ地方の遺跡のかずかず

●No. 2 (1973, 9—10月号)

○口絵写真 テキサス州シェーマンの円盤 高松市上空の円盤
私は円盤に乗った!…ダニエル・フライ—米科学者の驚異的体験記
ネス湖の怪物とUFO…F・W・ホリディ—ネス湖の上空にしばしば出現する奇妙な物体

類人猿・怪物・UFO…ジェローム・クラーク ローレン・コールマン—巨大なサルのような怪物とUFOとの関係は?

輝く球体が室内に侵入…アルベルト・アデル ベーレ・レドンス—スペインで発生した怪奇な事実

オレゴン州の円盤写真…アドリアン・ヴァンス—写真の分析によるナゾ解き法

UFOの科学的観測法…清水畑 博
1966年ウッドストックUFO祭典(1)…バートルド・E・シュワルツ—米国内で起こった不思議な事実のかずかず

科学トビックス
神々の戦車(2)〈連載ノンフィクション〉…エーリッヒ・フォン・デニケーン—古代スミルの驚くべき技術と知識はだから伝えられたか サハラ砂漠の壁画のナゾ 旧約聖書の物語の真相は?

山形県の怪UFO騒ぎ—市民を騒がせたナゾの光体の出現
国内UFO目撃報告
読者の声

●No. 3 (1973, 11—12月号)

○口絵写真 スイス・アルプスのUFO 千葉県的小型円盤群 北海道のUFO UFO—ライティグ・ライツ

バプア島の円盤騒動(1)ノーマン・E・G、クラットウエル神父—南海の突圍に出現した多数の円盤と手を振る円盤上の人影!

円盤の中に連れこまれた男①—南山宏—世にも不思議なコンタクト事件

1966年ウッドストックUFO祭典(2)…バートルド・E・シュワルツ
東京大地震は発生するか〈天空と大地 科学シリーズ1〉…気象庁研究所 所地震研究部長 諏訪 彰—分析結果は「突如発生してもおかしくない!」

埼玉県羽生市の奇妙な物体
エゼキエルは何を見たか—米航空宇宙局の科学者による旧約聖書のナゾの解明

科学トビックス

神々の戦車(3)〈連載ノンフィクション〉…エーリッヒ・フォン・デニケーン—ギルガメッシュの叙事詩の秘密 突如出現したエジプトの不思議な大文明

山形県の火の玉写真—交通事故に不気味な光体が…
私は円盤を見た…吉宗孝子

国内UFO目撃報告
読者の声

●No. 4 (1974, 1—2月号)

○口絵写真 メルボルン郊外の円盤 秋田県鹿角市のUFO 世田谷の円盤 ジョージア州のUFO 琵琶湖の上空の円盤

日本古来の天空出現説考(1)…科学評論家 斎藤守弘—日本にも宇宙からの訪問があった?

ドラギニャンに出た円盤…ジャン・シャセース フランソワ・モル—円盤が一定地域によく出現する実例

バプア島の円盤騒動(II)…ノーマン・E・G、クラットウエル神父
アルゼンチンの騒くべき瞬間—遠隔移動…アルゼンチンUFO研究会々長 オスカー・A・ガリンデス

1966のウッドストックUFO祭典(3)…バートルド・E・シュワルツ
空飛ぶ円盤は存在する〈天空と大地 科学シリーズ2〉…工学博士 橋本 健—二人の科学者の論争

科学トビックス
神々の戦車(4)〈連載ノンフィクション〉…エーリッヒ・フォン・デニケーン—「島の島」イースター島の巨石像群のナゾ 不思議なマヤ文明の遺跡

編集部より 東京理科大でUFO講演とスライド映写
国内UFO目撃報告
読者の声

●No. 5 (1974, 3—4月号)

○口絵写真 埼玉県狭山市のUFO 星美学園付近に出現した円盤? 北海道のUFO 長野県上田市のUFO 東大阪市のライティング・ライツ

日本古来の天空人出現説考(2)…科学評論家 斎藤守弘—常陸国原谷浜の“異船”は別な惑星から来た宇宙船?

複雑怪奇な点滅光跡の謎…近代宇宙旅行協会会長 高梨純—「自然現象? UFOが描くメッセージ?

円盤の中に連れこまれた男(2)…南山 宏—世にも異常なコンタクト事件

ミシガン州光体目撃事件…アレン・ユートク—沼池のガスかUFOか?
私の目撃体験記…清水畑明、太田博久—アマチュア天体観測家による観測実例

京大文化祭でUFO資料展…興味深いアンケートの回答
太陽エネルギーと水で無限の燃料を!〈天空と大地 科学シリーズ3〉…東京大学生産技術研究所本多研究室 渡辺 正—「夢の燃料“水素ガス”を無限にとり出す世界的大発見

科学トビックス
神々の戦車(完)〈連載ノンフィクション〉…エーリッヒ・フォン・デニケーン—宇宙開発の意義 UFOは実在する シベリアのナゾの爆発は異星宇宙船の衝突か

編集部より UFO関係記事募集
国内UFO目撃報告
読者の声OPINIONS

わが国最初のUFO写真集!

コスモ別冊 絶賛発売中!

UFO写真集①

—UFOファン必携—

¥1300 送料 ¥300

●2冊以上は¥300×冊数

- A4判、94頁、極上厚手アート紙使用、美麗表紙カバー付き豪華本/貴重な資料として長期保存性を考慮、入念に制作。
- カラー写真約20点、白黒写真約30点/本誌よりひとまわり大きい判の左右2頁にわたる大画面からわき起こる圧倒的迫真感!
- 全国の書店で発売中 書店で入手できない場合は本社宛直接ご注文下さい。3万部限定版。
- 第2巻以降も発行を企画中。

★本誌バックナンバー(9号までの旧題号は「コスモ」)

品切れ後は再版しません。未入手の方は早目にご注文を!

第5号(1974年3月発売)	¥330	
第7号(" 7月発売)	¥330	
第8号(" 9月発売)	¥330	
第9号(" 11月発売)	¥400 特大号	
第10号(1975年1月発売)	¥360	

送料	
1冊	¥115
2冊	¥145
3冊	¥175
5冊	¥250

ここに記載していない号は売切れ、絶版。本社には在庫ありません。

本誌とじ込み用

バインダー

¥400 送料 1~2個 ¥300 3~4個 ¥600

- 1カ年6冊分一括保存用必需品。
- 極厚手表紙、布装、表面背共金文字箔押。本社宛直接ご注文下さい。

—本社社員募集—

●下記の要領で社員を募集します。入社希望者は3月末頃までに履歴書と願書を本社社長久保田八郎宛にお送り下さい。

1. 経理部員

高卒以上の男子または女子。30歳位まで。経理関係の経験者に限る。

2. 業務部員

高卒以上の男子。25歳位まで。普通車運転免許ある方。

3. 女子事務員

高卒以上。25歳位まで。

■以上いずれも本誌愛読者で通勤可能な方。

社名変更のお知らせ!

コスモ出版社は本年3月20日より下記の通りに社名を変更しましたから、今後いっさいの郵便物は新社名でお

新社名 ユニバース出版社

願います!

●会社内容は従来どおりです。

■当社刊行物が書店にない場合は、振替・現金書留・小為替・低額切手等で当社宛直接ご注文下さい(収入印紙は不可)。代金あと払いの注文はおことわりします。

〒110 東京都台東区秋葉原3-3、アキバビル

(コスモ出版社改め) 振替 東京119478
ユニバース出版社

●UFO関係記事の原稿も募集
四百字詰原稿用紙(○枚)四〇枚まで。
採用分には原稿をさしあげます。

送り先 東京都台東区秋葉原三の三、
ユニバース出版社UFO資料調査部
アキバビル

送付する。

(6)撮影用具(カメラ)を使用の場合はカメラ名、使用フィルム、レンズ名、絞り、シャッタースピードその他のデータを付記する。

(5)観測機器(使用の場合はその機器名、性能その他を付記する)。

(4)飛行状態(仰角、方向、飛行中の形態の変化、飛行中の色の変化、飛行中の光度の変化、推定速度及び高度、その他)。

(3)物体(飛行物体の形(スケッチを添えること)、大きさ、色、その他)。

(2)目撃場所(地名、付近略図、時刻、天候、目撃継続時間、その他)。

(1)目撃者(住所氏名(できれば本人の写真を添える)、年齢、職業(学生の方は学校名・学年)、電話番号(匿名を希望の場合は本名明記の上、その旨を付記すること) 同時目撃者の有無、その他)。

●UFO目撃報告用参考事項

●UFO(未確認飛行物体)の目撃報告と写真を募集します。左に掲げた各項目を参考に、なるべく正確な詳細な報告をお送り下さい。掲載された分には薄謝を呈します。写真の場合はできればネガもいっしょにお送り下さい。ただし本誌に掲載後に偽作であることが判明してトラブルが生じた場合、本誌は一切の責任を負いませんので、その点をあらかじめご了承下さい。その他、各種新聞雑誌などに掲載されたUFO関係の記事・写真類の切抜きも歓迎します。

●コスモ出版社は三月二十日より社名を「ユニバース出版社」と改称しました。会社内容、振替口座番号その他いっさいは従来どおりです。他社と勘違いしないようご注意ください。ユニバースというのも宇宙の意味です。早くこの社名になじて下さい!











Across the Editor's Desk

●また本号よりダニエル・フライの宇宙科学記事「原子・銀河系・理解」を数回に分けて連載します。高度な哲学的宇宙観を平易に解説した内容です。読者の皆様からも記事原稿を募集しています。上記の要項を参照の上、ふりて応募して下さい。なるべく写真や図を添付して下さい(幸甚です)。(K)

UFOと宇宙 一九七五年四月号 第11号
編集発行人 久保田八郎
(コスモ出版社改め)
発行所 株式会社 ユニバース出版社
〒110 東京都台東区秋葉原三の三 アキバビル
電話(255) 8784(代表)
振替 東京119478
昭和大日本印刷株式会社
(隔月刊・奇数月二十日発売)
定価三六〇円・送料一五〇円
年々購読料・送料共二七〇〇円
(地方の書店で入手できない場合は本社へ直接ご注文下さい)

●本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます。
●海外の記事はすべて翻訳転載権取得済。

スリービーチUFOシリーズ

<p>No.MTZ40S アクロマートレンズ 口径 40mm 倍率 ズーム変倍 15×~40×</p> <p>¥9,000 送料 ¥600 (¥7,200)</p>  <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p>	<p>No.ST60A-UFO アクロマートレンズ D60mm F800mm 倍率 100× 44× 上下微動装置</p> <p>¥27,000 送料 ¥1,000 (¥189,000)</p>  <p>〔天体地上兼用〕</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p>	<p>No.ST63A-UFO アクロマートレンズ D60mm F1,000mm 倍率 125× 55× 上下微動装置</p> <p>¥29,000 送料 ¥1,000 (¥20,900)</p>  <p>〔天体地上兼用〕</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p>
<p>No.ST62A-UFO アクロマートレンズ D60mm F900mm 倍率 112× 45× 上下微動装置 水平微動装置</p> <p>¥34,000 送料 ¥1,000 (¥23,000)</p>  <p>〔天体地上兼用〕</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p>	<p>No.ST67A-UFO アクロマートレンズ D60mm F1,000mm 倍率 125× 50× 上下微動装置 水平微動装置</p> <p>¥39,000 送料 ¥1,200 (¥29,000)</p>  <p>〔天体地上兼用〕</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p>	<p>No.ST420-UFO アクロマートレンズ 短焦点屈折赤道儀 D60mm F420mm 倍率 70× 21× 経緯微動装置 経緯目盛環</p> <p>¥53,000 送料 ¥1,500 (¥41,300)</p>  <p>〔天体地上兼用〕</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p>
<p>No.ST800-UFO アクロマートレンズ 屈折赤道儀 D60mm F800mm 倍率160× 100× 44× 経緯微動装置 経緯目盛環</p> <p>¥52,000 送料 ¥1,500 (¥40,300)</p>  <p>〔天体地上兼用〕</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p>	<p>No.SST600 アクロマートレンズ 屈折赤道儀 D60mm F910mm 倍率150× 73× 45× 経緯微動装置 経緯目盛環</p> <p>¥55,000 送料 ¥2,000 (¥42,000)</p>  <p>〔天体地上兼用〕</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p>	<p>No.SST76 アクロマートレンズ 屈折赤道儀 D76mm F910mm 倍率151× 73× 36× 経緯微動装置 経緯目盛環</p> <p>¥73,000 送料 ¥2,000 (¥55,000)</p>  <p>〔天体地上兼用〕</p> <p>性能 1.5秒・11.2等星・118倍</p>
<p>No.SST80 アクロマートレンズ 屈折赤道儀 D76mm F1,250mm 倍率 208×100× 50× 経緯微動装置 経緯目盛環</p> <p>¥78,000 送料 ¥2,000 (¥60,000)</p>  <p>〔天体地上兼用〕</p> <p>性能 1.5秒・11.2等星・118倍</p>	<p>プリズム双眼鏡(アクリマートレンズ・ケース付)</p> <p>← No.SB1030 倍率10× D30mm ¥12,000 送料 ¥500 (¥8,500)</p> <p>← No.SB1040 倍率10× D40mm ¥13,000 送料 ¥500 (¥9,500)</p> <p>← No.SB1050 倍率 10× D50mm ¥14,000送料¥600 (¥11,000)</p> <p>← No.SB2050 倍率20× D50mm ¥15,000送料¥600 (¥12,000)</p> <p>← No.KB3070 特大型高さ26cm 倍率30× D70mm ¥38,000送料¥1,000 (¥30,000)</p> <p>()内は学生特価 くわしくは 切手180円 同封の上、総合</p> <p>カタログNo.11 お申込み下さい</p> <p>屈折式望遠鏡 反射式望遠鏡 望遠鏡部品 双眼鏡 顕微鏡</p> <p>〒121東京都足立区 東島根町2392</p> <p>K. K. スリービーチ サービスセンター UFO係</p>	



サテライト天体望遠鏡

新発売

60mm屈折赤道儀

MODEL AE-61

定 価 45,000円

荷造送料 2,000円

●光学的性能

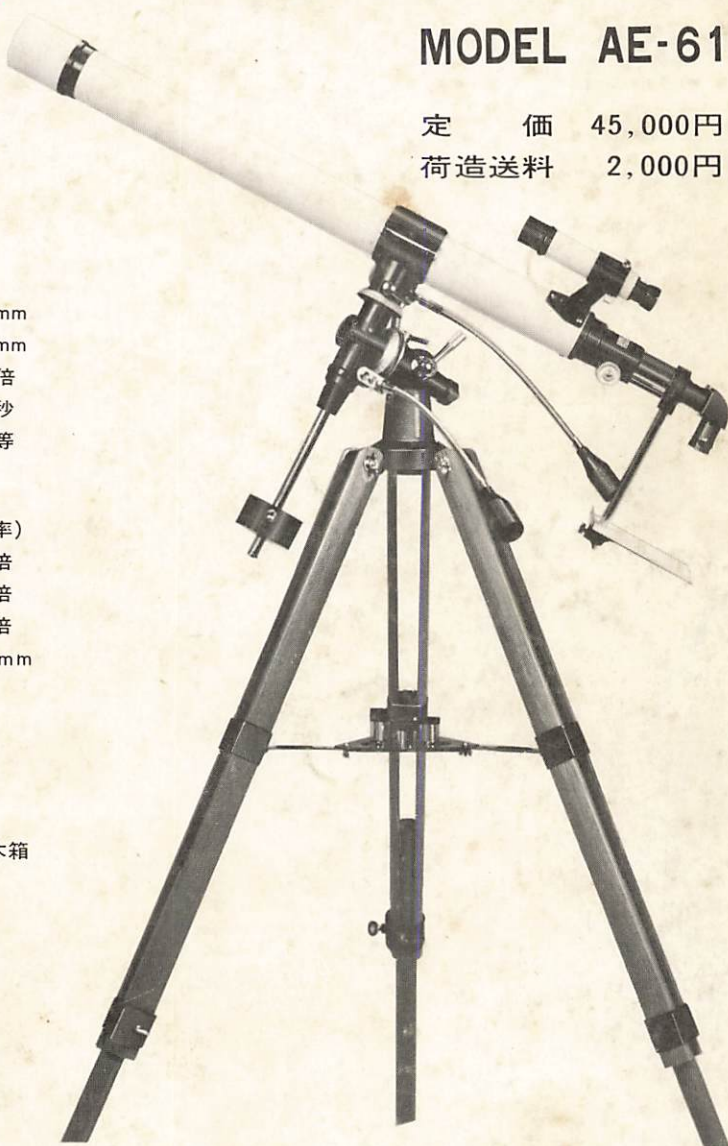
有効径	60mm
焦点距離	910mm
集光力	73倍
分解能	1.93秒
極限等級	10.7等

●付 属 品

接 眼 鏡	(倍率)
HM-6mm	152倍
HM-9mm	101倍
H-20mm	46 倍
ファインダー	6倍30mm
天頂プリズム	
地上用正立プリズム	
太陽投影板	

格 納 箱

発泡スチロール入り木箱



ヤマモトの天体望遠鏡は海外で絶賛を博しております

メーカーからユーザーへ！
通信販売のお知らせ！

●上記の他各種あります。詳しくは115円切手同封の上カタログをU係へ御請求下さい。

株式
会社

山本製作所

東京都板橋区大原町5-3
電話 966-2408 郵便番号 174